川辺遺跡 第10・11・12・13次発掘調査報告書

2 0 1 0

財団法人和歌山市都市整備公社

序文

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置します。本市のほぼ中央部を西流して紀伊水道に注ぐ紀ノ川は、肥沃な和歌山平野を形成し、この平野部を中心として様々な人々が生活を営み、数多くの遺跡が残されています。

近年、本市北東部における地域の開発が進み、一般国道24号バイパス 沿線部分の発掘調査が数多く行われています。特に、今回調査を行いま した川辺遺跡は、広大な水田地帯でありましたが、平成18年頃から大規 模開発計画が起こり、事前の確認調査を初め、約2ヶ年にわたる発掘調 査が行われ、縄文時代晩期の集落の一部や古墳時代、そして飛鳥時代か ら奈良時代にかけての集落が見つかりました。

本書に収めた調査は、一般国道24号バイパス線南東側の店舗建設に伴う第10~13次発掘調査で、縄文時代後期の遺物群や弥生時代中期の竪穴住居、飛鳥時代から奈良時代にかけての水路などが見つかりました。ここにその成果を報告します。

これらの調査成果が地域の歴史認識を豊かにし、埋蔵文化財の保存と 活用に向けた礎となることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご指導、ご協力をいただき ました関係者各位ならびに関係機関の皆様に深く感謝いたします。

平成22年3月31日

財団法人和歌山市都市整備公社

理事長 武 内 切

例 言

- 1 本書は、ヤマイチエステート株式会社が和歌山市川辺字千地237番地他に計画した店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の本報告書である。
- 2 調査は、ヤマイチエステート株式会社の委託事業として財団法人和歌山市都市整備公社が受託 し、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、対象面積約1900㎡を2008年8月25日から 2009年6月16日までの期間で3次に分けて実施したものである。また本調査期間内に和歌山市 教育委員会の調査として第12次調査が計画され、その調査協力を行った。
- 3 埋蔵文化財発掘調査及び報告書刊行に係わる調査体制は以下の通りである。

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局 埋蔵文化財班

班長(学芸員) 北野隆亮

主查(学芸員) 井馬好英(発掘調査担当)

主任(学芸員) 奥村 薫 (調査庶務担当)

- 4 本報告書掲載の遺跡・遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物の写真撮影は井馬が行った。
- 5 本書の執筆は、第10・11・13次調査については井馬が、第12次調査については調査担当者である和歌山市教育委員会学芸員前田敬彦が行った。また本書の編集は井馬が行った。
- 6 本書の作成にあたり、各関係機関の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝の意を表 します。
- 7 本調査において出土した遺物はすべて和歌山市教育委員会の所管であり、財団法人和歌山市都 市整備公社が収蔵・管理している。

凡例

- 1 遺構平面図の基準線及び土層断面図の作成位置に付した座標値は、平面直角座標系(第VI系)に 基づき日本測地系である。また方位は座標北を示す。
- 2 土層断面図に付した水準値は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。
- 3 土層の色調及び土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を 用いた。
- 4 本書で使用した遺構番号は、各調査区を通して連番とし、遺構の略号は以下の通りである。 SB…竪穴住居 SA…柵 P…柱穴 SK…土坑 SX…落ち込み SD…溝
- 5 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 6 遺物の型式及び名称についての参考文献は、出土遺物観察表の凡例に記した。
- 7 本書の作成にあたり下記の文献を参考とした。
 - 『川辺遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター 1995年
 - 「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成13年度-』和歌山市教育委員会 2003年
 - 『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書 -県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に 伴う発掘調査-』財団法人和歌山県文化財センター 2005年
 - 『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』財団法人和歌山市都市整備公社 2008年

本 文 目 次

| 第1章 調査に至る経緯と経過 | (1) |
|--------------------------|------|
| 第2章 遺跡の位置と環境 | (3) |
| 第1節 地理的環境 | (3) |
| 第2節 歴史的環境 | (3) |
| 第3節 既往の調査 | (5) |
| 第3章 調査の方法と概要 | (6) |
| 第1節 調査の方法 | (6) |
| 第2節 調査の概要 | (7) |
| 第4章 調査の成果 | (8) |
| 第1節 第10次調査成果 | (8) |
| 1. 第1区第1遺構面の調査 | (8) |
| 2. 第1区第2遺構面の調査 | (16) |
| 3. 第2区の調査 | (20) |
| 第2節 第11次調査成果 | (21) |
| 1. 第3・4区の調査 | (21) |
| 2. 第5・6区の調査 | (24) |
| 3. 第7区の調査 | (26) |
| 4 . 第 8 ~11区の調査 | (28) |
| 5. 第12・13区の調査 | (30) |
| 6. 第14・16区の調査 | (32) |
| 7. 第15・21区の調査 | (37) |
| 8. 第17区の調査 | (42) |
| 9. 第18区の調査 | (47) |
| 10. 第19・20区の調査 | (52) |
| 第3節 第12次調査成果 | (54) |
| 1. 第22・23区の調査 | (54) |
| 2. 第24区の調査 | (60) |
| 第4節 第13次調査成果 | (63) |
| 1. 第25区の調査 | (63) |
| 第5章 まとめ | (66) |
| 第1節 川辺遺跡内における時期別遺構分布について | (66) |
| 1. 本調査範囲における遺構分布 | (67) |
| 2. 本遺跡内における微地形と時期別遺構分布 | |
| 出土遺物観察表・・・・・ | (71) |
| 報告書抄録 | (80) |

挿 図 目 次

| 第1図 | 調査対象地位置図 | 第46図 | 遺物実測図13 |
|------|----------------------|------|-------------------------|
| 第2図 | 確認調査地区割図(第9次調査) | 第47図 | SD-37·41·43·46~48土層断面図 |
| 第3図 | 川辺遺跡周辺の遺跡分布図 | 第48図 | 遺物実測図14 |
| 第4図 | 本発掘調査地区割図(第10~13次調査) | 第49図 | 第15・21区土層柱状模式図 |
| 第5図 | 調査地土層柱状模式図 | 第50図 | 第15・21区遺構平面図 |
| 第6図 | 第1区土層柱状模式図 | 第51図 | 遺物実測図15 |
| 第7図 | 第1区第1遺構面遺構平面図 | 第52図 | SD-11~13・15・17・19土層断面図 |
| 第8図 | SD-1・2遺構平面図及び土層断面図 | 第53図 | 遺物実測図16 |
| 第9図 | 遺物実測図1 | 第54図 | 遺物実測図17 |
| 第10図 | 遺物実測図 2 | 第55図 | 第17区遺構平面図 |
| 第11図 | SK-9 遺構平面図及び土層断面図 | 第56図 | 遺物実測図18 |
| 第12図 | 遺物実測図3 | 第57図 | 第17区土層柱状模式図 |
| 第13図 | SB-1遺構平面図及び土層断面図 | 第58図 | SD-24・28遺構平面図及び土層断面図 |
| 第14図 | 遺物実測図 4 | 第59図 | 遺物実測図19 |
| 第15図 | 第1区第2遺構面遺構平面図 | 第60図 | SD-10·22·23·25~27土層断面図 |
| 第16図 | 中央セクションベルト土層断面図 | 第61図 | 遺物実測図20 |
| 第17図 | 遺物実測図 5 | 第62図 | 第18区遺構平面図 |
| 第18図 | 遺物実測図 6 | 第63図 | 第18区土層柱状模式図 |
| 第19図 | 第2区土層柱状模式図 | 第64図 | 遺物実測図21 |
| 第20図 | 第2区遺構平面図 | 第65図 | SB-3遺構平面図及び土層断面図 |
| 第21図 | 第3・4区遺構平面図 | 第66図 | 遺物実測図22 |
| 第22図 | 遺物実測図7 | 第67図 | SD-33・35・36及びNR-1 土層断面図 |
| 第23図 | 第3·4区土層柱状模式図 | 第68図 | 遺物実測図23 |
| 第24図 | SK-23・SD-7・3遺構平面図 | 第69図 | 遺物実測図24 |
| | 及び土層断面図 | 第70図 | 第19・20区遺構平面図 |
| 第25図 | 遺物実測図8 | 第71図 | 第19・20区土層柱状模式図 |
| 第26図 | 第5・6区遺構平面図 | 第72図 | 遺物実測図25 |
| 第27図 | 第5・6区土層柱状模式図 | 第73図 | SD-29・30・32土層断面図 |
| 第28図 | SK-18・SD-4・5 土層断面図 | 第74図 | 第22·23区土層柱状模式図 |
| 第29図 | 遺物実測図 9 | 第75図 | 第22・23区遺構平面図 |
| 第30図 | 第7区土層柱状模式図 | 第76図 | SD-56·57·61·62土層断面図 |
| 第31図 | 遺物実測図10 | 第77図 | 遺物実測図26 |
| 第32図 | 第7区遺構平面図 | 第78図 | 遺物実測図27 |
| 第33図 | 第8~11区第1遺構面遺構平面図 | 第79図 | 遺物実測図28 |
| 第34図 | 第8~11区土層柱状模式図 | 第80図 | 第24区土層柱状模式図 |
| 第35図 | 第11区第2遺構面遺構平面図 | 第81図 | 第24区遺構平面図 |
| 第36図 | SD-53土層断面図 | 第82図 | SD-60遺構平面図及び土層断面図 |
| 第37図 | 遺物実測図11 | 第83図 | SK-86遺構平面図及び土層断面図 |
| 第38図 | 第12·13区遺構平面図 | 第84図 | 遺物実測図29 |
| 第39図 | 第12·13区土層柱状模式図 | 第85図 | 第25区遺構平面図 |
| 第40図 | 遺物実測図12 | 第86図 | 第25区土層柱状模式図 |
| 第41図 | SD-38~40土層断面図 | 第87図 | 遺物実測図30 |
| 第42図 | 第14・16区第1遺構面遺構平面図 | 第88図 | SK-87・88及びSD-63~65土層断面図 |
| 第43図 | 第14・16区土層柱状模式図 | 第89図 | 川辺遺跡における調査位置図 |
| 第44図 | 第14・16区第2遺構面遺構平面図 | 第90図 | 主要遺構全体平面図 |
| | | | |

第91図 川辺遺跡における時期別遺構分布図

第45図 SA-1土層断面図

図 版 目 次

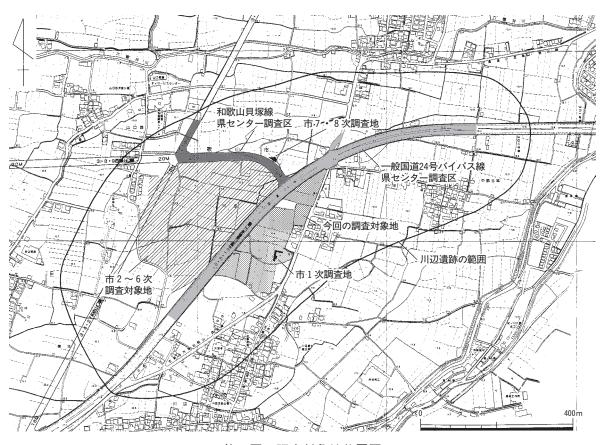
| 図版 1 | 調査地遠景、調査地近景空撮 | 図版38 | 第18区検出の遺構 |
|------|--------------------|------|---|
| 図版 2 | 調査前の状況 | 図版39 | 第18区検出の遺構 |
| 図版 3 | 第1区第1遺構面全景 | 図版40 | 第19区全景 |
| 図版 4 | 第1区第1遺構面検出の遺構 | 図版41 | 第20区全景 |
| 図版 5 | 第1区第1遺構面検出の遺構 | 図版42 | 第21区全景 |
| 図版 6 | 第1区第1遺構面検出の遺構 | 図版43 | 第19~21区検出の遺構 |
| 図版 7 | 第1区第2遺構面全景 | 図版44 | 第4~9区土層堆積状況 |
| 図版 8 | 第1区第2遺構面検出の遺構、 | 図版45 | 第10~16区土層堆積状況 |
| | 第2区全景 | 図版46 | 第17~21区土層堆積状況 |
| 図版 9 | 第1・2区土層堆積状況 | 図版47 | 第22区全景 |
| 図版10 | 第3区全景、第3区検出の遺構 | 図版48 | 第22区検出の遺構 |
| 図版11 | 第4区全景 | 図版49 | 第23区全景 |
| 図版12 | 第5区全景 | 図版50 | 第24区全景、第24区検出の遺構 |
| 図版13 | 第6区全景 | 図版51 | 第22~24区土層堆積状況 |
| 図版14 | 第7区第1遺構面全景 | 図版52 | 第25区第1遺構面全景 |
| 図版15 | 第7区第2遺構面全景 | 図版53 | 第25区第2遺構面全景 |
| 図版16 | 第4~7区検出の遺構 | 図版54 | 第25区検出の遺構、第25区土層堆積状況 |
| 図版17 | 第8区全景 | 図版55 | SD-1出土遺物 |
| 図版18 | 第9区全景 | 図版56 | SD-1・2、SK-9、SB-1・2出土遺物 |
| 図版19 | 第10区全景 | 図版57 | 第1区第6·6b層出土遺物 |
| 図版20 | 第11区第1遺構面全景 | 図版58 | 第1区第6b層出土遺物 |
| 図版21 | 第11区第2遺構面全景 | 図版59 | SD-3·7、SK-21、第3区第4層、 |
| 図版22 | 第12区第1遺構面全景 | | 第4区第3a·6層、第5区第5b層、 |
| 図版23 | 第12区第2遺構面全景 | | 第6区第3·5c層出土遺物 |
| 図版24 | 第13区全景 | 図版60 | SK-53 他、第6 · 7 · 9 · 11~14 · 16区出土遺物 |
| 図版25 | 第14区第1遺構面全景 | 図版61 | SD-37出土遺物 |
| 図版26 | 第14区第2遺構面全景 | 図版62 | $P - 167$, $SD - 13 \cdot 15 \cdot 43$, |
| 図版27 | 第15区全景 | | 第15区第1·4a·5b層、第21区第5層出土遺物 |
| 図版28 | 第16区第1遺構面全景 | 図版63 | SD-13出土遺物 |
| 図版29 | 第16区第2遺構面全景 | 図版64 | SD-13出土遺物 |
| 図版30 | 第11・13・14・15区検出の遺構 | 図版65 | $SD-23 \cdot 24 \cdot 28$ |
| 図版31 | 第15・16区検出の遺構 | | 第17区第2・3・4a・5a層出土遺物 |
| 図版32 | 第17区全景 | 図版66 | SD-10出土遺物 |
| 図版33 | 第17区検出の遺構 | 図版67 | SB-3、第18区第3・4・5層出土遺物 |
| 図版34 | 第17区検出の遺構 | 図版68 | SD-33、NR-1、第19区第 5 層他出土遺物 |
| 図版35 | 第17区検出の遺構 | 図版69 | SD-57·61出土遺物 |
| 図版36 | 第18区全景 | 図版70 | $SD-56 \cdot 62$, $SK-56 \cdot 76 \cdot 81 \cdot 86$, |
| 図版37 | 第18区検出の遺構 | | 第25区第4・5層出土遺物 |
| | | | |

第1章 調査に至る経緯と経過

和歌山市域の東端部にあたる和歌山市川辺及び里周辺に所在する川辺遺跡は、紀ノ川北岸の標高 11.50m前後の沖積平野に立地する遺跡である。この遺跡は東西約1km、南北約650mの範囲をもち、 縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡として知られている。

今回の調査は、川辺遺跡(遺跡番号145)のほぼ中央部に位置する和歌山市里及び川辺地内における一般国道24号バイパス南東側の水田を中心とした地域において開発計画範囲約20,000㎡の大規模な店舗建設が計画されたことを起因とする(第1図)。まずこの計画に伴い和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、遺跡確認の目的で確認調査を実施することになり、平成20年5月1日から同年5月29日までの期間で第9次確認調査を和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社(以下、「公社」という。)が和歌山市から委託を受けて行った。

この調査成果をもとに和歌山市教育委員会が原因者であるヤマイチエステート株式会社と協議を重ね、開発予定地内の深掘部分である擁壁部分及び浄化槽、防火水槽の設置箇所について本発掘調査をヤマイチエステート株式会社の委託事業として財団法人和歌山市都市整備公社が行うこととなった。本発掘調査については、昭和62・63年度及び平成3・4年度に財団法人和歌山県文化財センター(以下、「県センター」という。)が行った一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査(調査面積30,641㎡)及び、平成13年度に財団法人和歌山市文化体育振興事業団(以下、「市事業団」という。)が遺跡の実態解明を目的として行った発掘調査(第1次調査、面積約192㎡)の成果が存在したことから、第9次確認調査成果を含め事前の調査協議が進められた。そして、比較的水路からの湧水が少ないとみ



第 | 図 調査対象地位置図

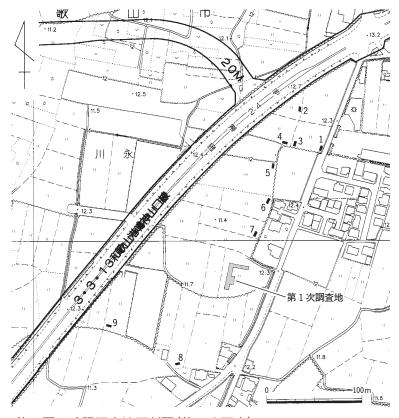
られた第1・2区について第10次発掘調査として平成20年8月25日から同年11月4日までの期間で、その後既存の水路際の擁壁部分を中心とした第3~21区を第11次発掘調査として平成20年10月28日から平成21年2月4日までの期間で実施した。また第11次調査の期間内に第1区の南側における地点において擁壁工事が計画され、この部分の調査を和歌山市教育委員会の発掘調査(第12次調査第22~24区)として行うこととなり、当公社が調査協力を行った。その後、造成工事が進捗した第11区の南側において新たに浄化槽が埋設されることとなり、この部分の調査を第13次発掘調査(第25区)として平成21年5月20日から同年6月16日までの期間で実施した。

この開発計画に際し実施した第9次確認調査は、開発計画範囲約20,000㎡を対象に2×5 m四方のグリッド調査区を9ヶ所設定して実施した(第2図)。調査面積は、94.8㎡である。この具体的な調査内容は、平成22年3月31日発行の『和歌山市内遺跡発掘調査概報』(和歌山市教育委員会)によって報告されている。また今回の第1区と範囲が重複した第1次調査の内容は、平成15年3月31日発行の『和歌山市内遺跡発掘調査概報』(和歌山市教育委員会)によって報告されているので、これらの内容をここでは簡単な概要のみ述べておく。

この第9次確認調査では、第6・7区を除く7区画において様々な遺構を検出し、良好な成果を得ている。検出した遺構面の状況は、第7区の約35m南側に位置する第1次調査地周辺(今回の第1区)が最も遺構面の標高(標高11.00m程度)が高く、北側の第5区に向かって急激に下降する状況にあり、さらに北側の第2区に向かって緩やかに上昇する。このことから、第5区周辺は谷状地形になることが明らかで、この谷部においても水路などの遺構が存在することが確認され、この谷状地形にあたる部分には第5層上面(平安~鎌倉時代)、第6 a層上面(古墳~奈良時代)、第6 b層上面(弥生時代中期~後期)の3面の遺構面が存在することを確認した。また対象地南部の第8・9区で検出

した遺構も、対象地北部と同様の第6a層上面から掘削された遺構であることから第6a層が遺構面としての基本層ととらえることができる。そして第9区で検出した土坑から第5層上面にも遺構が存在する可能性が考えられた。

第1次調査の内容は、調査区 全体が安定した微高地上に位置 づけられ、このベースを構成す る第6層から掘削された弥生時 代中期の竪穴住居2棟などが確 認できた。この第1次調査範囲 の大半は今回の調査区(第1区) に含まれており、新たな成果な ど本報告で記述する。



第2図 確認調査地区割図(第9次調査)(数字番号は調査地区番号を示す。)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

和歌山市は、和歌山県の北西端部に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県岩出市及び紀の川市に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を流れて紀伊水道に注いでおり、その沖積作用によって運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。今回調査を行った川辺遺跡(1)は、紀ノ川の河口から約12m上流の北岸に位置し、和泉山脈の南麓、紀ノ川との間に形成された標高11~12mを測る平野部の微高地に立地する(第3図)。川辺遺跡は、過去の調査によって、遺跡の北西部は和泉山脈から南に張り出した扇状地上に形成されており、また東部や南部及び南西部は紀ノ川及びその支流によって形成された沖積地となることが明らかとなっている。そして遺跡中央部は、この扇状地を形成する砂礫層と沖積作用によって堆積したシルト質土との境界部分となり周囲よりやや低い微低地となる。この扇状地末端の推定ラインは第2~6次調査によって推定されている。

第2節 歴史的環境

周辺の遺跡を概観すると、川辺遺跡が立地する紀ノ川北岸には、縄文時代から江戸時代までの遺跡が平野部及び和泉山脈南麓の丘陵部を中心として数多く分布する(第3図)。

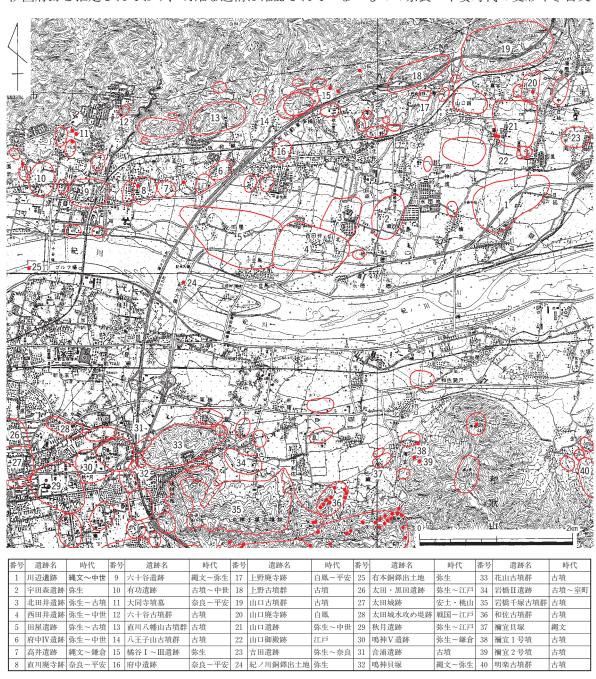
まず縄文時代の遺跡としては川辺遺跡や高井遺跡(7)、六十谷遺跡(9)などがある。和泉山脈南麓の標高約12mを測る段丘上に立地する高井遺跡では、縄文時代のものと考えられるサヌカイト製の凹基式打製石鏃が出土している。また、今回の調査地でもある川辺遺跡では縄文時代晩期の土器棺墓などが見つかり、縄文時代集落の一端を明らかにしている。

次に弥生時代の遺跡については、前期段階の集落遺跡はきわめて少なく、六十谷遺跡で土器や石器が採集されている他、川辺遺跡で前期の土坑が確認され一定量の前期土器が出土している点が注目できる。中期以降の段階になると平野部の微高地上に本遺跡を初め、吉田遺跡(23)、山口遺跡(21)、宇田森遺跡(2)、北田井遺跡(3)、西田井遺跡(4)、田屋遺跡(5)などの集落遺跡が増加する傾向にある。そのうち、当遺跡の北東約1kmにある吉田遺跡では、中期から後期の竪穴住居や壺棺、中期の方形周溝墓などが検出されている。後期の遺跡としては、北田井遺跡や西田井遺跡及び田屋遺跡においてベッド状遺構や貯蔵穴を伴う竪穴住居の他、掘立柱建物、溝、土坑墓や壺棺などが検出されている。また平野部の集落遺跡に対し、標高約90mの山腹に立地する橘谷 I~Ⅲ遺跡(15)は、高地性集落であり、4条の空濠と竪穴住居が確認されている他、近接地から銅鐸が出土している。さらに、紀ノ川の中州(24)においても突線紐式袈裟襷文銅鐸が出土している。

古墳時代の遺跡については、平野部の集落遺跡として吉田遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡、田屋遺跡など弥生時代の集落域と重なるものが多く、集落が継続して営まれたことが分かる。その中で、吉田遺跡では古墳時代前期の一辺約7mを測る大型竪穴住居が検出されている。これらの他、府中IV遺跡(6)や高井遺跡のように、標高約20m前後の段丘上に集落を形成するものもある。府中IV遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居が7棟検出されており、その中で一辺8.6mを測る大型竪穴住居は吉田遺跡検出例も含め注目すべき遺構である。古墳の築造については、和泉山脈南麓の丘陵上に山

口古墳群(19)、上野古墳群(18)、八王子山古墳群(14)、直川八幡山古墳群(13)、六十谷古墳群(12) などがある。六十谷古墳群は、古墳時代前期後半から中期前半にかけて営まれた古墳群である。また、八王子山古墳群は前方後円墳 3 基、円墳17基からなる古墳群である。このうち 8 号墳は直径35 mの円墳で、鋸歯文鏡・鉄剣・鉄槍・鎌・琴柱型石製品・玉類などが出土しており 5 世紀前半の古墳として位置づけられる。また平野部では、北田井遺跡において人物埴輪などが樹立された埋没古墳も確認されている。

歴史時代以降の遺跡については、紀ノ川北岸を東西に推定されている南海道に沿って山口廃寺(20)、上野廃寺(17)、直川廃寺(8)などが建立されている。奈良時代に造営された上野廃寺は、東西両塔を備えた薬師寺式の伽藍配置である。また府中遺跡(16)は、「府中」という地名が残るなど紀伊国府跡と推定されており、明確な遺構は確認されていないものの奈良・平安時代の菱形叩き目文



第3図 川辺遺跡周辺の遺跡分布図

を有する平瓦などが出土している。集落遺跡としては、吉田遺跡において奈良時代の堀立柱建物や 竪穴住居、火葬墓が検出されており、高井遺跡では平安時代の堀立柱建物が検出された他、緑釉陶 器や灰釉陶器、圏脚円面硯などが出土している。

鎌倉・室町時代では、高井遺跡におい掘立柱建物や北宋銭15枚が副葬された土葬墓がみられ、平野部では西田井遺跡において、掘立柱建物群・井戸・池泉などが「コ」の字状の溝によって区画された室町時代の屋敷地が検出されている。

最後に江戸時代の遺跡としては、紀州徳川家の別邸である山口御殿跡(22)が知られている。

第3節 既往の調査

川辺遺跡の発掘調査は、昭和62・63年度及び平成3・4年度に県センターが行った一般国道24号 バイパス建設に伴う事前調査(調査面積30,641㎡)に始まる(第1図)。この調査では、全体的にみて3面の遺構面が検出されている。中でも重要な成果としては、遺跡南西部の地点で飛鳥時代の竪穴住居や大型の総柱掘立柱建物などが検出され、その北側では奈良~平安時代の遺物とともに溝で区画された道路状遺構が確認されている。遺跡中央部の地点では、縄文時代晩期の溝、弥生時代後期の溝、弥生時代後期の溝、弥生時代後期の溝、弥生時代後期の溝、弥生時代後期の溝、弥生時代後期の溝、古墳時代後期~飛鳥時代の掘立柱建物や溝の他、中世の石組井戸などが検出され、遺物包含層から出土した遮光器土偶は注目される。また遺跡北東部の地点では、縄文時代晩期の深鉢を使用した土器棺墓6基や弥生時代中期の竪穴住居1棟、方形周溝墓1基や古墳時代ないしは飛鳥時代の竪穴住居1棟の他、先述の遺跡南東部から続くとみられる道路状遺構が見つかっている。

平成9・12・13年度に同じく県センターが行った県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査 (調査面積約7,400㎡)は、一般国道24号バイパスに取り付く遺跡北西部の調査である。この調査では、それまで見つかっていなかった庄内式併行期の竪穴住居と方形周溝墓が検出され、本遺跡における新しい集落の様相が明らかとなった。また、飛鳥時代の竪穴住居も多数検出され、なかには周囲に溝を巡らす大型の掘立柱建物も含まれている。そして、鎌倉時代を中心とする中世の掘立柱建物や土葬墓なども検出され、中世段階の集落域としても位置づけられる。遺物では、紀ノ川下流の北岸では出土例の少ない弥生時代前期の土器が一括性の高い状況で出土しているのが注目される。

さらに、平成13年度には市事業団が遺跡の実態解明を目的として、遺跡範囲の中央部において発掘調査(第1次調査)を実施している。この調査範囲は今回の調査範囲にほぼ含まれている。

この他、平成18年に一般国道24号バイパス西側に大規模開発が計画され、事前の確認調査(第2・3次調査)を当公社が行い、この成果をもとに平成18・19年度に第4~6次調査として本発掘調査(調査面積約2,250㎡)を実施した。この調査では縄文時代晩期の土器棺墓2基や弥生時代の溝、古墳時代の竪穴住居、飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物の他、鎌倉時代の土葬墓などを確認した。さらに、平成19年度には県道和歌山貝塚線の北側隣接地において当公社が第7・8次調査(調査面積約140㎡)を行った。この調査では、古墳時代の竪穴住居2棟の他、県センターの調査で検出されていた飛鳥時代の掘立柱建物の一部を確認した。

以上の調査成果から川辺遺跡は大規模な複合遺跡と位置づけられ、縄文時代後期以降の様々な集落の様相があり、遺跡範囲の中でも地域差がかなり明確となりつつある。

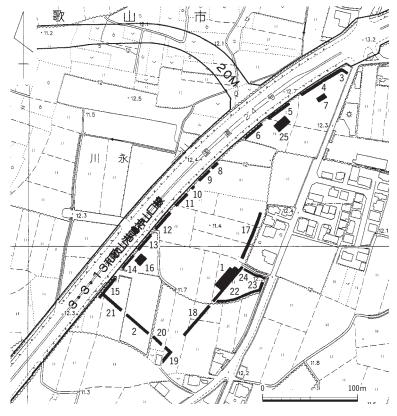
第3章 調査の方法と概要

第1節 調査の方法

今回の調査は、開発計画範囲約20,000㎡の内、第10・11次調査としてほぼ開発計画範囲を囲う擁壁工事路線を対象に幅2.5m前後の調査区を18区画に分け設定した他、浄化槽設置に伴う調査区(第1・7区)と防火水槽設置に伴う調査区(第16区)があり、第10次及び第11次調査を踏襲して第21区までの調査地区番号を付して行った。また第12次調査は、和歌山市教育委員会の実施した調査区で、南東側に突出した敷地の擁壁工事路線部分であり、第22~24区として番号を付した。さらに、第13次調査は開発計画範囲内の北東部において新たに浄化槽が埋設されることとなり、第10~12次調査の追加調査として行ったもので、第25区として調査を行った。

重機による掘削は、先述の調査成果を基に平安時代の遺物包含層である第5層上面まで慎重に行った。人力による調査は、第5層上面の遺構調査と遺物包含層(第5層)の掘削並びに第6層上面の遺構調査を行った後、サブトレンチによる下層調査を行い、工事掘削深度のかね合いから和歌山市教育委員会文化振興課担当者と協議して以下の遺構面の調査を部分的に行った。

図面による記録は、各調査区に仮原点を設置して遺構平面図及び壁面土層断面図(縮尺1/20)の作成を行った。また溝や土坑などの遺構掘削については、土層堆積観察用のセクションベルトを直交するライン上に設け、2層以上の堆積が認められるものは写真撮影及び土層断面実測による記録保存を行った。さらに、遺物出土状況などの図面による記録は、1/10の縮尺を用い手実測で行った。各調査区の仮原点は、1/2500国土基本図及びこれまでの調査成果との照合を計るため旧国土座標軸



第4図 本発掘調査地区割図(第10~13次調査) (数字番号は調査地区番号を示す。)

表 | 調査面積一覧表

| 調査次数 | 調査区 | 面積(m²) | |
|--------|------|--------|--|
| 第10次調査 | 第1区 | 331.4 | |
| 弗10次神盆 | 第2区 | 78.3 | |
| 小 | 小 計 | | |
| | 第3区 | 11.1 | |
| | 第4区 | 134.3 | |
| | 第5区 | 68.0 | |
| | 第6区 | 63.3 | |
| | 第7区 | 44.0 | |
| | 第8区 | 25.8 | |
| | 第9区 | 39.5 | |
| | 第10区 | 13.1 | |
| | 第11区 | 56.2 | |
| 第11次調査 | 第12区 | 70.2 | |
| | 第13区 | 50.5 | |
| | 第14区 | 51.5 | |
| | 第15区 | 62.8 | |
| | 第16区 | 83.9 | |
| | 第17区 | 135.7 | |
| | 第18区 | 100.6 | |
| | 第19区 | 62.7 | |
| | 第20区 | 43.3 | |
| | 第21区 | 70.6 | |
| 小 | 計 | 1187.1 | |
| | 第22区 | 107.3 | |
| 第12次調査 | 第23区 | 16.2 | |
| | 第24区 | 42.5 | |
| 小 | 計 | 166.0 | |
| 第13次調査 | 第25区 | 139.3 | |
| 合 | 計 | 1902.1 | |

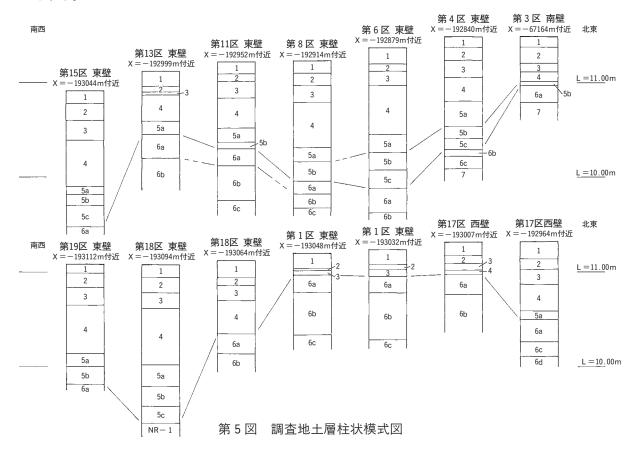
(日本測地系)を基準ラインとして基準点測量を行い、位置図並びに遺構平面図の作成を行った。

土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は国家水準点(T.P.値)を基準とした。

調査面積は、第10次調査が409.7m²、第11次調査が1187.1m²、第12次調査が166.0m²、第13次調査が139.3m²で、その合計が1902.1m²である(表 1)。

第2節 調査の概要

調査地の基本層序については、当財団が行った第2~9次調査の層序を参考として褐色粒を多く含む鎌倉時代の堆積層(第4層)と飛鳥時代から奈良時代を中心とする遺構面のベース層(第6層)を基準層ととらえてこれらの層位関係から堆積した時代を判断し、各調査区の対応関係を考えて層位番号を付した。なお、各層位の堆積時期及び土色・土質に関しては、各調査区によって多少の異なりはみられるものの、概ね次の通りである。まず上位から現代の水田耕作土(第1層)、江戸時代の耕作土(第2層)、室町時代から江戸時代にかけての耕作土(第3層)、鎌倉時代の堆積と考えられる褐色の鉄分粒を多量に含むことを特徴とする堆積土(第4層)、奈良時代から鎌倉時代にかけての堆積土(第5層)、縄文時代後期から弥生時代中期と考えられる堆積土(第6層)の他、部分的に確認した無遺物層と考えられる粗砂層(第7層)に大きく分けられる。ただし、第1層を除く各層位は、2~4単位に細分できる。これらの土層の堆積状況は、各調査区によって土色・土質・土層細分など様々に異なり、一様ではない。このことから、比較的明確な南北方向の大まかな土層及び遺構面の対応関係と微地形の状況を第5図に示し、各調査区の成果において再度その詳細について述べるものとする。



第4章 調査の成果

第1節 第10次調査成果

第10次調査は、調査対象地南東部に位置する浄化槽設置部分とこの浄化槽に取り付く形で設置される擁壁工事範囲を対象とした第1区と既に造成が行われていた南西部の擁壁工事範囲を対象とした第2区がある。

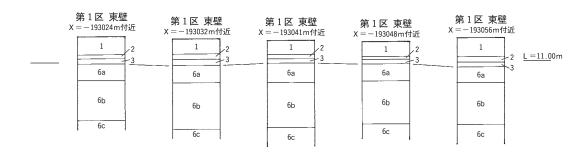
なお、第1区の範囲は、平成13年度に市事業団が行った第1次調査範囲と重複していたことから、 竪穴住居2棟(SB-1・2)など一部の遺構については既に調査が行われていて、今回の調査では遺 構の再発掘とそのベースとなる下層調査が目的であった。このことから、SB-1・2などの詳細に ついては、平成15年3月31日発行の『和歌山市内遺跡発掘調査概報』(和歌山市教育委員会)を参照 されたい。ただし、今回の再発掘において新たな知見を得た部分については本稿でふれる。

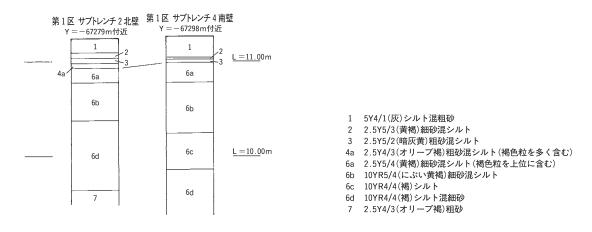
以下、調査区の状況及び検出した遺構等の状況について、調査区ごとに説明を行う。

1. 第1区第1遺構面の調査(第6・7図、図版3)

第1区の現況は水田で、耕作面の標高は11.25m程度でほぼ水平である(第6図)。遺構面は第6a層上面の1面として検出したもので、その標高は10.90~11.00mである。この遺構面の標高は、本調査区周辺と後述する第3区周辺が最も高く、古環境の上では微高地として位置づけられる。

当調査区の土層堆積は、表土である現代の水田耕土(第1層)の下に黄褐色の細砂混シルト(第2層)と暗灰黄色の粗砂混シルト(第3層)が薄く堆積している。第3層以下の状況は、調査区北端部と





第6図 第1区土層柱状模式図

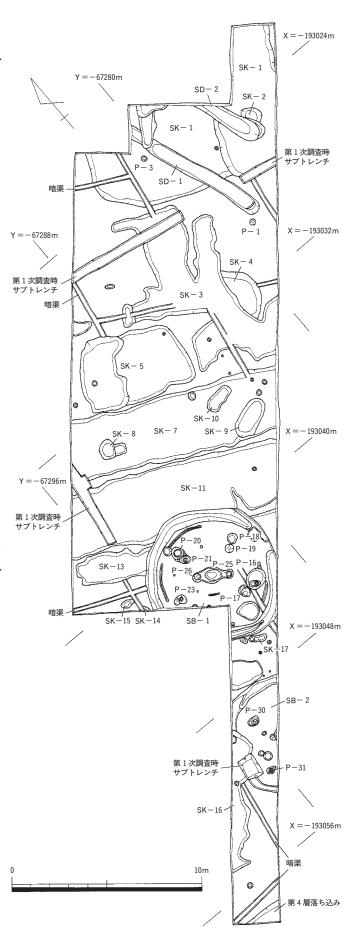
南端部にのみ褐色粒を多く含むオリーブ 褐色系の粗砂混シルト(第4層)が堆積し、 大半の部分は第3層の下面が遺構面を形 成する黄褐色の細砂混シルト(第6a層) となる。第6層の堆積は厚く、1.6m以上 の地点もあり、微妙な色調などの違いに より4単位に細分した。この第6層内に は縄文土器が一定量含まれ、縄文時代後 期の堆積と考えられる。この下位層の状 況については、出土遺物を含め第2遺構 面の項で説明する。

第1区第1遺構面で検出した遺構は、 弥生時代中期の竪穴住居2棟(SB-1・2)、土坑墓1基(SK-9)、溝状遺構2条(SD-1・2)、土坑3基(SK-2・4・10)、の他江戸時代の粘土採掘坑と考えられる大規模な落ち込み(SK-1・3・5・7・11・16など)を多数検出した。また調査区各所で直径20~30cm、深さ5~30cmのピットを約20基検出した。これらのピットを約20基検出した。これらのピット方からは、ほとんど遺物が出土しておらず時期の確定は困難であるものの、唯一北端部において検出したP-3から弥生土器壺・甕の破片が出土している。

以下、主要な遺構を説明する。

〔SD-1 ⋅ 2〕(第8図、図版4)

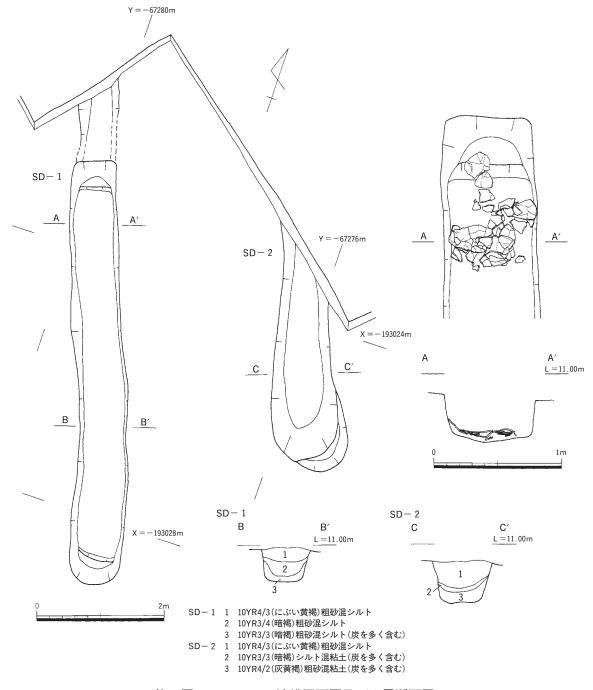
SD-1・2は第1区北端部で検出した2条の溝状遺構である。ともに幅80cm程度で検出面からの深さが50~85cmを測り、幅約3mの間隔をもって平行に掘削されたものであり、ともに南端部は急激に立ち上がり途切れるものである。またSD-1の北側も急激に深さ10cm程度と浅くなり、北側調査区外へ続く。これらは、ともに溝の横断面形が逆台形状で、標高からみればSD-2の方が35cm程度深く掘削されている。SD-1北端部の浅



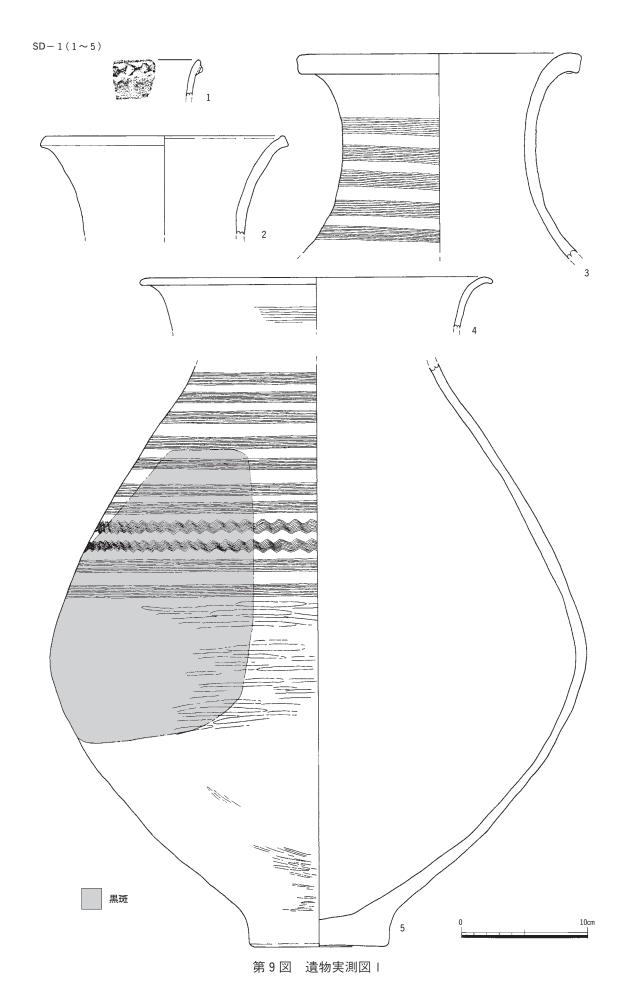
第7図 第1区第1遺構面遺構平面図

くなる際部分(A-A'地点)の底面で頸部から上位が欠失した弥生土器壺(第9図5)が底部を北に向けた状態で出土した。SD-1の覆土は3単位に分けられ、最上層はにぶい黄褐色系、下位の2単位は暗褐色の粗砂混シルトであり最下層に炭が多く含まれている。またSD-2の覆土も3単位に分けられ、最上層はSD-1と同じであるものの、中位層は暗褐色、下位層は灰黄褐色の色調でともに炭を多く含む粘土質となる。

SD-1から出土した遺物(第9・10図)には弥生時代中期の壺(2~5)や甕(6~9)の他、チャート製の石鏃片1点(10)や砂岩の自然石を用いた砥石(11)などがある。壺は、広口壺で頸部から体部上位にかけてクシ描直線文や波状文を多条に施すものが主体であり、3の口縁部が肥厚して外端面を形成することや5の体部が卵形であることなどから弥生時代中期前葉の紀伊第II様式新段階頃に

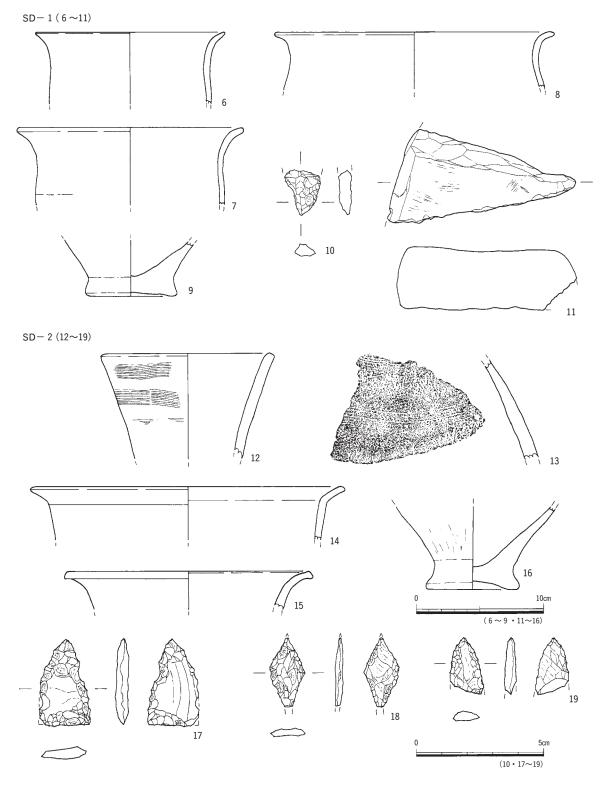


第8図 SD-I・2遺構平面図及び土層断面図



位置づけられるものと思われる。甕では、図示した 4 点とも紀伊型甕である。この他、縄文時代晩期に位置づけられる突帯文系の口縁部が 1 点(1)混入遺物として出土している。

次に、SD-2から出土した遺物 (第10図) には弥生時代中期の壺 $(12\cdot13)$ や甕 $(14\sim16)$ の他、サヌカイト製の石鏃 $(17\sim19)$ がある。壺は、直口壺の口縁部外面にクシ描直線文を施すもの (12) や体部



第10図 遺物実測図2

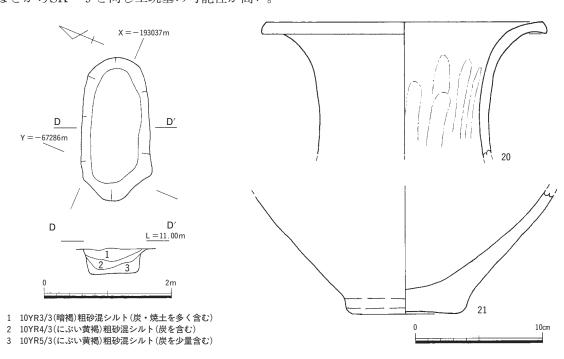
にクシ描直線文と波状文を多条に施すもの(13)があり、SD-1と同時期と考えられる。また甕には紀伊型甕 $(15\cdot 16)$ の他、口縁部が外上方に屈折する遠賀川系のタイプのもの(14)がある。この14の外面調整はヘラケズリが行われているものとみられ、紀伊型との折衷タイプの可能性がある。この他、石鏃には平基式のもの(17)や尖基式のもの(18)があり、3点とも大剝離面を残す粗雑な作りである。

 $[SK - 9 \cdot 10]$ (第7 · 11図、図版 6)

SK-9は第1区中央部の南壁面際の江戸時代の粘土採掘坑とみられるSK-7の底面で検出した 長辺2.3m、短辺1.1m、深さ43cmの楕円形の形状で横断面形が方形状をした土坑である。この土坑 はその形状からみて、埋葬形態は不明であるものの土坑墓と考えられるものである。覆土は3単位 に分けられ最上層は暗褐色の粗砂混シルト、下位の2層はにぶい黄褐色系の粗砂混シルトで、最上 層には炭と焼土が、下位の2層には炭が含まれていた。

覆土内からは一定量の弥生土器が出土した。出土遺物には弥生土器壺(第12図20・21)などがある。 20は口径21.6cmの広口壺で比較的大型のものである。また21は底径8.2cmの底部であり、これらから SK-9の時期は、弥生時代中期前葉と考えられる。

またSK-9の北側で検出したSK-10も類似する弥生時代の土坑である。この土坑の規模は長辺1.6m、短辺0.7m、深さ7cmを測るもので、弥生土器細片が出土している。その形状や規模、方向性などからSK-9と同じ土坑墓の可能性が高い。



〔SB-1 ⋅ 2〕 (第7 ⋅ 13図、図版5 ⋅ 6)

第11図 SK-9遺構平面図及び土層断面図

SB-1・2はともに第1次調査時に確認されていた竪穴住居である。今回の調査範囲内では南端部に位置し、約3mの間隔をもって南北に並ぶ。

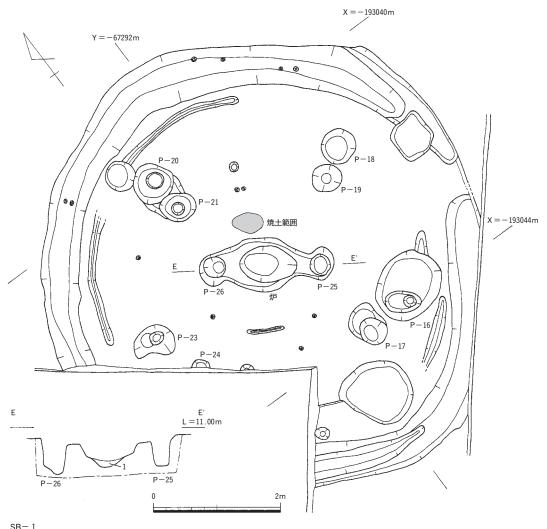
第12図 遺物実測図3

SB-1は残存する覆土の深さが $5 \sim 10$ cmと浅く、検出した床面において 2 条の壁溝が廻る拡張が行われた円形の住居である。まず拡張以前の古段階の状況は直径5.5mの規模で、幅 $15 \sim 20$ cm、深さ

 $5 \sim 10$ cmの壁溝が廻る。この段階の主柱穴は $P-17 \cdot 19 \cdot 21 \cdot 24$ とみられ、4本柱の住居と考えられ、その規模は直径40cm前後、深さは70cm程度である。

次に、拡張後の新段階の状況は直径7.1mの規模で、幅 $40\sim50$ cm、深さ $10\sim30$ cmの壁溝が廻る。壁溝は東側の一部が途切れていることからこの部分が入り口と考えられる。この段階の主柱穴は $P-16\cdot18\cdot20\cdot23$ 及び第1次調査時においてP-16とP-23の間に1基確認しており、5本柱の住居と考えられる。

炉は住居中央部に位置し、東西80cm、南北56cm、深さ42cmの炉本体があり、その東西両脇に直径 20cm程度のピット 2 基 $(P-25\cdot26)$ を配する、いわゆる松菊里型の住居に該当する。今回の調査に おいて下層調査の前段階で炉の断割り調査を行ったところ、炉両端部のピットがさらに深く掘削で きることが明らかとなり、床面からの深さが50cm前後であることが判明した。この状況は、第13図 の断面図に示した。また下層調査を行う途中において P-21底面から砂岩の自然石を用いた叩石 (第14図22) が 1 点出土した。



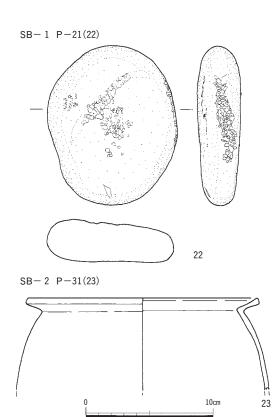
ゲ 1 2.5Y3/2(黒褐)細砂混シルト(炭を多く含む)

第13図 SB-I遺構平面図及び土層断面図

この住居の時期としては、第1次調査時にP-20から弥生土器直口壺が出土していることから弥生時代中期中葉頃に位置づけられる。また石器(石鏃・石錐・太型蛤刃石斧・磨石・台石など)が一定量出土している他、サヌカイトの剝片が78点出土している点が注目される。

SB-2は第1次調査時において松菊里型の炉などを確認しているもので、その概要のみをふれる。SB-2は復元できる規模が直径6.2mの円形住居で、周囲には幅36cm、深さ15cm程度の壁溝が廻り、覆土は削平を受け残存していない。主柱穴は $P-30\cdot31$ の2基を確認しており、本来4本柱で構成される住居と考えられる。床面中央部には東西1.2m、南北0.7m、深さ30cmの炉があり、SB-1と同じく東西両端部に直径20cm程度のピットが配されている。今回の調査ではP-31内部から弥生土器甕(第14図23)が1点出土した。

この住居の時期としては、第1次調査時において弥生土器直口壺などが出土していることから弥 生時代中期後葉頃に位置づけられる。また、覆土



第14図 遺物実測図4

が失われているにもかかわらず、SB-1と同じくサヌカイトの剝片が15点出土している点が注目される。

[SK-2·4] (第7図)

SK-2は第1区北端部の江戸時代の粘土採掘坑底面で検出した円形の土坑である。直径 $1.3\,\mathrm{m}$ 、深さ $13\,\mathrm{cm}$ の規模で1/2程度がSD-2によって切られ、全形は不明である。時期的にはSD-2よりも古く、出土した弥生土器直口壺片から紀伊第 II 様式頃と考えられる。

またSK-4は第 1 区北半部で検出した楕円形状の土坑で粘土採掘坑であるSK-3 によって大半が切られ失われている。この土坑の規模は、東西約 $3.0\,\mathrm{m}$ 、南北約 $2.0\,\mathrm{m}$ で深さは $22\,\mathrm{cm}$ である。遺物からみて弥生時代中期の範疇と考えられる。

 $(SK-1 \cdot 3 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 11 \cdot 13 \cdot 16)$ (第7図)

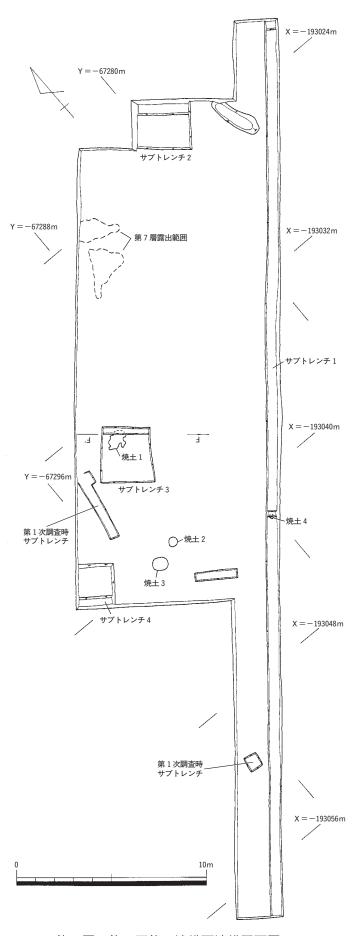
 $SK-1\cdot 3\cdot 5\cdot 7\cdot 11\cdot 13\cdot 16$ は比較的大規模に掘削された江戸時代の粘土採掘坑とみられる土坑である。第 1 次調査時では $SK-5\cdot 7\cdot 11$ などその一部分を検出し、近世初頭頃の水田遺構と考えられていた。確かに調査区中央部において検出した $SK-5\cdot 7\cdot 11\cdot 13$ は東西方向を軸として溝状に掘削された単位が確認できるものの、今回の調査において検出した北半部に位置する $SK-1\cdot 3\cdot 16$ は不整形を呈し、一部が深くなるなど水田とは異なる形状を呈し、覆土もベース層とは異なる粗砂を中心とした覆土である。このことから、これらを大規模な粘土採掘坑と位置づけた。これらの時期は、出土した肥前系陶磁器などから17世紀前半頃の遺構と考えられる。

2. 第1区第2遺構面の調査

(第15図、図版7)

平成13年度に市事業団が行った第1 次調査のサブトレンチによる下層調査 の時点で第1遺構面を形成する第6層 (第1次調査時の第5a層)内に縄文時 代後期の土器が一定量含まれているこ とが確認されていた。このことから、 今回の調査では縄文時代後期段階の遺 構面を確認するため第1区全体の深掘 調査を行った。

調査は明確な遺構面が確認できな かったことから調査区全体を標高約 10.35 mまで掘削し、さらに南東壁面に 沿って幅60cmのサブトレンチを設定し て標高10.20cm程度まで掘削した他、北 端部にサブトレンチ2を設定して標高 9.45mまで、中央部にサブトレンチ3 を設定して標高10.00mまで、西隅にサ ブトレンチ4を設定して標高9.40mま で掘削を行い、遺物採集に努めた。掘 削した状況から第6層は4単位(第 6a~6d層)に細分が可能で、上位の 第6a・6b層に遺物が含まれているこ とを確認した(第6図)。まず第6a層 は全体的に20cm程度の厚みをもつ黄褐 色細砂湿シルトで褐色粒を多く含む特 徴をもつ。第6b層は、にぶい黄褐色の 細砂混シルトで40~50cmの厚さをもつ。 また第6c層及び第6d層はともに褐 色系の色調をもつ土層で下位層の第 6d層の方が砂質となる。第6d層の下 にはサブトレンチ2において確認した オリーブ褐色の粗砂層(第7層)が堆積 する。この第7層は調査区北半部の一 部では標高10.35mの深さで露出する ことを平面調査で確認した。



第15図 第1区第2遺構面遺構平面図

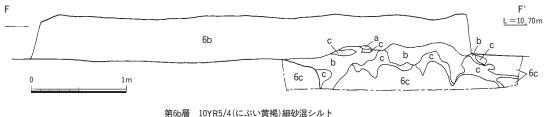
遺構としては、遺物を伴う人為的なものは確認できなかったものの、面的に焼土の範囲を4ヶ所 検出し、これらを断割りしてその状況確認を行った。焼土2・3は調査区南端部において近接して 確認できたもので、ともに標高10.40mの深さで検出した(図版 8 上)。焼土 2 は直径50cm、焼土 3 は 直径70cmでともに円形状である。断割調査の結果、焼土は厚さ2~3cm程度の薄いものであった。 また焼土4は東壁面下サブトレンチ内の標高10.15mの深さで検出したもので、直径20cmの円形状で 深さ2cm程度のものである。この他、中央部のサブトレンチ3内で検出した焼土1は、上位堆積の 第 6 b層から土層観察のセクションベルトを残して堆積確認を行った(第16図、図版 8 上)。その結 果、炭や焼土などを含む堆積は複雑に入り組むもので、人為的な遺構とは異なる自然環境の中で起 こった植物遺体の痕跡であるものと考えられた。

次に、縄文土器の遺物分布は、第1区の全体に分布するものの、遺物量からみると調査区南半部 に集中する傾向がみられた。また層位的にみて、第6a層に比べ第6b層からの出土量が圧倒的に多 12

出土した縄文土器(第17図)では、口縁部外面に「8」の字状の突起を貼付け、その部分から貼付 突帯を廻らして刻み目を施すタイプの深鉢(24・25・26)が一定量あり、これらは堀之内Ⅱ式に併行 するものである。このうち26は口縁部を大きく肥厚させた突起が付く部分で、内面も沈線等によっ て加飾している。この他、27~30の深鉢もこのタイプのものとみられる。また頸部外面に沈線を入 れ、沈線間にLRの縄文を施すタイプのもの(32)は北白川上層式のII~III式に分類されるもので、 類似する縄文帯をもつ31・33~36もこのタイプのものとみられる。また無文系の深鉢とみられる 40~42も北白川上層Ⅱ式の段階に多いタイプの個体である。この他、深鉢では口縁部の内外面にへ ラミガキを施すもの(38)や大きく肥厚させた突起波頂部外面に渦巻き状の文様を施したもの(39)な どがある。また、今回の調査で出土した深鉢の底部は平底を呈するもの(45)が1点である。鉢では 外上方に屈折させた短い口縁部をもつもの(37)がある。この土器の頸部外面には屈曲させる沈線に よって文様を施している。また43は緩やかに内湾する口縁部をもつもので、口縁部外面にはヘラミ ガキに先行する条痕も観察できる。浅鉢は深鉢に比べて出土量は少ない。44は浅鉢体部の破片で肩 部に1条の沈線が確認できる。46・47は浅鉢の底部である。46の底部外面には不明瞭であるものの、 平行線状の圧痕が観察できる。

これらの縄文土器の内、24~28・31・33・36・37・42・43・45~47の胎土には、雲母片が含まれ ていることから搬入品と考えられる。

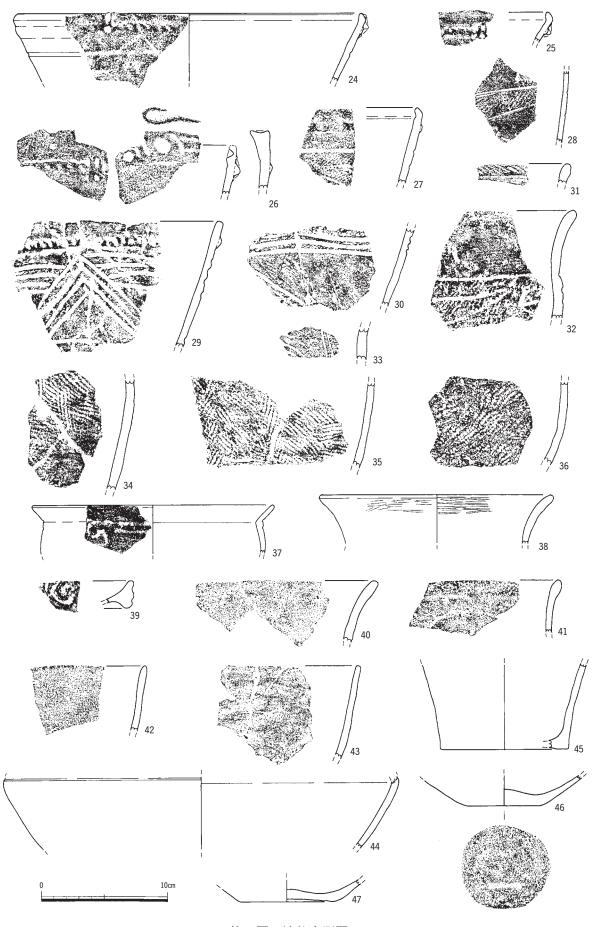
以上の縄文土器から時期的には縄文時代後期前葉の一括性の高い一群と考えられる。



10YR4/4(褐)シルト 第66層

- 5YR4/4(にぶい赤褐)シルト(焼土)
- b 10YR4/4(褐)細砂混シルト(炭・焼土を多く含む)
- c 2.5Y6/4(にぶい黄)粘土

第16図 中央セクションベルト土層断面図



第17図 遺物実測図5

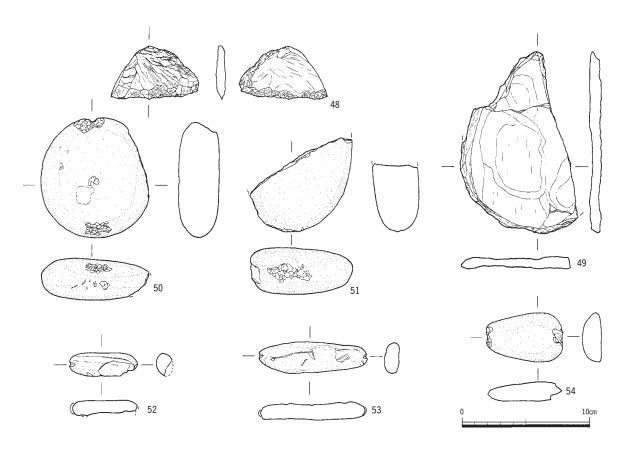
土器以外の遺物としては、石器・石製品があり、その種類にはスクレイパー、石鍬、叩石、石錘がある。

スクレイパー(48)は硬質のサヌカイトを素材として使用しているもので、長さ6.8cm、幅4.8cmの 法量をもつ。上端部に自然面を残し、表裏面には大剝離面を残すものである。

石鍬(49)は硬質の結晶片岩を素材として使用しているもので、刃部の1/2程度と基部が欠失している。

礫石器には叩石(50・51)がある。ともに砂岩自然石を用いたもので、50には両端部と上端面に、 51には下端部に明瞭な敲打痕が観察できる。

石錘では切目石錘が3点出土している。52・53は棒状の砂岩自然石を素材として使用しているもので、両端部に研磨による丁寧な切り込みを施している。また54は扁平な砂岩自然石を素材として使用しているもので、両端部の切り込みは打ち欠きによる粗雑な作りである。



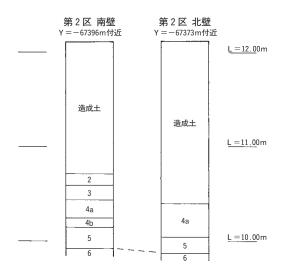
第18図 遺物実測図6

3. 第2区の調査(第19・20図、図版8)

第2区の現況は周囲を擁壁に囲まれた造成地である。現地表面の標高は、12.10mで、掘削を行った結果、造成土の厚さは1.3~1.7mであることが確認できた。また遺構面の大半は既に撹乱され、調査区東西両端部の一部と中央部の一部にのみ下位層の堆積層と遺構面である第6層が確認できた状況である。このことから、遺構検出を試みたもののその成果には至らず、最も依存状態の良好であった西端部による堆積層の調査と先述の3ヶ所による壁面精査並びに図面による記録に留めた。

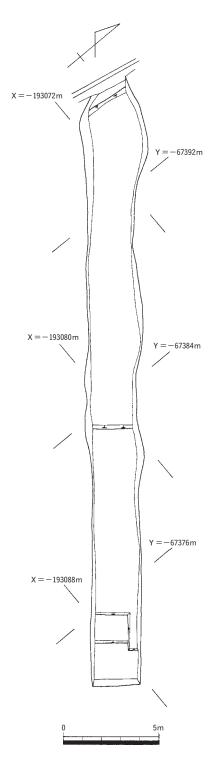
当調査区の土層堆積については、表土である現代の水田耕土(第1層)は既に残存せず、造成土下に暗灰黄色のシルト混細砂(第2層)とにぶい黄色の粗砂混シルト(第3層)が10~15 cm程度堆積している。第3層以下の状況は、基本層となる褐色粒を多く含む黄褐色系の粗砂混シルト(第4層)が堆積し、西端部ではこの第4層が2単位に細分できた。第4層下には暗灰黄色の細砂混粘土である第5層が15~20cmの厚みで堆積している。第5層の下面が遺構検出面と考えられる黄褐色の細砂混粘土(第6層)となり、遺構面の標高が9.90m前後である。

出土遺物はすべて細片であり、図示できるものは出土していない。第4層から出土したものには、瓦器や中世土師器があり、また第5層から出土したものに黒色土器A類椀の破片がある。



- 2 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト混粗砂
- 3 2.5Y6/4(にぶい黄)粗砂混シルト
- 4a 2.5Y5/3(黄褐)粗砂混シルト(褐色粒を多く含む)
- 4b 2.5Y5/3(黄褐)粗砂混シルト
- 5 2.5Y5/2(暗灰黄)細砂混粘土
- 6 2.5Y5/4(黄褐)細砂混粘土

第19図 第2区土層柱状模式図



第20図 第2区遺構平面図

第2節 第11次調査成果

第11次調査は、ほぼ開発計画範囲を囲う擁壁工事路線を対象に幅2.5m前後の調査区を17区画に分け設定した他、浄化槽設置に伴う調査区(第7区)と防火水槽設置に伴う調査区(第16区)がある。

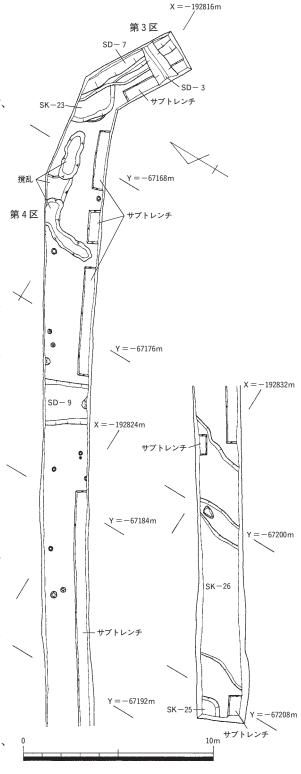
以下、調査区の状況及び検出した遺構等の状況をもとに数単位の調査区に分けて検出遺構等の説明を行う。

1. 第3・4区の調査(第21図、図版10上・11)

第3・4区の現況は水田で、耕作面の標高は11.50m程度でほぼ水平である(第23図)。遺構面は第5b層上面と第6a層上面の2面として検出したもので、その標高は第5b層上面が第3区周辺では11.00m、第4区南端部では10.50mであり、また第6a層上面が第3区周辺では10.95m、第4区南端部では10.30mとなり、全体的に南に向け下降する傾斜をもつ。このことは、第3区の微高地部から第4区南端部の微低地部に向かう緩やかな傾斜変換地点として位置づけられる。

当調査区の土層堆積は、表土である現代の水田耕土(第1層)の下に黄褐色系のシルト混粗砂層(第2層)と暗灰黄色の粗砂混シルト(第3層)が薄く堆積し、ともに2~3単位に細分できる。第3層以下の状況は、微高地部である第3区周辺部にも褐色粒を多く含むオリーブ褐色系の粗砂混シルト(第4層)や黄褐色系の粗砂混シルト(第5層)が比較的薄く堆積し、これらの堆積は南側微低地部に向かって徐々に厚くなる傾向を示し、さらに2~3単位に細分できる状況となる。この微低地部が埋没する時期として、鎌倉時代頃の堆積と考えられる第4層の上面がほぼ水平であることと、平安時代頃の遺構面と考えられる第5b層上面が下降する傾斜をもつことから少なくとも中世の段階でこの微低地が埋没したものと考えられる。

また第6a層以下の堆積については、サブトレンチを東壁面下に設定して確認したもので、微高地部である北半部では第6a層が10~15cmと比較的薄く、微低地部である南半部では第6a層に類似する第6b・6c層が10~15cmと比較的薄く堆積し、これらの



第21図 第3・4区遺構平面図

下に小礫を含むにぶい黄褐色の粗砂層(第7層)を確認した。この第7層も微低地部に向かって下降する状況にあり、この第7層がこれまでの調査において確認されている和泉山脈から派生する扇状地末端部の堆積である可能性が高く、この地点が扇状地の末端部に位置づけられるものと思われる。

遺物包含層から出土した遺物(第22図)では、第3区の第4層から出土した土師器の低脚高杯(55)や第4区の第3a層から出土した備前焼擂鉢(56)などがある。また第4区の第6層内からサヌカイト製の平基式石鏃2点(57・58)が出土した。

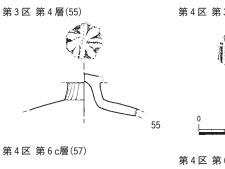
遺構は、第 5 b層上面である第 1 遺構面では、溝 1 条 (SD-8) を検出した。このSD-8 は図示していないものの、位置的には第 1 遺構面で確認したSD-9 のほぼ上部において検出したもので、幅 45cm、深さ10cm程度でほぼ南北軸に沿った方向性をもつ(図版16)。第 6 a層上面である第 2 遺構面では、第 3 区において古墳時代前期の溝(SD-7)や土坑(SK-23)を第 4 区においては出土遺物が希薄で時期が限定できない溝(SD-9)や土坑 2 基 $(SK-25\cdot26)$ の他、ピット多数を検出した。また第 3 区では第 2 層から掘削された江戸時代の溝(SD-3) も確認した。

以下、主要な遺構を説明する。

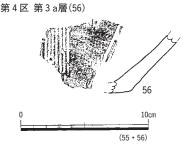
〔SD-7〕(第24図、図版10下)

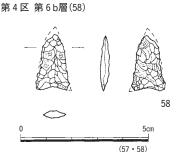
SD-7は第3区の北壁に沿って東西方向に延びるもので、幅1.4m以上、深さ50cm以上の溝である。その方向性は $N-48^\circ$ -Wである。

遺構覆土は4単位に分けられ、上位層は灰黄褐色系の粗砂混シルト、下位層は暗灰黄色系のシルト混粗砂であり、下位ほど砂質が強くなる傾向である。この溝から出土した遺物(第25図)には、土師器甕の口縁部(59)や有孔鉢の底部(60)、甕もしくは鉢の底部(61)などがある。これらの土器からSD-7の時期は、古墳時代前期の布留式併行期に位置づけられる。

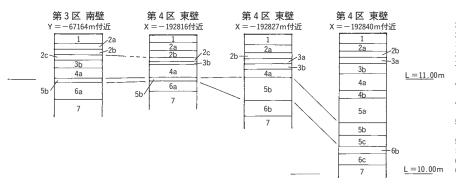


57





第22図 遺物実測図7



第23図 第3·4区土層柱状模式図

5Y4/1(灰)シルト混粗砂 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト混粗砂 2a 2b 2.5Y5/3(黄褐)シルト混粗砂 10YR5/4(にぶい黄褐)シルト混粗砂 2c 2.5Y5/2(暗灰黄)粗砂混シルト 3b 2.5Y5/2(暗灰黄) 粗砂混シルト (部分的に褐色粒を含む) 4a 2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂混シルト (褐色粒を多く含む) 2.5Y4/4(オリーブ褐)粗砂混シルト (褐色粒を含む) 10YR4/2(灰黄褐)粗砂混シルト (褐色粉を多く含む) 2.5Y5/4(黄褐)粗砂混シルト 2.5Y5/3(黄褐)粗砂混シルト 5с 10YR5/3(にぶい黄褐) 粗砂混シルト 10YR4/2(灰黄褐)粗砂混シルト (褐色粉を多く含む) 10YR5/3(にぶい黄褐)シルト

10YR4/3(にぶい黄褐)粗砂

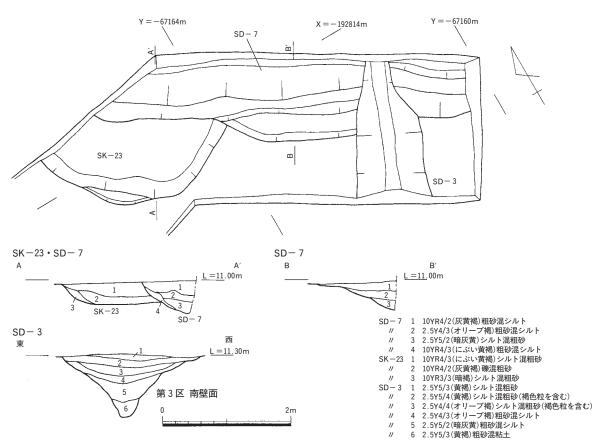
(小礫を少量含む)

〔SK-23〕(第24図、図版10下)

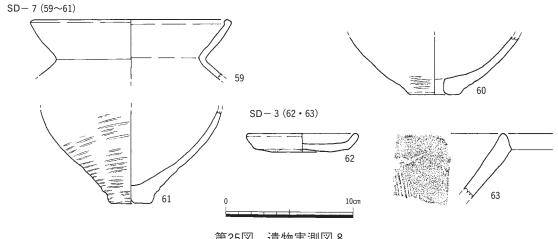
SK-23はSD-7に切られている東西3.1m以上の円形状の土坑で深さは最深部で35cmを測る。遺 構覆土は3単位に分けられ、上位層はにぶい黄褐色系のシルト混粗砂、下位層が灰黄褐色の礫を含 む粗砂である特徴がある。遺物は一定量出土しているものの細片が多く、図示できていない。時期 的にはSD-7より古いものの、近似する時期と考えられる。

〔SD-3〕(第24図、図版10下)

SD-3は第2c層から掘り込まれた江戸時代の溝で、第9次確認調査(第1区)で検出した溝の延 長部にあたり、東側旧道に沿って掘削された水路と考えられる。横断面形は「V」字状で上端幅は 1.9m、深さ1.0mである。出土遺物(第25図)には土師器皿(62)や瓦質土器擂鉢(63)がある。



第24図 SK-23・SD-7・3遺構平面図及び土層断面図



第25図 遺物実測図8

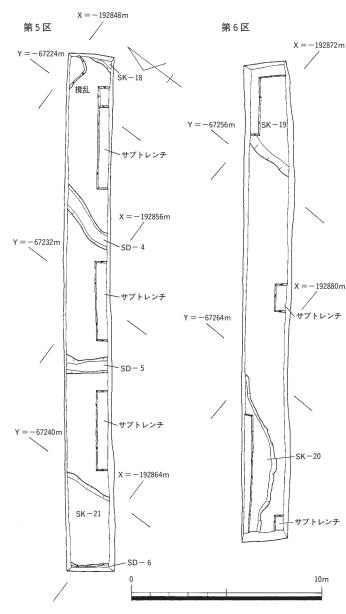
2. 第5・6区の調査(第26・27図、図版12・13)

第5・6区の現況は水田であり、耕作面の標高は11.40m程度でほぼ水平である。遺構面は第5b

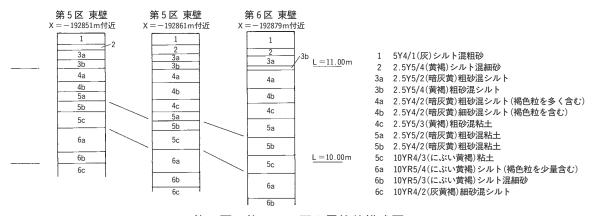
層上面と第6a層上面の2面として検出した。第1遺構面である第5b層上面の標高は、第5区北端部では10.65m、第6区南端部では10.25mとなり、南に向かって40cm程度下降する。また、第2遺構面である第6a層上面の標高も、第5区北端部では10.40m、第6区南端部では9.85mとなり、南に向かって55cm程度下降する。この状況は、先述の第3区から第4区にかけて傾斜をもった地形が本調査区においても顕著にみられ、さらに低湿地になる傾向がみられる。

当調査区の土層堆積は、表土である現代の水田耕土(第1層)の下に第4区と同様である第2・3層が堆積し、第4a層上面までほぼ水平堆積を示す。第4a層以下になると第4・5層の細分できる単位が増加または厚みを増し、低地である第6区南端部では最も厚みを増す。同様にサブトレンチで確認した第6a層以下の堆積についても、下降する傾斜を示し、少なくともこの微地形の形成は弥生時代以前に遡るものと考えられる。また第4区で確認していない。

遺物包含層から出土した遺物(第29図)



第26図 第5·6区遺構平面図



第27図 第5·6区土層柱状模式図

には、第5区では第5b層から出土した須恵器杯身(65)や確実な層位が不明である瀬戸灰釉皿(66)などがある。また第6区では第5c層から出土した須恵器杯身(67)や土師器皿(68)、第4層から出土した瓦器椀(69)、第3層から出土した東播系須恵器こね鉢(70)などがある。

遺構は、第 5 b層上面である第 1 遺構面では、第 5 区の北端部で検出した土坑 1 基(SK-18) がある。また、第 6 a層上面である第 2 遺構面では、第 5 区の範囲で溝 2 条 $(SD-4\cdot5)$ 、第 5 区南端部から第 6 区北端部にかけて検出した一連の遺構とも考えられる大規模な土坑 $(SK-19\cdot21)$ 、第 6 区南端部で検出した大規模な土坑(SK-20) がある。

以下、主要な遺構を説明する。

〔SK-18〕(第28図、図版16)

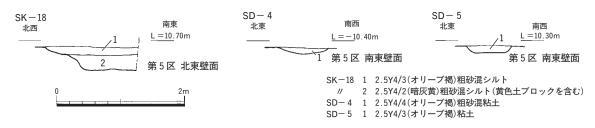
SK-18は第5区の北端部で検出した土坑である。その大半は調査区東側にのびるため全形は不明であるものの、南北長1.4m以上、幅0.5m以上、深さ35cmのものである。覆土は2単位に分けられ、上層はオリーブ褐色、下層は黄色シルトブロックを含む暗灰黄色系の色調でともに粗砂混シルト質である。出土遺物から判断して鎌倉時代頃の遺構とみられる。

〔SD-4 ⋅ 5〕 (第28図、図版16)

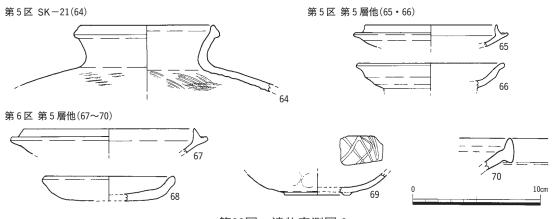
 $SD-4\cdot 5$ は第 5 区中央部において検出した溝である。SD-4 はやや屈曲しながらほぼ南北に軸をとるもので、幅 $80\sim 90$ cm、深さ10 cm程度である。覆土はオリーブ褐色粗砂混粘土の単一である。またSD-5 はN-38 -Wの方向性をもつもので、幅約80 cm、深さ10 cm程度である。覆土はオリーブ褐色粘土の単一である。ともに遺物は出土しておらず具体的な時期等は不明である。

〔SK-19·21〕(第26図、図版16)

SK-21は第5区の南端部において東肩部を検出し、その方向性はほぼ南北軸に重なる。またSK-19は第6区の北端部において西肩部を検出し、その方向性もほぼ南北軸に重なる。深さは、SK-21



第28図 SK-18·SD-4·5 土層断面図



第29図 遺物実測図 9

の最深部で24cm、SK-19の最深部で24cmを測り、遺構覆土はともに灰色系の粘土 2 単位に分けられる。この 2 基の遺構が一連のものとすれば東西幅約16mとなる。出土遺物には須恵器甕(第29図64)がある。またSK-21底面において溝(SD-6)の肩部も検出した。

〔SK-20〕(第26図)

SK-20は第6区の南端部において検出した不定形の土坑である。検出長8.3m、幅1.7m以上、深さ20cm程度の大規模なもので、覆土は灰色粘土の単一である。遺物は細片が多く具体的な時期は不明である。

3. 第7区の調査(第30・32図、図版14・15)

第7区は第4区の南東側に位置する浄化槽設置に伴う調査区である。第7区の現況は水田であり、 耕作面の標高は11.50m程度でほぼ水平である。遺構面は第5層上面と第6層上面の2面として検 出した。第1遺構面である第5層上面の標高は、10.90~11.00mで第4区の中央部とほぼ同じであ る。また第2遺構面である第6層上面の標高は、10.80mでほぼ水平となり、第4区の中央部に比べ 15cm程度低くなる。

当調査区の土層堆積は、表土である現代の水田耕土(第1層)の下に黄褐色のシルト混粗砂層(第2層)と暗灰黄色の粗砂混シルト(第3層)が薄く堆積し、ともに2単位に細分できる。第3層以下の状況は、第4区周辺部と同様に褐色粒を多く含む暗灰黄色系の粗砂混シルト(第4層)が2単位に分けられ比較的薄く堆積している。第5層は10~20cmの厚みをもつ暗褐色粗砂混シルトである。

第6層以下の堆積については、第2遺構面の調査終了後サブトレンチを東・南・北壁面下に設定して確認したもので、第6層の厚みは北壁面下では約20cmと厚く、南壁面下では10cm程度と薄くなる状況を確認した。このことは、その下面である褐色系の粗砂層(第7層)の傾斜が南側に向かって高くなっていく様相であり、第3・4区とは異なる状況であることが分かる。

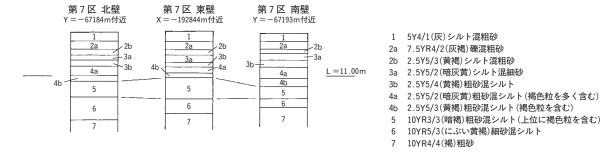
出土した遺物では、層位不明遺物として取り上げた弥生土器壺の底部(第31図71)が1点ある。

遺構は、第 5 層上面である第 1 遺構面では、調査区東半部で検出した土坑 1 基 (SK-22) がある。また、第 6 層上面である第 2 遺構面では、調査区北端部で検出した土坑 1 基 (SK-24) の他、ピットを15基検出した。

以下、主要な遺構を説明する。

(SK - 22)

第1遺構面で検出したSK-22は、調査区東半部で検出した大規模な土坑である。遺構西肩部のラ



第30図 第7区土層柱状模式図

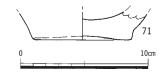
インはほぼ南北軸に重なる方向で検出し、その規模は南北5.3m以上、東西3.7m以上である。深さは、10cm程度で底面はほぼ水平となり、遺構覆土はにぶい黄褐色系の粗砂混シルトの単一層で褐色粒を多く含む特徴がある。出土遺物は微細で明確ではないものの、中世の範疇と考えられる。

(SK-24) (図版16)

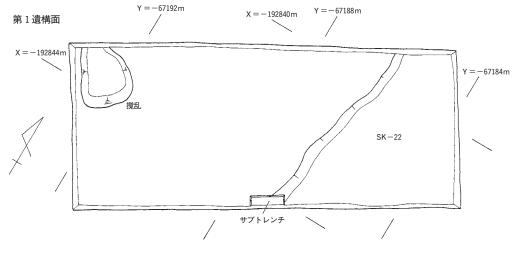
第2遺構面で検出したSK-24は調査区北端部において検出した不定形の土坑である。東西1.3m以上、南北1.0mの規模で深さは22cmを測る。覆土は褐色系のシルト混粗砂で炭及び焼土を多量に含む特徴をもつ。この遺構内部からは土器類は出土していない。

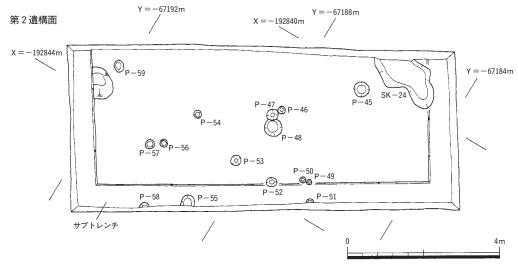
この他、調査区中央部を中心としてピットを多数検出した。ピットには直径40~50cm程度のもの

と直径20cm程度のものがあり、その深さは20cm程度のものが多くを占める。これらピット内部からも土器類は出土していない。



第31図 遺物実測図10





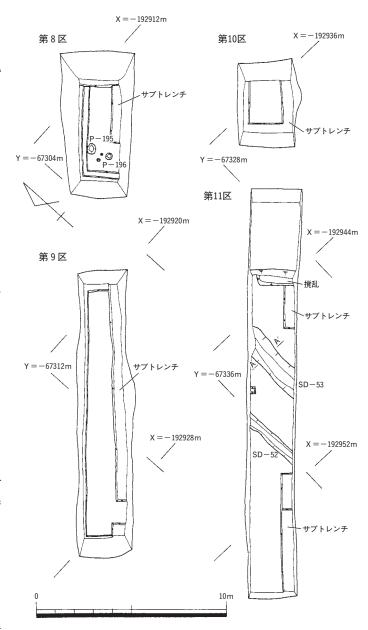
第32図 第7区遺構平面図

4. 第8~11区の調査

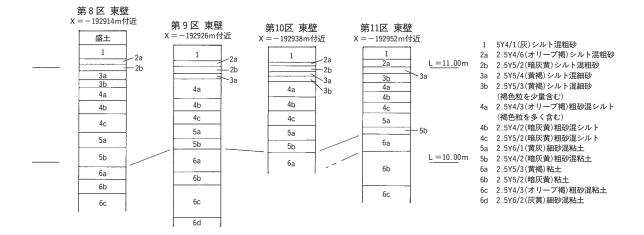
(第33~35図、図版17~21)

第8区から第11区にかけては対象地中央部の国道24号バイパスに隣接する擁壁工事部分を対象とした調査区である。この周辺は、以前は水田であったものが休耕田となり、現況は荒蕪地となっていた地点で、旧耕作面の標高は北端部の第8区で11.40m程度、以南の第9~11区では11.20mである。

この地点での調査は以北の第6区ま での地点で検出していた第5b層上面 では遺構が確認できず、掘削を進めた 第6a層上面において遺構を検出した ことから、この面を第1遺構面として 調査を行った。また東壁面下に設定し たサブトレンチの調査から第11区にお いて第6b層上面から掘削されたピッ トを検出し、第11区全面を第6b層上 面まで掘削を行い、さらにピット1基 を確認した。このことから、この面を 第2遺構面として調査を進めた。第1 遺構面である第6a層上面の標高は、 第8区では9.95m、第11区では10.30m となり、南側に向かって上昇する傾斜 をもつ。この状況から、最も低地とな



第33図 第8~11区第1遺構面遺構平面図



第34図 第8~11区土層柱状模式図

る範囲は第6区から第8区にかけての範囲であることが確認できた。また第11区における第2遺構 面(第6b層上面)の標高は、10.10mである。

当調査区の土層堆積は、表土以下の第4a層までは第6区までの堆積と同様に薄い堆積が数単位 に分けられ確認できた。第4a層上面は第9~11区にかけての範囲ではほぼ水平に堆積しているも

のの、最も低地にあたる第8区では10cm程度低くなる。2~3単位に 細分できる第4・5層の堆積は、南に向かって徐々に薄くなり、北側 の微低地から南側の微高地への変換地点であることが分かる。

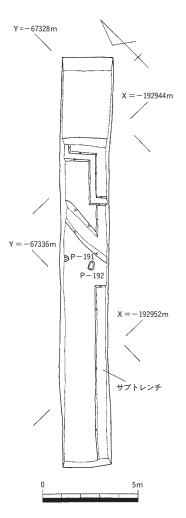
第6層以下の堆積については、第9区において標高9.40mまで掘削 を行い第6d層まで確認した。遺物は第6a層内に微細な縄文土器と弥 生土器が含まれていた。この他、上位の堆積層から出土した遺物(第37 図)には、第9区の第4c層から出土した瓦器椀(72)や第11区の第5a 層から出土した須恵器杯身(73)などがある。

遺構は、第6a層上面である第1遺構面では、第8区で検出したピッ ト 4 基 (P-195・196他)、第11区で検出した溝 2 条 (SD-52・53) があ る。また、第6b層上面である第2遺構面では、第11区で検出したピッ ト 2 基($P-191\cdot 192$)がある。

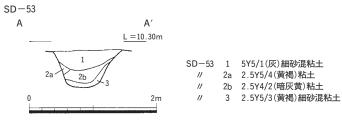
以下、主要な遺構を説明する。

〔SD-52⋅53〕(第36図、図版30)

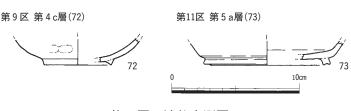
SD-52・53はともに第11区中央部において検出した溝である。この 2条の溝はほぼ南北軸に方向をとるもので、SD-52は幅55cm前後、深 さ10cm程度、SD-53は幅1.1~1.2m、深さ60cm程度である。SD-52の 覆土はにぶい黄褐色粗砂混粘土の単一である。またSD-53の覆土は大 きく3単位に分けられ、上位層は灰色系、中位層は暗灰黄色系、下位 層は黄褐色系の色調で、全体的に粘土質土である。遺構の時期として は、ともに須恵器蓋杯や甕の破片が出土していることから奈良時代頃 第35図 第11区第2遺構面 と考えられる。



遺構平面図



第36図 SD-53土層断面図



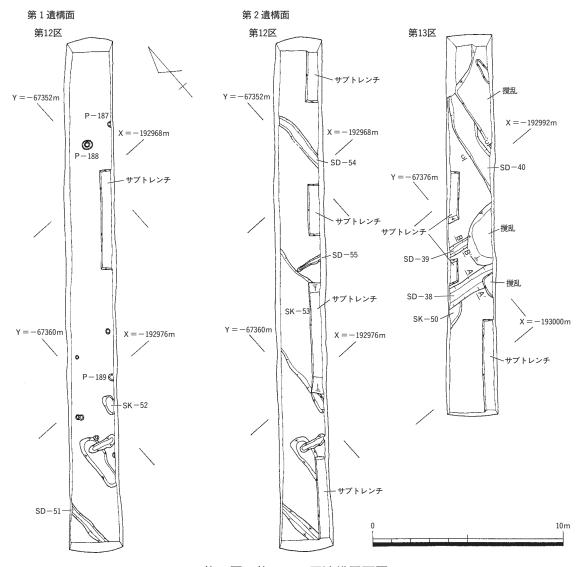
第37図 遺物実測図 11

5. 第12・13区の調査(第38・39図、図版22~25)

第12区から第13区にかけては対象地南西部の国道24号バイパスに隣接する擁壁工事部分を対象とした調査区である。周辺は、以前は水田であったものが休耕田となっていた地点で、旧耕作面の標高は第12区中央部で11.20m程度、第13区南端部で11.10m前後である。

この地点での調査は、第12区において以北の第8~11区で遺構の確認ができなかった第5b層上面でピットや土坑を検出し、この遺構面を第1遺構面として調査を行った。また、掘削を進めた第6a層上面において溝や土坑など多数の遺構を検出し、この面を第2遺構面として調査を進めた。さらに、北側に位置する第11区で検出した第6b層上面の遺構の広がりを確認するため広範囲におけるサブトレンチ調査を実施したものの、この面での遺構は検出できなかった。なお、第13区では第5b・c層の堆積は無く、第6a層上面において2時期の遺構が同一面上で確認できるものとして調査を進め、第1遺構面に対応する可能性のある遺構として溝を確認した。

当調査区の土層堆積は、表土以下の第5a層までは第11区までの堆積と同様に薄い堆積が数単位に分けられ確認できた。またサブトレンチによる下層調査の結果、第12区に比べ第13区の方が第6a・b層が厚く堆積し、第12区で確認した第6c層は第13区では確認できなかった。堆積層から出土



第38図 第12・13区遺構平面図

した遺物(第40図)には、第12区の第5b層から出土した土師器の広口壺口縁部(75)、壺底部(76)、高 杯脚部(77)や第13区の第5a層から出土した瓦器椀(78)、古代に遡るとみられる丸瓦(79)などがあ る。なお、第12・13区では第6層内から遺物は出土していない。

遺構は、第 5 b層上面である第 1 遺構面では、第12区において溝 1 条 (SD-51)、土坑 1 基 (SK-52) の他、ピット 9 基を検出した。これらの遺構からは土師器細片が出土しているのみで具体的な時期等は不明である。また、第 6 a層上面である第 2 遺構面では、第12区において溝 2 条 $(SD-54\cdot55)$ や比較的大規模な土坑 1 基 (SK-53) を検出し、第13区では溝 3 条 (SD-38~40) の他、土坑 1 基 (SK-50) を検出した。

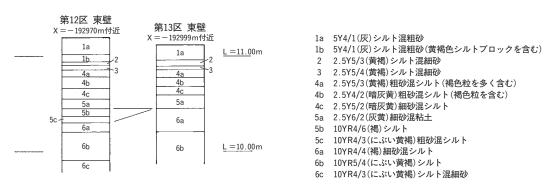
以下、主要な遺構を説明する。

[SD-51]

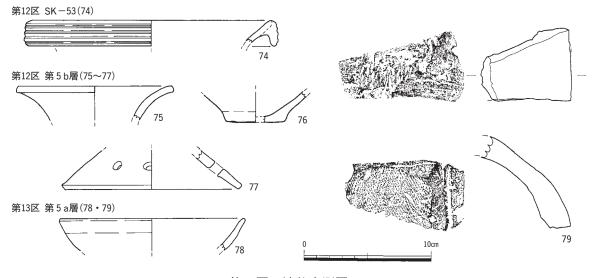
SD-51は第12区南端部の第1遺構面で検出したほぼ南北軸に主軸をとる溝である。この溝は幅40~45cm、深さ10cm程度の浅いもので、遺構覆土は暗灰黄色系の細砂混粘土の単一である。時期的には瓦器椀の細片が出土していることから鎌倉時代頃の遺構と考えられる。

(SK - 53)

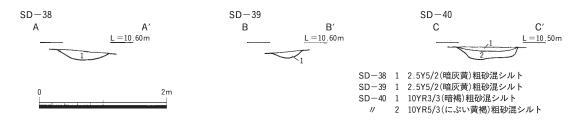
SK-53は第13区中央部の第2遺構面で検出した比較的大規模な土坑である。この土坑は、東西幅4.0m、南北幅2.6m以上のもので、深さは最深部で35cmである。覆土はにぶい黄褐色粗砂混シルトの単一である。出土した遺物には古墳時代初頭頃とみられる土師器壺(第40図74)の他、タタキ甕の



第39図 第12·13区土層柱状模式図



第40図 遺物実測図12



第41図 SD-38~40土層断面図

破片が一定量ある。

(SD-54)

SD-54は第12区北端部の第2遺構面で検出したほぼ南北軸に主軸をとる溝である。この溝は幅約50cm、深さ20cm程度を測るもので、遺構覆土はにぶい黄褐色系の細砂混シルトである。出土遺物は細片が多く時期は不明である。

〔SD-40〕 (第41図、図版30)

SD-40は第13区北半部の第2遺構面で検出したやや屈曲してのびる南北方向の溝で、幅1.0m前後、深さ20cm程度のものである。遺構覆土は2単位に分けられ、上位は暗褐色、下位はにぶい黄褐色の色調でともに粗砂混シルト質である。

〔SD-38·39〕(第41図)

SD-38・39は第13区中央部の第2遺構面で検出したほぼ東西軸に主軸をとる溝である。溝の幅は、SD-38が80~90cm、SD-39が50cm程度で、深さはともに10cm程度の比較的浅いものである。覆土はともに暗灰黄色系の粗砂混シルト質の単層である。SD-38の覆土内から細片ではあるものの黒色土器A類椀や瓦器椀の細片が含まれていることから平安時代から鎌倉時代にかけての遺構で、第12区で検出した第1遺構面に対応する遺構の可能性が高い。

6. 第14・16区の調査(第42~44図、図版25・26・28・29)

第14区は対象地南西部の国道24号バイパスに隣接する擁壁工事部分を対象とした調査区で、また 第16区は防火水槽設置に伴う調査区である。この周辺も前調査区と同じ休耕田となっていた地点で、 旧耕作面の標高は両区ともに11.15m程度である。

この地点での調査は、第16区の東端部より西側において第5b層の堆積があり、この上面でピットや土坑を検出し、この遺構面を第1遺構面として調査を行った。また、掘削を進めた第6a層上面において溝や土坑、ピットなど多数の遺構を検出し、この面を第2遺構面として調査を進めた。この状況から、第2遺構面は第16区から第14区にかけて20cm程度下降する傾斜をもつ。さらに、第14区の北東壁面下や第16区の南西壁面を除く周囲にサブトレンチを設定し下層調査を行った。

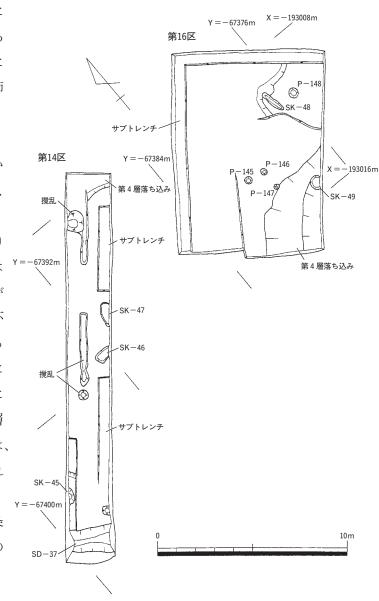
当調査区の土層堆積は、表土以下の第2層直下が基本層となる第4a層となり、第4a層を含めた上位の堆積が比較的薄い状況である。第4層は3単位に細分が可能であり、その下層である第5層は第16区では第5a層が比較的厚く堆積し、第5b層が部分的に堆積している状況であるのに対し、第14区では第5a層の堆積はみられず第5b層が単一に堆積していた。第6層以下の状況は、サブトレンチ内で確認したもので、3単位(第6a~6c層)の堆積を確認し、各層位は東から西に向かって下降する傾斜をもつ。

堆積層から出土した遺物(第46図)には、第14区の第6a層から出土した縄文土器深鉢の口縁部(80)、体部片(81)がある。この2点はともに縄文時代晩期の突帯文系の深鉢で、80は口縁部外面に、81は頸部外面に貼付突帯を廻らし、突帯上部に刻み目を施している。この他、第14区では第4層から出土した須恵器壺(82)、土師器皿(83)や第5b層から出土した叩石(84)がある。叩石(84)は、砂岩

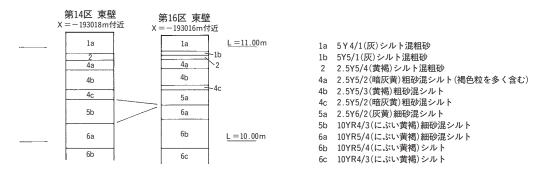
の自然石を用いたもので上下端部に 明瞭な敲打痕が観察できるものであ る。また第16区から出土したものに は、第5b層出土の把手をもつ土師 器甕(85)がある。

遺構は、第5b層上面である第1 遺構面(第42図)では、第14区におい て土坑 3基(SK-45~47)を検出し、 また第16区では土坑 2 基(SK-48・ 49) の他、ピット 4 基(P-145~148) を検出した。これらの遺構からは ピットを中心として中世土師器片が 出土しており、具体的な時期等は不 明であるものの中世の範疇に収まる 遺構と考えられる。なお、第42図に 示した溝(SD-37)は第2遺構面に 対応する遺構である。次に、第6a層 上面である第2遺構面(第44図)では、 第14区から第16区にかけて検出され た東西方向の溝 8条(SD-37・41・ 43・45~48・50)、南北方向の溝3条 (SD-42・44・49)やピット 多数の 他、第14区の南西隅において土坑1 基(SK-51)を検出した。

以下、主要な遺構を説明する。



第42図 第14・16区第1遺構面遺構平面図



第43図 第14·16区土層柱状模式図

〔SA-1及びピット〕(第44・45図、図版31)

SA-1は第16区南端部において検出したピット列である。このピット列は、西側からP-163・169・179・180で構成される三間以上の規模をもつ。柱の間尺は $1.7\sim1.9\,\mathrm{m}$ で、主軸は $N-50^\circ$ -W である。このピット列が南側に展開するとすれば掘立柱建物の可能性も考えられる。この他、第14 区から第16区にかけて類似するピットを多数検出した。これらのピットはSA-1を含め直径が $40\,\mathrm{cm}$ 程度のホリカタをもつものである。遺物には土師器タタキ甕の底部(第48図99)がP-167から混入遺

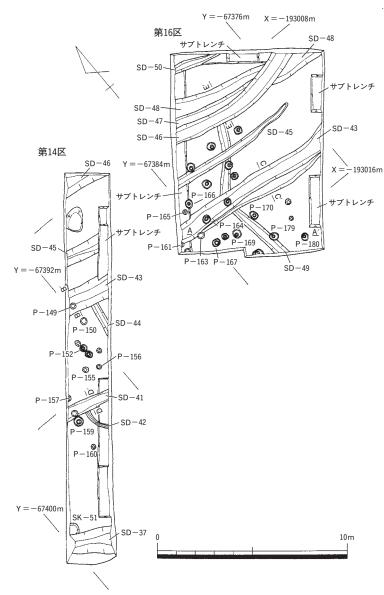
物として出土している。時期的に は、遺構の切り合いや他のピット の状況から判断して奈良時代頃の ものと考えられる。

(SD-49)

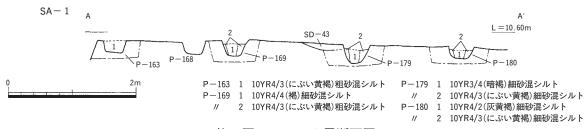
SD-49は第16区の中央部で検出したやや屈曲してのびる南北方向の溝で、幅40~60cm、深さ10cm前後の浅いものである。遺構覆土はにぶい黄褐色の色調をもつ粗砂混シルトの単一層で、他の溝等の重なりからみて最も古い時期の遺構と考えられるものの、遺物の出土はなく時期等は不明である。

〔SD-46~48〕(第47図、図版31)

SD-46~48は第16区の北端部で重なり合って検出した3条の東西方向の溝である。最も新しい時期のSD-46はやや屈曲してのびる幅70~90cm、深さ20cm程度のもので、その一部が第14区北端部においても確認できた。遺構覆土はにぶい黄褐色のシルト混細砂の単一層である。次に古い時期のSD-47は、その大半がSD-46と重なり



第44図 第14・16区第2遺構面遺構平面図

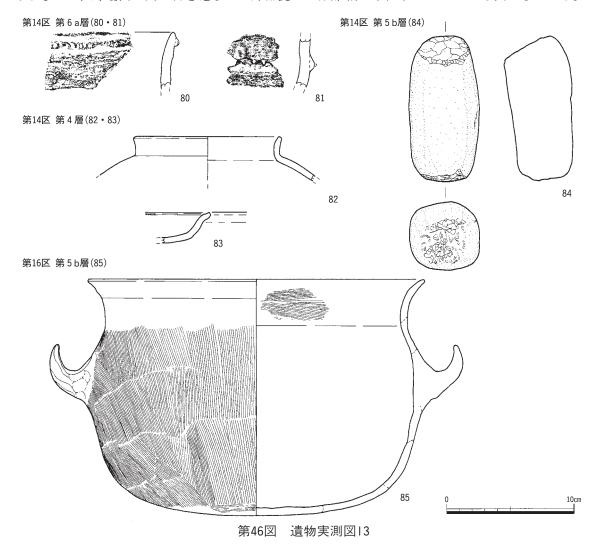


第45図 SA-I土層断面図

をもち、SD-46と同じ方向に屈曲するものと考えられる。溝の規模は幅65cm以上、深さ25cm程度である。遺構覆土は2単位に分けられ、上位層はにぶい黄褐色の色調をもつ細砂混シルト、下位層は褐色系の粗砂混シルトである。また最も時期の古いSD-48は上記の2条の溝とは異なり、ほぼ直線的にのびる溝である。規模は復元幅1.1m、深さ15cm程度であり、遺構覆土は2単位に分けられ、上位層は灰黄褐色の色調をもつ細砂混シルト、下位層はにぶい黄褐色系の細砂混シルトである。これらの溝は3条とも底面の比高差がほとんどなく流路方向は不明である。時期的には3条とも土師器細片が含まれているもので具体的な時期等は不明である。

(SD-43·45) (第47図、図版30·31)

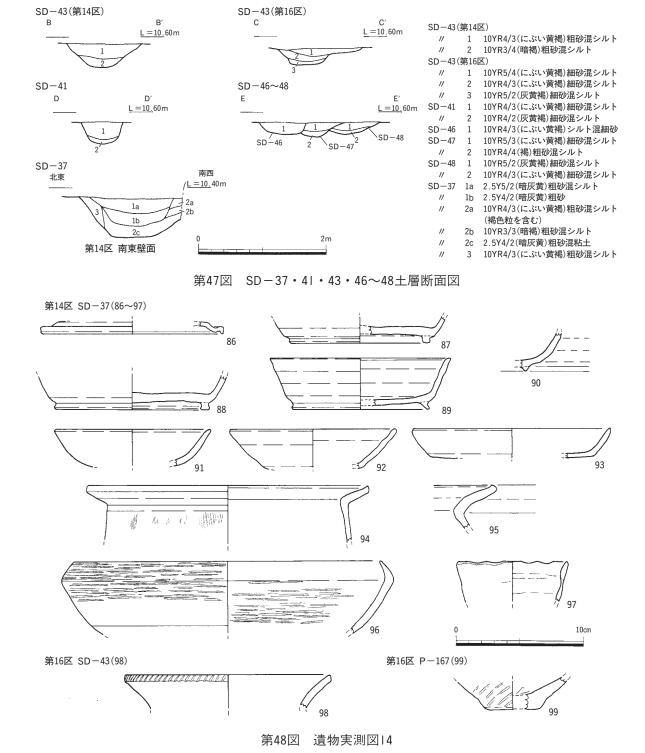
SD-43・45はともに第14区から第16区にかけて直線的にのびる東西方向の溝である。SD-43は、幅1.1~1.4m、深さ30~35cmのもので、遺構覆土は第14区では2単位、第16区では3単位に分けられ、上位層はにぶい黄褐色の色調をもつ粗砂混シルト、下位層は暗褐色から灰黄褐色系の色調となる。この溝も底面の比高差がほとんどなく流路方向は不明である。SD-45は最も広い部分で幅80cm、深さ20cmのもので、遺構覆土は褐色系の色調をもつ細砂混シルトの単一層である。この溝は東に向けて浅くなり、第16区の東半部で途切れることから流路方向は東から西とみられる。時期的には須恵器や土師器片が出土していることから古墳時代後期以降のものと考えられる。混入遺物ではあるものの、外端面に刻み目を施した土師器甕の口縁部(第48図98)がSD-43から出土している。



〔SD-41〕(第47図、図版30)

SD-41は第14区の中央部分で検出した東西方向の溝である。溝の規模は幅60~70cm以上、深さ35 cmで、遺構覆土は2単位に分けられ、上位層はにぶい黄褐色の色調をもつ細砂混シルト、下位層は 灰黄褐色系の細砂混シルトである。この溝も土師器細片が出土しているのみで、時期等は不明である。〔SD-37〕(第47図、図版30)

SD-37は第14区の南端部分で検出した東西方向の溝である。この溝の規模は幅1.6m以上、深さ80 cm程度で、遺構覆土は大きく3単位に分けられる。上位にあたる第1層は暗灰黄色系の粗砂及び粗



-36-

砂混シルトで土質により2単位に細分できる。この第1層にあたる単位が再掘削を行ったとみられる新段階の覆土と考えられる。また下位にあたる第2・3層は古段階にあたるとみられる覆土で、最下層にあたる第2c層が粘土質となる。この溝からの出土遺物(第48図)は比較的多く、上位の第1層には須恵器杯身(87・88)、土師器甕(94・95)の他、丸底IV類に分類できる製塩土器口縁部(97)がある。また下位にあたる第2層には須恵器杯蓋(86)、土師器の杯(89・90)、皿(91~93)の他、土師器の鉢(96)がある。この鉢は口縁部が内湾しシャープに立ち上がるもので、内外面に丁寧なヘラミガキ調整が施されている。以上の遺物からみて平城京IV期に分類できるもので、新古段階の時期差が認められない。なお、土器以外では、馬歯(図版61、226)が第2層から出土している。

(SK-51) (図版30)

SK-51は、第14区南端部で検出したSD-37に切られた直径70cmに復元できる円形の土坑である。 この土坑は、深さ約35cmのもので、覆土はにぶい黄褐色系の粗砂混シルトの単層で底面に焼土を多 量に含む特徴を持つ。土器類の出土はなく時期は不明である。

この他、第16区の中央部において噴砂を検出した。噴砂の砂脈はN-4° —Wの方向性をもつもので、長さ3.0m分を確認した。

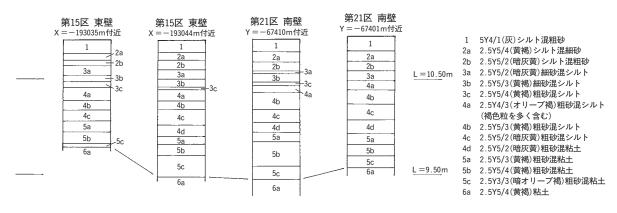
7. 第15・21区の調査(第49・50図、図版27・42)

第15区及び第21区は対象地南西隅角部の擁壁工事部分を対象とした調査区である。この周辺は調査の直前まで水田として使用されていた地点で、耕作面の標高は両区とも10.90m前後である。

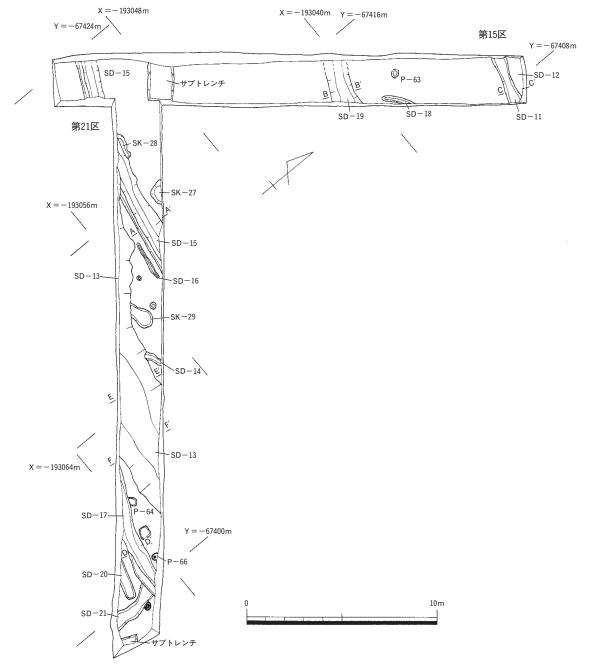
この地点での調査は、北側に位置する第14区において検出していた第5b層上面での遺構は確認されず掘削を進めた第6a層上面を第1遺構面として調査を行った。

当調査区の土層堆積は、表土以下の第2・3層が薄く2~3単位に分かれ堆積している。基本層となる第4層は比較的厚く4単位に細分が可能であり、その下層である第5層も比較的厚く3単位に細分が可能である。特に、微低地となる第15区南半部と第21区の中央部では、第6a層の直上層である第5c層が10~20cmと比較的厚く堆積している状況である。遺構面である第6a層上面の標高は第15区北端部で9.80m、第21区中央部で9.45mとなり、微低地部は35cm程度低くなっている。

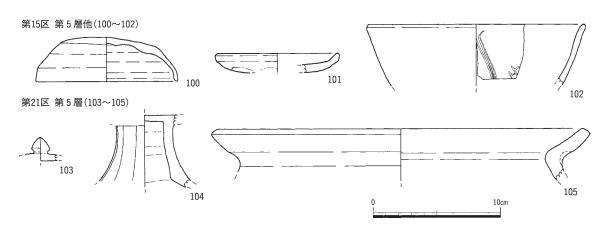
堆積層から出土した遺物(第51図)には、第15区では第5b層から出土した須恵器杯蓋(100)、第4a層から出土した土師器皿(101)、第1層から出土した中国製青磁碗(102)があり、また第21区では第



第49図 第15·21区土層柱状模式図



第50図 第15・21区遺構平面図



第51図 遺物実測図15

5 b層から出土した須恵器杯蓋の宝珠状つまみ(103)、第 5 c層から出土した土師器高杯脚部(104)や第 5 層から出土した土師器甕(105)がある。なかでも104の高杯脚部は、外面にヘラ切りによる面取りが行われているもので、横断面形が10角形に復元できるものである。

遺構は、第 6 a層上面である第 1 遺構面において、第15区では東西方向の溝 3 条 (SD-11・12・19)、溝状遺構 1 条 (SD-18)、ピット 1 基 (P-63)、第15区から第21区にかけてのびる東西方向の溝 1 条 (SD-15)を検出し、第21区では東西方向の溝 2 条 (SD-13・17)、南北方向の溝 1 条 (SD-21)、溝状遺構 3 条 (SD-14・16・20)、土坑 3 基 (SK-27~29)の他、ピット 6 基を検出した。

〔SD-15·19〕(第52図、図版30·43)

以下、主要な遺構を説明する。

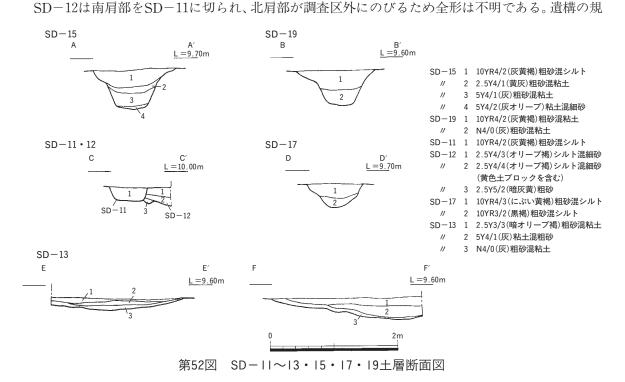
SD-15は第15区から第21区にかけて検出した東西方向の溝である。この溝はN-66~78°-Wの方向性をもちやや屈曲してのびるもので、幅1.0~1.3m、深さ65cm程度である。遺構覆土は4単位に分けられ、最上層は灰黄褐色系の粗砂混シルトで、第2層から下位は灰色系の土色で粘土質となる。この溝の流路方向は底面の比高差からみて西から東とみられ、地形に逆行する方向性である。出土した遺物(第53図)には第3層から出土した須恵器杯蓋(106)、第1層から出土した須恵器杯身(107・108)があり、107はやや古い様相をもつものであるものの飛鳥時代の溝と考えられる。

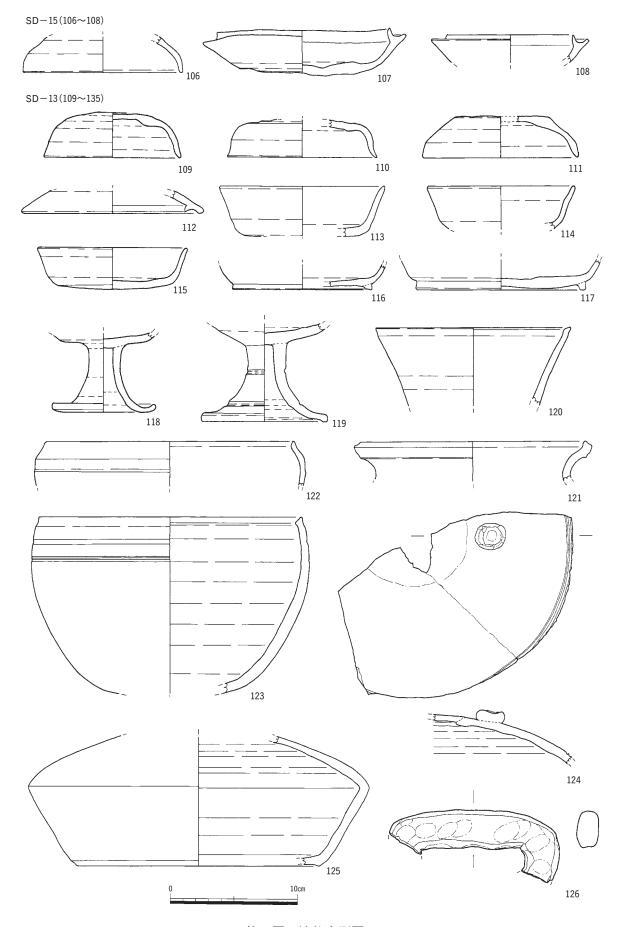
またSD-19は第15区の中央部において検出した東西方向の溝である。遺構の規模は、幅1.2m、深さ55cm程度であり、遺構覆土は上下2単位に分けられる。上位層は灰黄褐色系、下位層が灰色系の色調で、ともに粗砂混粘土である。この溝内部からは土器類の出土はなく時期は不明である。

この2条の溝は規模や方向性など類似する点が多く、関連性のある遺構と考えられる。

(SD-11·12) (第52図、図版31)

SD-11・12は第15区の北端部において検出した重なり合う2条の東西方向の溝と考えられる遺構である。SD-11は幅60~70cm、深さ20cmの規模で、覆土は灰黄褐色系の粗砂混シルト質の単一である。



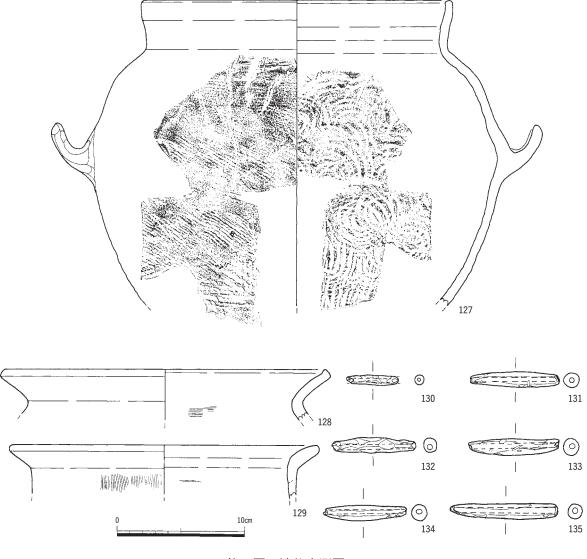


第53図 遺物実測図16

模は幅80cm以上、深さ25cm以上である。覆土は3単位に細分が可能であるものの、全体的にオリー ブ褐色系のシルト混細砂である。ともに須恵器・土師器の細片が出土していることから古墳時代中 期以降の遺構と考えられる。

〔SD-13〕(第52図、図版43)

SD-13は第21区の中央部で検出したやや屈曲してのびる東西方向の大溝である。遺構の規模は、復元幅3.3m、深さ35cm程度であり、遺構覆土は3単位に分けられ、層位全体に多量の遺物が含まれていた。最上層は暗オリーブ褐色の粗砂混粘土で、下位の2単位は灰色系の粗砂及び粘土質である。溝底面の傾斜は、西側よりも東側の方が深く掘削されているもので、地形に逆行する流路方向と考えられる。出土遺物(第53図)には須恵器では、杯Hに分類できる蓋(109・111)、杯Bに分類できる蓋(112)や杯Aに分類できる杯身(113~115)、杯Bに分類できる杯身(116・117)、高杯脚部(118・119)、壺口縁部(120)、甕口縁部(121)、鉢(122・123)、平瓶の体部片(124・125)や把手(126)の他、把手をもつ甕(第54図127)がある。また土師器(第54図)は、比較的少なく甕口縁部2点(128・129)が図示できた。土器類以外では、管状土錘6点(130~135)がある。以上の土器類からみて、飛鳥V期の時期が考えられる。



第54図 遺物実測図17

〔SD-17〕(第52図、図版43)

SD-17は第21区の南端部において検出した東西方向の溝である。遺構の規模は、幅70cm、深さ35 cm程度であり、遺構覆土は上下2単位に分けられる。上位層はにぶい黄褐色系、下位層が黒褐色系の色調で、ともに粗砂混シルトである。流路方向は底面の比高差がほとんどなく不明である。覆土内部からは須恵器・土師器の細片が出土していることから古墳時代中期以降の遺構と考えられる。

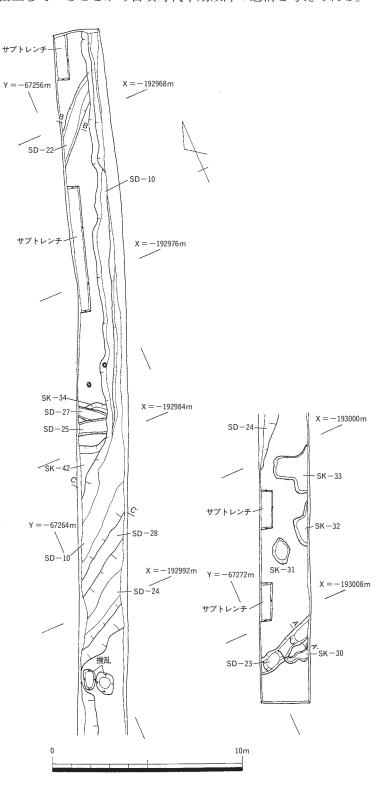
8. 第17区の調査

(第55・57図、図版32)

第17区は調査対象地中央部東端に位置する水路際擁壁工事部分を対象とした調査区である。この周辺は調査の直前まで水田として使用されていた地点で、耕作面の標高は11.35m前後である。南側に位置する第1区周辺は、前述のとおり対象地内では最も第6a層の標高が高い微高地部であり、本調査区も南端部では標高約11.00mと微高地部の範囲に位置づけられる。また本調査区中央部以北で検出した江戸時代の溝(SD-10)を境として第6a層が落ち込み北端部では10.50m程度となる。

この地点での調査は、第6a層上面において弥生時代から鎌倉時代の遺構を検出した他、中央部より北側において第4a層上面から確認できた江戸時代の溝と南端部において検出した類似する時期の粘土採掘坑とみられる土坑を検出した。

当調査区の土層堆積は、表土以下の第2・3層が薄く2~3単位に分かれ堆積している。基本層となる第4層は南側の微高地部では第4a層のみで薄く堆積し、北側の微低地部では厚みを増し3単位(第4a~4c層)に細分できる。また第5層は第5a層の1単位のみで比較的薄く、



第55図 第17区遺構平面図

その下面が第6a層上面となる。第6a層以下の状況は、サブトレンチ内部で検出したもので、4 単位(第6a~6d層)を確認した。

堆積層から出土した遺物(第56図)には、第5a層から出土した足高の高台をもつ土師器椀(136)、 瓦器椀(137)や第2層から出土した土師器皿(138)、第4a層から出土した瀬戸灰釉皿(139)などの土 器類がある。土器以外では、第5a層から出土した凹面に布目痕、凸面に縄タタキ痕のある平瓦(140) や第3層から出土したサヌカイトを素材とした平基式の石鏃(141)がある。この他、第6a層内から 弥生土器とみられる細片を、第6b層内から縄文土器とみられる細片を微量確認した。

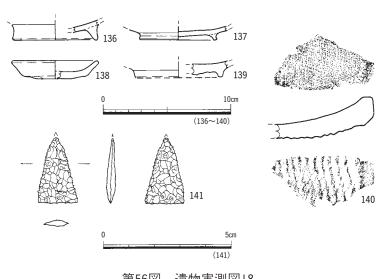
遺構は、第6a層上面において弥生時代中期の溝1条(SD-23)、古墳時代前期の大溝2条(SD-24・28)、奈良時代以降とみられる溝1条(SD-22)、中央部において検出した南北方向の溝2条(SD-25・27)や土坑2基(SK-34・42)の他、江戸時代の溝(SD-10)の底面において検出したSK-42に連結する溝(SD-26)などを検出した。また第4a層上面から確認できたものでは、江戸時代の大溝1条(SD-10)や江戸時代の粘土採掘坑とみられる土坑3基(SK-31~33)がある。

以下、主要な遺構を説明する。

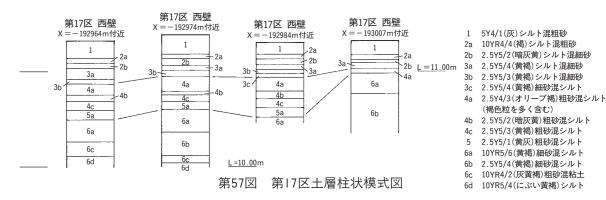
(SD-23) (第60図、図版34)

SD-23は調査区南端部の第6a層上面で検出した東西方向に軸をとる溝である。この溝は、幅80~90cmで、深さは部分的に深くなる特徴をもち最深部では25cmである。遺構覆土は3単位に分けられ、最上層の黒褐色粗砂混シルト質土に焼土及び炭が多く含まれる特徴がある。出土遺物(第59図)には弥生土器の広口壺(142)、紀伊型甕の口縁部(143·144)や底部(145)がある。時期的には、142の

頸部にヘラ描直線文が施され紀伊第 I 様式の特徴をもつものの、他の破片にはクシ描文をもつ壺細片が含まれていることから紀伊第 II 様式の範疇におさまるものと考えられる。遺構覆土や時期的な状況からみて近接する第 1 区で検出した SD-1・2 に類似する遺構と考えられる。

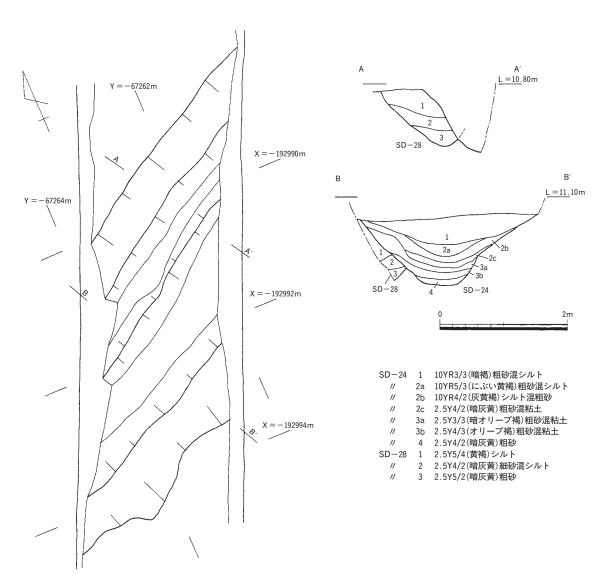


第56図 遺物実測図18

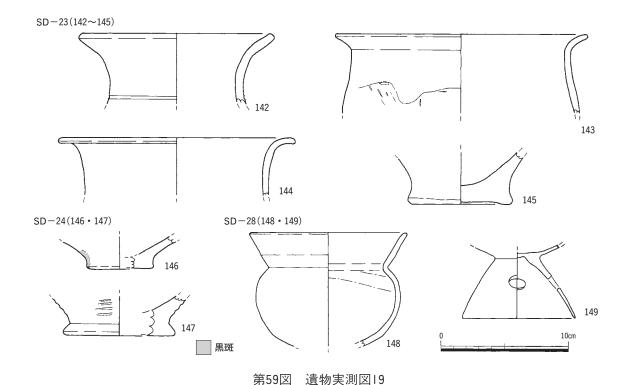


(SD-24·28) (第58図、図版33·34)

SD-24は調査区中央部において検出した東西方向の大溝で大きく南側に屈折してのびるものである。この溝の形状は上端幅2.8m、下端幅0.5m、深さ1.1mの逆台形状である。遺構覆土は数単位に細分が可能であるものの、大きくは4単位に分けられる。土質については、上位層がシルト質土、中位層が粘土質土、最下層のみが粗砂となる。SD-28はSD-24の北肩部に重なって検出した溝である。この溝は、残存幅65cm、深さ90cmの規模をもつ横断面形が「V」字状を呈するもので、復元上端幅は1.6mとなる大溝である。遺構覆土は3単位に分けられ、上位層はシルト質土、最下層のみが粗砂質である。SD-24からの出土遺物(第59図)には最下層から出土した弥生時代後期頃と考えられる壺底部(146)、鉢底部(147)があり、またSD-28からの出土遺物には最上層から出土した古墳時代前期の土師器小型壺(148)や脚部(149)がある。この様相から遺物からみれば時期が逆転することも考えられるものの、土層堆積からみても遺構の切り合いが確かであり、SD-28の遺物が最上部の混入遺物と考えれば2条の溝とも弥生時代後期頃のものと推定され、SD-28がある程度埋没した状態で再掘削された溝がSD-24である可能性も考えられる。



第58図 SD-24・28遺構平面図及び土層断面図

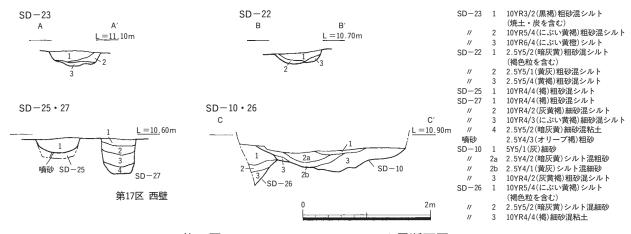


〔SD-22〕(第60図、図版34)

SD-22は調査区北端部で検出したN-45°-Eに軸をとる溝である。この溝は幅80cm、深さ20cm程度であり、遺構覆土は3単位に分けられ、全体的に暗灰黄色系の粗砂混シルト質土である。覆土内部からの出土遺物に堆積層である第5a層から出土した平瓦(第57図140)に類似する平瓦片があり、奈良時代以降の溝と考えられる。

〔SD-25·27〕(第60図、図版34)

 $SD-25\cdot 27$ はともに調査区中央部で検出した重なり合う 2条の溝である。新しい時期のSD-25は $N-77^\circ$ -Wの方向性で幅 $70\sim 80$ cm、深さ25cm程度であり、遺構覆土は褐色系の粗砂混シルト質土の単一である。古い時期のSD-27は $N-49^\circ$ -Wの方向性で幅60cm、深さ55cmであり、遺構覆土は 4単位に分けられ、上位層がシルト質土、最下層のみが粘土質土となる。遺構の時期としては、遺構の重複関係からみてともに鎌倉時代以降のものと考えられる。またこの 2条の溝底面において $N-50^\circ$ -E の方向性でのびる噴砂の砂脈を確認した。



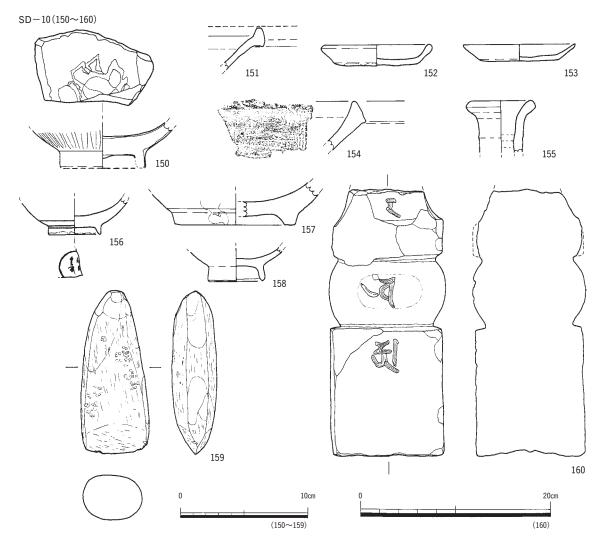
第60図 SD-10・22・23・25~27土層断面図

〔SD-26·SK-42〕(第60図、図版34)

SD-26はSD-10の底面で検出した $N-69^\circ$ - E の方向性に軸をとる溝で、幅 $1.2\,\mathrm{m}$ 、深さ $50\,\mathrm{cm}$ の規模である。この溝は調査区ほぼ中央部においてSK-42に連結し、SK-42に引水するために掘削された溝と考えられる。SK-42は検出幅 $3.1\,\mathrm{m}$ 以上、深さは $70\,\mathrm{cm}$ 程度で西調査区外に中心部が存在するとみられる。時期的にはともに瓦器細片が一定量含まれていることから鎌倉時代頃と考えられる。

〔SD-10〕(第60図、図版35)

SD-10は調査区中央部から北側の第4a層上面で検出した江戸時代の大溝である。この大溝は、調査区のほぼ中央部においてN-50°-Eの方向性で調査区を横切り、西肩部は東壁面に沿って北進するものである。実際に調査を行った部分は第6a層上面の層位からであり、検出幅2.4m、深さ35cmとして記録したもので、復元すると幅2.9m、深さ70cmの規模に推定できる。遺構覆土は大きく3単位に分層でき、上位層は粗砂及び細砂質が強く、下位層はシルト質である。また北側に進むほど粘土質となる特徴がある。出土した遺物(第61図)には、混入品も含め中国製の青磁碗(150)、東播系須恵器こね鉢(151)、土師器皿(152·153)、備前焼の擂鉢(154)及び徳利(155)、肥前系の磁器染付碗(156)及び陶器鉢(157)、瀬戸美濃系陶器碗(158)などの土器類の他、縄文時代のものと考えられる磨製石



第61図 遺物実測図20

斧(159)や室町時代のものと考えられる一石五輪塔(160)がある。遺構の時期としては、肥前系陶磁器などから17世紀代と考えられる。 この溝の性格としては、東肩部に現存する水路と同じ方向性をもつものであることから、現存する水路の古段階の水路である可能性が高い。

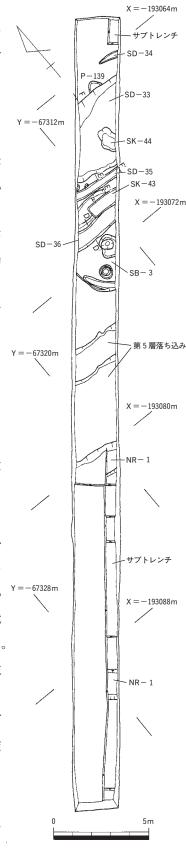
9. 第18区の調査(第62・63図、図版36)

第18区は第1区から南西部に続く擁壁工事部分を対象とした調査区である。この周辺は調査の直前まで水田として使用されていた地点で、耕作面の標高は11.10m前後である。北側に位置する第1区周辺は、前述のとおり対象地内では最も遺構面(第6a層上面)の標高が高い微高地部と位置づけられる。本調査区は北端部では標高約10.40mとなり微高地部と微低地部との傾斜地あたり、北端部において検出した溝状遺構(SD-34)を境として南側に向かって大きく下降する傾斜が進み、調査区ほぼ中央部では標高約9.35mとなり第1区と比較して約1.6m低くなる微低地となる。またこの微低地部にあたる中央部から南側は、大規模な自然流路(NR-1)となる。

この調査区では、北半部の第6a層上面において弥生時代中期の 竪穴住居1棟、古墳時代から奈良時代にかけての溝3条(SD-33・ 35・36)や土坑2基(SK-43・44)、中世の遺構と考えられる溝状遺 構1条(SD-34)を検出した他、南半部では古墳時代後期に埋没した と考えられる自然流路(NR-1)を確認した。

当調査区の土層堆積は、まず表土(第1層)が自然流路上部を中心として比較的厚く堆積している特徴がある。表土以下の状況は、第2・3層が薄く2~3単位に分かれ堆積している。第4層は北端部の微高地部では比較的薄く、4単位(第4a~4d層)に細分が可能で、これらの層位が南側微低地部に向かって厚みを増す傾向にある。また第5層は北端部では確認されず南側の微低地部にのみ3単位(第5a~5c層)の堆積を確認し、特に自然流路上部に厚く堆積している状況である。第6a層以下の状況は、北東隅角部に設定したサブトレンチ内部において確認したもので、2単位(第6a・6b層)を確認した。

堆積層から出土した土器類(第64図)には、第5b層から出土した土師器皿(165)や土師器椀(166)、第5a層から出土した土師器皿(161)や瓦器椀(167)、第4c層から出土した土師器皿(162~164)、第3層から出土した東播系こね鉢(168)がある。また土器以外では、凸面に格子目タタキを施した平瓦(169)が第5b層から出土した他、打



第62図 第18区遺構平面図

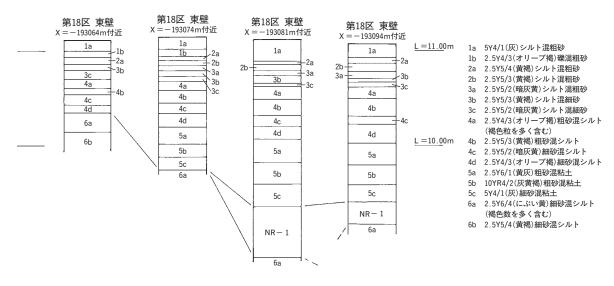
製石鏃 2点(170・171)が第5b層から出土している。

遺構は、第6a層上面において弥生時代中期の竪穴住居1棟(SB-3)、飛鳥時代の大溝1条(SD-33)、奈良時代頃とみられる溝2条(SD-35・36)、中世の範疇と考えられる溝1条(SD-34)、飛鳥時代もしくはそれ以前と考えられる土坑1基(SK-44)、時期不明の方形土坑(SK-43)の他、古墳時代後期に埋没したとみられる自然流路(NR-1)などがある。

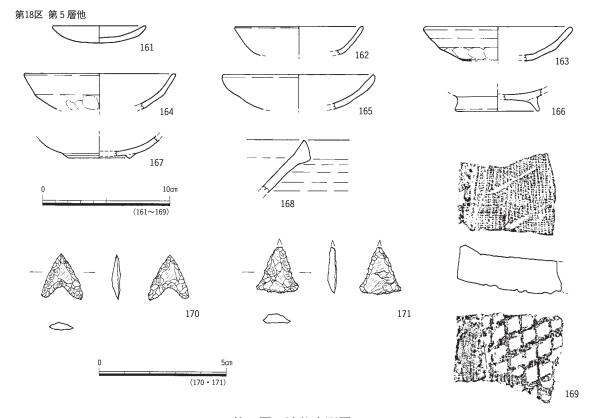
以下、主要な遺構を説明する。

〔SB-3〕 (第65図、図版37⋅38)

SB-3は調査区北半部において検出した直径5.5mの円形竪穴住居である。覆土は20cm程度遺存

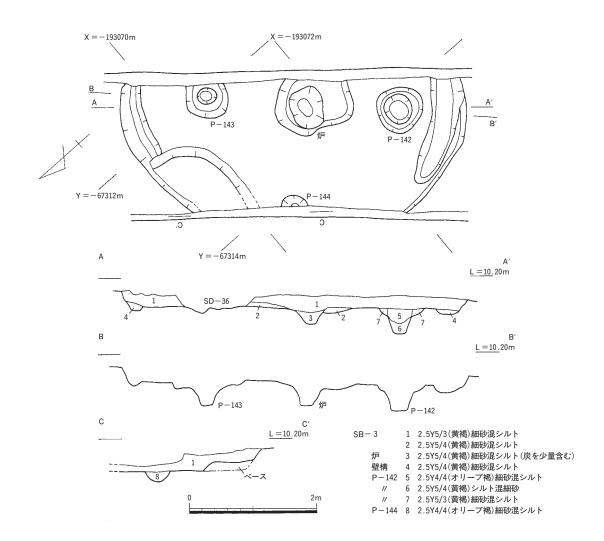


第63図 第18区土層柱状模式図

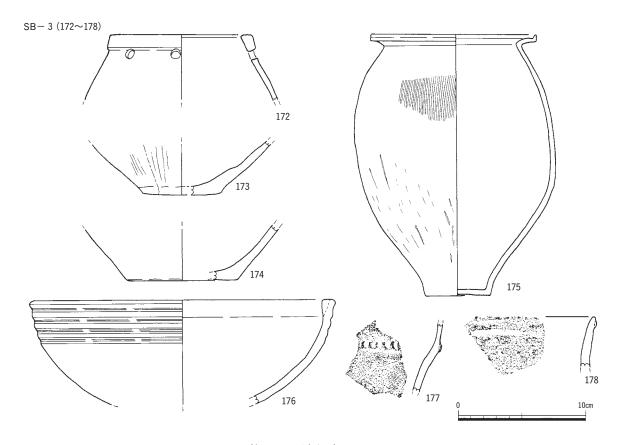


第64図 遺物実測図21

し、大半が第1層である黄褐色系の細砂混シルト質で埋没している。床面中央には直径55cm前後、深さ25cm程度の炉が配され、炉の周囲は5cm程度低くなっている。この炉内部の覆土は黄褐色系の細砂混シルトの単層で、炭を少量含む。また床面検出範囲において3ヶ所の主柱穴を確認したことから4本柱の建物であったものとみられる。また壁際には幅30~40cmの壁溝が巡り、北辺部にのみ10cm程度床面が高くなる部分が存在する。この部分の断割調査を行った結果、ベース層である第6a層を掘り残していることが判明し、いわゆるベッド状遺構もしくは入口であるものと考えられた。この建物内部から出土した遺物(第66図)には、弥生土器の無頸壺(172)、壺底部(173・174)、甕(175)、鉢(176)の他、混入遺物である縄文土器深鉢片2点(177・178)がある。弥生土器の出土位置について、主柱穴であるP-143から集中して出土した土器(172~174・176)が注目できる。弥生土器の特徴として完形品である甕(175)は、口縁部を外側に大きく屈折させ端部を上方に突出させるもので、体部外面上位にはタテ方向のハケ調整が、下部には紀伊型の特徴であるタテ方向のヘラケズリが施されている。また鉢(176)の口縁部外面には多条の凹線文が施されている。これらの弥生土器から判断して、弥生時代中期後葉の紀伊第IV様式のものと考えられる。



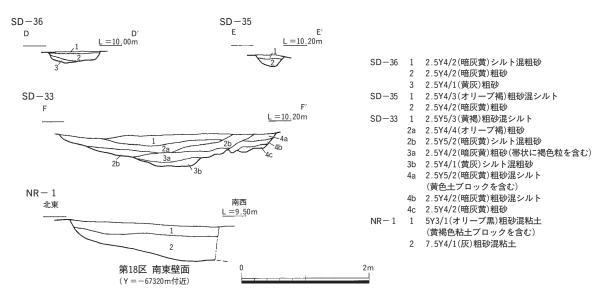
第65図 SB-3遺構平面図及び土層断面図



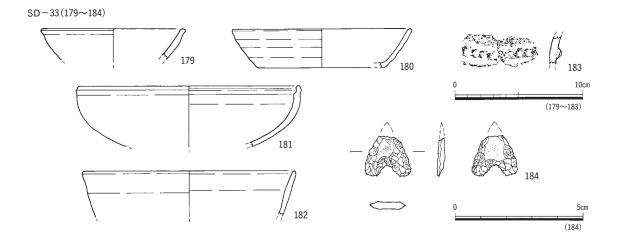
第66図 遺物実測図22

〔SD-33〕(第67図、図版39)

SD-33は調査区北端部で検出したほぼ東西軸に重なる方向をとる大溝である。この溝は幅2.2m、深さ50cm程度であり、遺構覆土は大きく4単位に分けられ、最終堆積である第1層以外は2~3単位に細分できる。覆土の特徴としてシルト質層と粗砂層の互層になる様相がみられる。覆土堆積の切り合いからみて再掘削が行われたものとみられ、第4層が古段階の堆積と考えられる。遺物(第68図)には、第3層から出土した土師器杯(179・181)や須恵器の壺口縁部(182)、第2層から出土した



第67図 SD-33・35・36及びNR- I 土層断面図



第68図 遺物実測図23

土師器皿(180)がある。また混入遺物では、縄文土器深鉢片(183)や凹基式の打製石鏃(184)がある。 遺構の時期としては、飛鳥時代の範疇におさまるものとみられる。

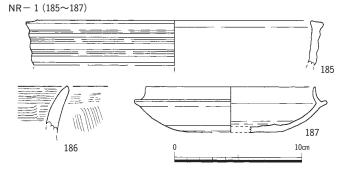
〔SD-35·36〕(第67図、図版39)

SD-35・36はSD-33の南側において検出した東西方向の溝である。SD-35は幅40cm、深さ20cm程度であり、遺構覆土は上下2単位に分けられる。またSD-36は幅80cm、深さ15cm程度であり、全体的に暗灰黄褐色系の色調をもつ粗砂及び粗砂混シルトである。

〔NR-1〕(第67図、図版39)

NR-1は調査区のほぼ中央部から周辺の最も微低地(標高9.50m)である南側に向かってさらに

落ち込むもので、推定幅約13m、深さ70cm以上を測り、サブトレンチ内部においても底面までの確認はできていない。出土した遺物(第69図)には、弥生土器直口壺の口縁部(185)、土師器甕の口縁部(182)、須恵器杯身(187)があり、この須恵器からみて最終埋没は6世紀頃と考えられる。



第69図 遺物実測図24

10. 第19・20区の調査(第70・71図、図版40・41)

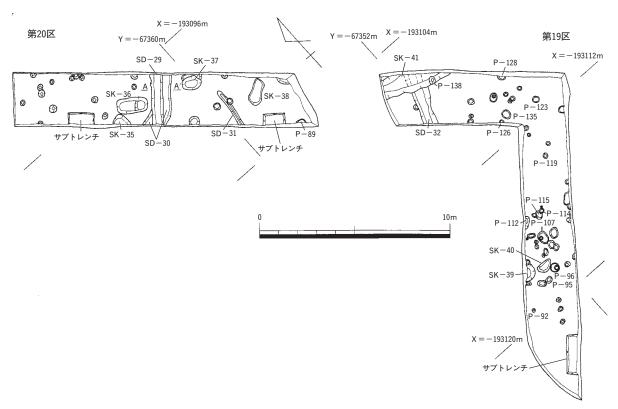
第19・20区は対象地南端の隅角部の擁壁工事部分を対象とした調査区である。この周辺は調査の 直前まで水田として使用されていた地点で、耕作面の標高は両区とも11.10m前後である。

当調査区の土層堆積は、表土以下の第2・3層が薄く2~3単位に分かれ堆積している。基本層となる第4層は5~15cmの厚みをもつ4単位の層位に細分が可能で、その下層である第5a層は比較的厚く、第19区から北側にのみ第5b層が堆積している。遺構面である第6a層上面の標高は第19区北端部では9.80m、南端部では10.00mとなり、南側に向かって20cm程度高くなる様相である。またこの南端部では第6層の堆積は存在せず第5a層の下面がオリーブ褐色系の粗砂(第7層)となる。また第20区では全体的に9.90mの高さでほぼ水平であり、サブトレンチ内部において標高9.50mまで掘削を行い第6b層まで確認した。本調査区内での第6層及び第7層内からは全く遺物は出土していない。

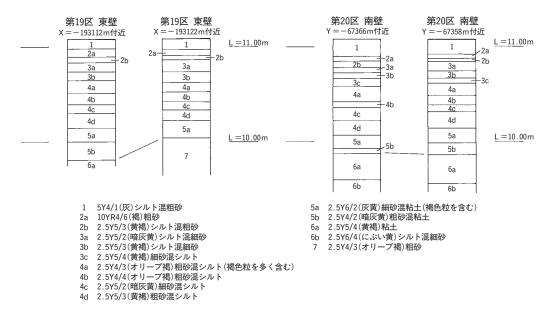
堆積層から出土した遺物(第72図)には、第19区の第5a層から出土した須恵器杯蓋(188)及び壺底部(189・190)、第4a層から出土した土師器皿(192)などがある。

遺構は、第19区の第 6 a層上面において溝 1 条 (SD-32)、土坑 3 基 (SK-39~41) の他、ピット多数を検出し、また第20区の第 6 a層上面において溝及び溝状遺構 3 条 (SD-29~31)、土坑 4 基 (SK-35~38) を検出した。これらの遺構の時期としては、第19区のP-123やP-126から中世土師器片が出土していることから中世段階の遺構の可能性が高い。

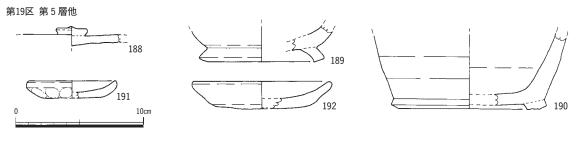
以下、主要な遺構を説明する。



第70図 第19・20区遺構平面図



第71図 第19・20区土層柱状模式図



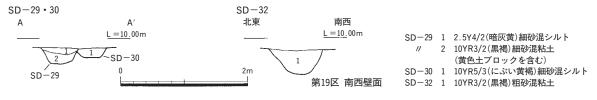
第72図 遺物実測図25

(SD-29·30) (第73図、図版43)

SD-29・30は第20区の中央部において重なり合って検出した溝である。SD-29はN-42°-Eの方向性で直線的にのびるもので幅60cm、深さ25cm程度であり、遺構覆土は上下2単位に分けられる。またSD-30はSD-29より古い時期のものでやや屈曲してのびる溝である。この溝は幅50cm、深さ15cm程度であり、覆土はにぶい黄褐色系の色調をもつ細砂混シルトの単層である。遺構の時期としては、SD-29から中世土師器片が一定量出土していることから中世の範疇とみられ、SD-30はやや古い時期のものと考えられる。

〔SD-32〕(第73図、図版43)

SD-32は第19区の北端部において検出した溝である。この溝は幅 $70\sim85$ cm、深さ $30\sim45$ cmであり、 $N-20^{\circ}-E$ の方向性で直線的にのびるものである。遺構覆土は黒褐色の粗砂混粘土の単層である。また溝底面の高さは北側に向かって下降する傾斜をもち、その流路方向は傾斜に沿った南から北であることがわかる。



第73図 SD-29・30・32土層断面図

第3節 第12次調査成果

第12次調査は、開発計画範囲南東部にあたる第1区の東側に計画された擁壁工事路線を対象に行った。調査区は幅2.0~2.5mの調査区を3区画に分け、設定した。東西方向に長い第22区の東端に第23区が屈曲して接続し、第22・23区の北側に第24区が位置する。以下では第22区と第23区には連続する溝が存在することから合わせて検出遺構等について説明し、やや北側に離れる第24区は別の項で説明を行う。

1. 第22・23区の調査(第74・75図、図版47~49)

第22・23区の現況は水田で、耕作面の標高は11.25m程度でほぼ水平である。遺構は第4a層上面、第6a層上面で検出した。主たる遺構面である第6a層上面の標高は第22区西端部で約10.90m、東端部で約10.95mとなり東側に向かってわずかに上昇する傾斜をもつ。

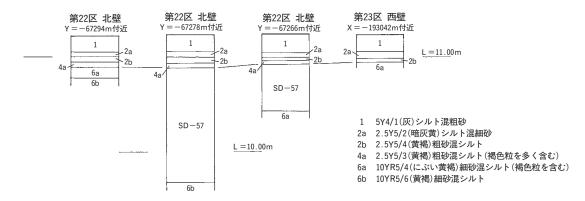
土層堆積は、表土である現代の水田耕作(第1層)の下に比較的薄く2単位に細分できる第2層が堆積し、他の調査区で確認された第3層は第22区の一部にのみ堆積があり、大半の部分は第2層の直下が4~6cm程度の厚みをもつ第4a層となる。遺構面の標高が最も高い第23区周辺部は第4a層の堆積がなく第2層の直下が第6a層となる。また第6a層以下の堆積については、サブトレンチを第22区西端の北壁面下に設定して確認した他、第22区の調査区に沿って確認した平安時代の溝(SD-57)肩部壁面等において確認したもので、隣接する第1区で確認した縄文時代後期の遺物群は本調査区では出土していない。遺物包含層の第4a層からは、中世土師器、瓦器、土師器、須恵器、砂岩製叩石、サヌカイト片などが出土している。

遺構は第22区から第23区にかけて第6a層上面において調査区に沿って検出した平安時代の溝1条(SD-57)、江戸時代の溝1条(SD-56)の他、第22区西半部で検出した中世の溝1条(SD-62)、土坑10基などを確認した。

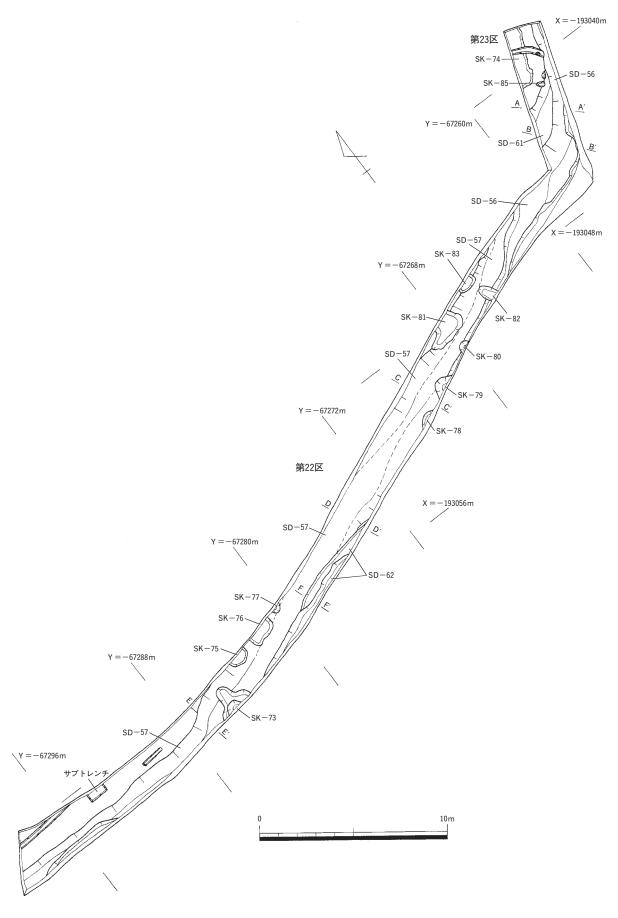
以下、主要な遺構を説明する。

〔SD-57〕(第75·76図、図版48)

第22区の西端から東端近くまで東西方向に約45m分検出された溝で、第23区の境界部分でSD-56に切られて途切れるが、位置・形態の類似から第23区のSD-61に接続すると推定される。堆積の上層は黄褐色系粗砂混シルトで、下層はシルト混粗砂となる。第22区では調査区幅との関係で全掘はしていないが、西部と東部で溝北肩部が検出され、中央部で溝南肩部が検出されている(第76図D-



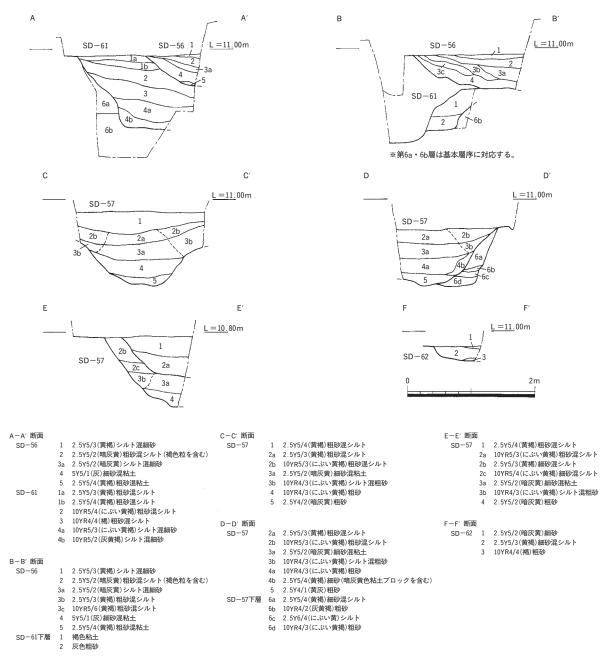
第74図 第22·23区土層柱状模式図



第75図 第22·23区遺構平面図

D'断面付近)。検出面での溝幅は約3.0mに復元され、溝底幅は $0.5\sim1.4$ m、溝底の標高は約9.6m、検出面からの深さは $0.9\sim1.4$ mである。断面図作成部分でしか確認できていないため遺構番号をつけていないが、SD-57(SD-61)に先行する溝(第76図B-B'断面やD-D'断面参照)や後出する溝とみられる土層(E-E'断面図参照)が存在しており、SD-57と同じ場所に頻繁に溝が形成されたことがわかる。

SD-57第2・3層からの出土遺物(第77図)には、奈良時代の須恵器杯蓋(193)・壺(194)の出土もみられるが、堆積下層をはじめとして出土遺物の多くは平安時代の遺物(土師器杯・皿、黒色土器B類)であり、溝の時期も平安時代後期とみられる。その他の遺物としてサヌカイト製石錐(203)、内面に布目や吊り紐痕の観察される丸瓦片(202)がある。



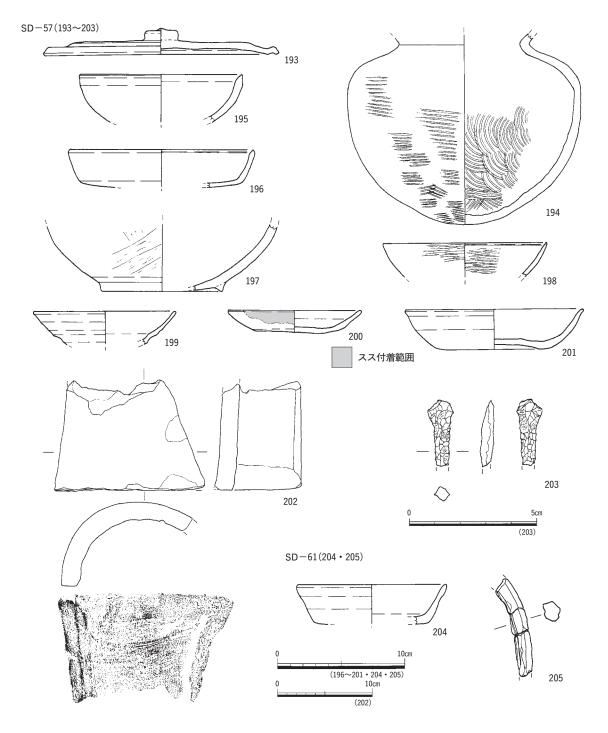
第76図 SD-56・57・61・62土層断面図

〔SD-61〕(第75図)

第23区で検出された溝で、SD-56に切られている。前述にように、位置・堆積状況よりみて第22区SD-57につながるものとみられる。溝断面形は逆台形になるようで(第76図A-A'断面、B-B'断面)、溝底レベルは標高9.50~9.75mである。出土遺物(第77図)には須恵器杯身(204)、土師器足釜脚部とみられる土器(205)などがある。

〔SD-62〕(第75·76図、図版48)

第22区の中央部南側で長さ約10m分が検出され、幅0.8m以上である。全掘されていないが、調査



第77図 遺物実測図26

された範囲では、深さが約25cmと浅く、細砂や細砂混シルト、粗砂を埋土とする(第76図 F - F′断面)。出土遺物(第78図)には土師器皿(206)、東播系須恵器こね鉢(207)があり、中世期の遺構と考えられる。

〔SD-56〕(第75図、図版51)

第22区東部から第23区にかけて検出された溝であり、第24区東端でも肩が検出され、SD-57(SD-61)を切るように形成される。溝幅は3.0m以上、深さ48cm以上である。埋土上層は粗砂混シルト質で下層は粘土質の堆積で、断面形態(第76図B-B′断面参照)よりみて比較的幅広で浅い溝であったようである。この溝は第23区や第24区東端では、調査区東側の現在の水路に平行するように南北方向に流れたあと、第22区と第23区の境界付近で方向を南西方向へ屈曲させて流れる。埋土からの出土遺物(第79図)は弥生土器(214)の出土もあるが、肥前系陶器碗(210)、肥前系磁器染付碗(211)、備前焼壺(212)、土師器炮烙(213)などの出土があり、近世期の溝と判断される。

〔SK-85〕(第75図)

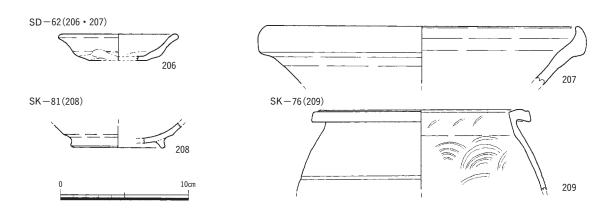
第23区のSD-61の西側肩部で検出された土坑で長さ約50cm分、幅約30cm分確認され、深さ約40cm であった。褐色系シルトを埋土としており、細片ながら弥生土器、縄文土器とみられるものが出土しており、古墳時代以前の古い時期の遺構と考えられる。後述する第23区の弥生時代遺構との埋土の類似性よりみて弥生時代に属する可能性がある。

〔SK-81·83〕(第75図)

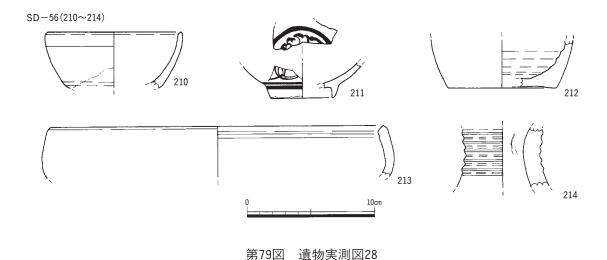
第22区東部の北壁付近、SD-57の肩部および上位で検出された土坑である。検出面では別土坑として番号を付けているが、土層図の検討より、第4a層上面より形成された黄褐色(2.5 Y 5/4)シルト混細砂を埋土とする東西長5.8 m、南北幅1.0 m以上、深さ5~30cmの規模の大きい一つの土坑と判断された。底面は平坦でなく、部分的に深い場所がみられる。SK-81埋土より土師器杯(第78図208)、SK-83埋土より須恵器細片が出土し、平安時代以降の遺構と判断される。

〔SK-75·76〕 (第75図)

第22区西半の北壁付近で検出された二つの土坑で、土層の検討よりみて、4a層上面から形成された長さ東西長3.7m、南北幅0.6m以上の規模をもつ一つの土坑ととらえられ、暗灰黄色(2.5Y5/2) 細砂を埋土とする。検出面の状況により西側をSK-75、東側をSK-77として扱った。SK-75埋土



第78図 遺物実測図27



からは中世土師器細片、SK-76埋土からは、肥前系陶器甕(第78図209)が出土し、江戸時代かそれ以降の形成と判断された。肥前系陶器甕の外面には褐色釉が施釉され、胴部外面には1条の沈線、胴部内面には当て具の痕跡が観察される。江戸時代前期の所産である。

〔SK-77〕(第75図)

SK-76の東側に位置する土坑で、東西長約70cm、東西幅0.3m以上、深さ約12cm、オリーブ褐色 (2.5 Y 4/3)シルト混粗砂を埋土とする。壁面観察ではSK-76に切られ、第4a層下面から形成されていることがわかり、 $SK-75\cdot76$ より古い遺構と判明する。埋土から黒色土器細片1点が出土しており、平安時代の遺構の可能性もある。

〔P-197〕(第75図)

第23区で検出された小ピットで、直径約20cm、深さ約30cmで暗褐色系シルトを埋土とする。第24区の弥生時代遺構の埋土と共通することから、弥生時代の遺構とみられる。

その他、暗灰黄色シルト混細砂を埋土とするSK-73・78・82があり、黄色土ブロックを含むSK-73からは肥前系陶器、SK-78・82からは中世土師器細片などの出土があり、それぞれ江戸時代以降、中世以降の形成とみられる。また黄褐色シルト混細砂を埋土とするSK-79から中世土師器皿、暗灰黄色粗砂混シルトを埋土とするSK-80からは中世土師器細片の出土があり、ともに中世以降の遺構と考えられる。

2. 第24区の調査(第80・81図、図版50)

第1区の東側、第22区の北側に設定された調査区である。地表面の標高は11.35m付近で、床土(第2層)下層の標高約11.00mの第6a層上面に遺構面が形成される。第2層からは近世平瓦、肥前系磁器、瓦器、中世土師器、土師器などが出土した。

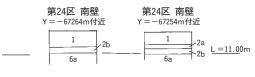
遺構としては土坑が多く検出され、なかにはSK-54やSK $-55\cdot56$ のように東西幅が4.8m、7.4m にも及ぶ規模の大きいものもある。埋土の共通性では、地山ブロックを混じえる茶灰色シルトを埋土とする土坑(SK $-53\sim59\cdot61\sim63\cdot65\sim67\cdot70\sim72\cdot$ SD-59)が大半で、他には淡灰茶色シルトを埋土とするSK $-60\cdot64\cdot68\cdot74$ 、暗茶灰色粗砂混シルトのSK-69、暗褐色シルトのSK-84がある。地山ブロックを混じえる茶灰色シルトを埋土とするSK $-54\sim56$ 、71、72からは瓦器・土師器などの中世遺物とともに肥前系陶磁器、近世瓦が出土することから、同種の埋土をもつ遺構の多くは江戸時代かそれ以降と推定される。また淡灰色シルトを埋土とする土坑のうちSK-64からは近世とみられる土器片、SK $-68\cdot74$ からは中世土師器片、中世陶器片の出土があり、それぞれ近世以降、中世以降の形成と判断される。規模の大きい不定形の土坑(SK $-54\sim56$)は調査区西半に存在し、その他の土坑は調査区東半に分布する。

調査区東端の溝SD-56は第23区の江戸時代溝(SD-56)と同一の溝で、肩部のみ検出された。 以下に主な遺構について記述する。

〔SD-60〕(第82図、図版50)

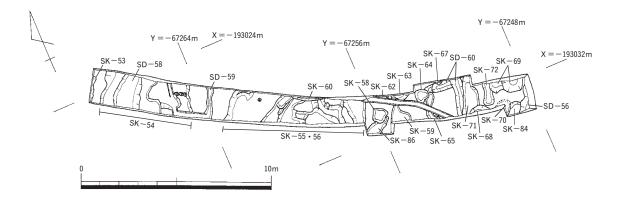
第24区東部で検出された溝で、L字状に屈曲する。西側に伸びる土坑状部分と東側の南北方向に調査区を横切る溝に分かれるが、埋土の第1・2層は共通であり、検出面で分層することができず同一の遺構と判断した。第1層は灰褐色シルト、第2層は茶褐色シルト、第3層はブロック混じり

の黄褐色シルトで、西側の土坑部分では第 1・2層が堆積し、東側の溝部分に第1~3 層の堆積が確認された。溝部分は、長さ2.0 m 以上、幅45~55cm、深さ30~40cm、土坑状部 分は長さ約1.5 m、幅約50cm、深さ約30cmであ る。西側の土坑状部分と溝との接続部分は平 坦ではなく、土坑状の底面が上昇しつつ溝部



- 1 5Y4/1(灰)シルト混粗砂
- 2a 2.5Y5/6(黄褐)粗砂混シルト
- 2b 2.5Y5/2(暗灰黄)細砂混シルト
- 6a 2.5Y5/6(黄褐)シルト(褐色粒を含む)

第80図 第24区土層柱状模式図

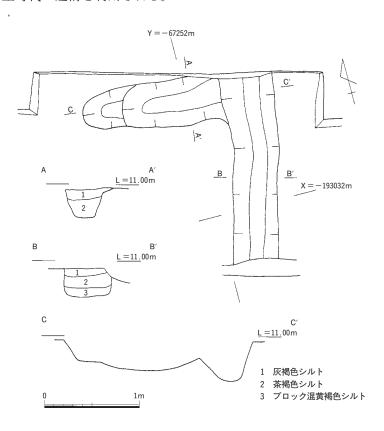


第81図 第24区遺構平面図

分につながっている。L字形に溝を掘削したというよりは、直線的な溝に土坑を接続した意識がう かがい知れる。溝堆積の第3層が溝部分にしかないことを評価するなら、溝の掘削が早く、第3層 堆積後に土坑部分が構築された可能性も想定されるが、部分的な調査であり、確定はできない。埋 土からは弥生土器片が出土し、弥生時代の遺構と判断される。

〔SK-86〕 (第83図、図版50)

第24区中央部のやや東側の南 壁付近で検出された土坑で、壁 から北東方向にのびる。長さ1.4 m以上、幅約70cm、深さ約45cm で、底面は平らである。東壁は 垂直に近い立ち上がりをもち、 西側壁はやや傾斜をもち、溝断 面形は逆台形に近い。埋土は SD-60に類似する。土坑下層よ り、弥生土器の紀伊型甕(第84図 215)が出土し、第Ⅱ様式頃の所 産とみられる。なお、L字状に 屈曲するSD-60の土坑状西端 とこのSK-86の北東端の間は 約2.3m離れているが、ともに底 面は段をもちながら上昇し、端 部に至る形態であり、底面レベ

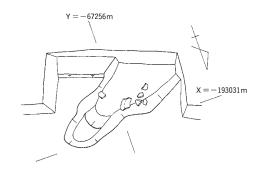


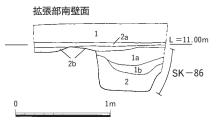
第82図 SD-60遺構平面図及び土層断面図

ルもSD-60土坑状部分で標高10.65~10.75m、SK-86で標高10.50~10.75mと近似する。よって、整った プランではないが、SD-60とSK-86が関連するもの とすると、区画溝が途切れた部分をもつ弥生時代の区 画墓遺構の一部である可能性が想定される。

〔SK-84〕(第81図)

調査区南東で確認された東西方向の長さ1.1m以上 の土坑である。東側をSD-56に切られ、西側はSK-70に切られており、全体形が不明確ながら、北側は土坑 壁面の傾斜が一部残され、土坑底面プランの北側ライ ンと西端も判明する。土坑は南側に拡張した調査区の 南西端部より西へ約10cmの位置に西肩部があると復元 され、底面西端部のプランよりみて南側へはあまり展 開しないと判断される。東側はSD-56との接点付近で も底面は平坦であることより、東側へ向かって延びて 第83図 SK-86遺構平面図及び土層断面図





- 1a 2.5Y5/4(黄褐)細砂混シルト
- 1b 2.5Y5/3(黄褐)細砂混シルト
- 10YR4/3(にぶい黄褐)粗砂混シルト
- ※上位土層は基本土層に対応

いた公算が強い。埋土上層は褐色シルト(7.5YR4/3)、下層は黄褐色細砂混シルト(2.5Y5/3)でSD-60、SK-86に類似する。埋土より弥生土器の紀伊型甕片、クシ描直線文のある壺片が出土しており、第II様式頃とみられる。

〔SK-55·56〕(第81図)

調査区中央に展開する土坑で、底面に凹凸があり、不定形に掘削されている。東西幅は約7.4m、 検出面からの深さは10~50cm程度で、埋土は地山ブロック混じり茶灰色シルトである。ブロック土 を混じえていることもあり、土取り用に掘削された穴であったかもしれない。出土土器(第84図)に は、瓦器椀(217・218)、土師器釜(219)、弥生土器高杯脚部(216)などのほかに肥前系陶器(唐津焼) 片、美濃瀬戸系天目茶碗片などがあり、江戸時代の遺構と推定される。なお、弥生土器は中期の第 IV様式のものであり、周辺に同時期の遺構が存在していた可能性を示唆する。

〔SK-54〕(第81図)

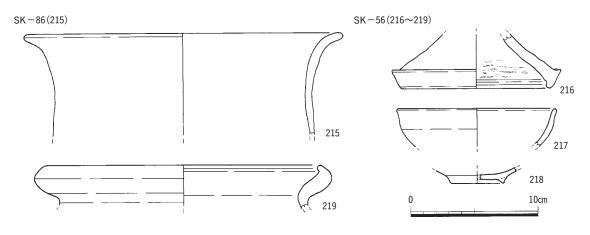
調査区西端に形成された土坑で、東西幅4.9mで深さ15cm程度の土坑で、中央に南北方向にのびる 溝SD-58がある。SK-54は $SK-55\cdot56$ と同様の地山ブロック混じり茶灰色シルトを埋土とし、 SD-58は黄色ブロックをわずかに含む灰色砂層を埋土とする。土坑は東西の両方の肩部からこの中央のSD-58に向かって緩やかに傾斜している。埋土は異なるが、位置関係よりみてSD-58とSK-54は関連する遺構かもしれない。SK-54埋土より肥前磁器、瓦器のほか縄文土器の可能性のある土器片が出土しており、江戸時代の遺構と判断される。

〔SK-60〕(第81図)

調査区中央北側の壁際で検出された円形土坑の一部で、調査区の関係で深さ20 cm分しか掘削できていない。埋土は淡灰茶色シルトで $SK-55 \cdot 56$ より新しく、江戸時代かそれ以降に形成されたと判断される。

〔SK-69〕(第81図)

調査区北西隅で検出された円形の土坑で西側に少し浅くなった土坑状部分が接続する。暗茶灰色 粗砂混シルトを埋土とし、近代かとみられる瓦片・染付磁器が出土した。



第84図 遺物実測図29

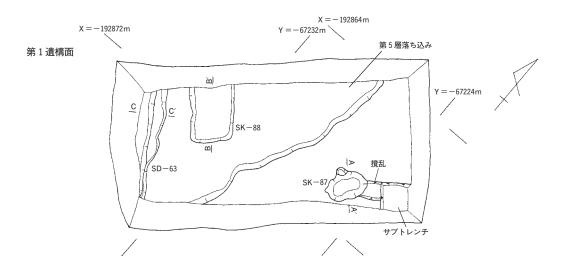
第4節 第13次調査成果

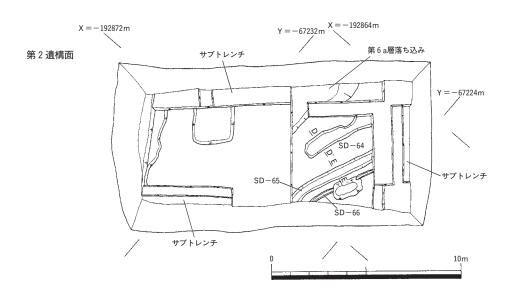
第13次調査は、開発計画範囲北部にあたる第11次調査第5区の南東側約15mの地点に計画された 浄化槽設置範囲を対象に行った調査である。調査区は長辺約16.5m、短辺約8.5mの方形区画1箇所 である。本調査における調査区番号は、第10~12次調査と対象地が同じであることから、これまで の番号を踏襲して第25区とした。なお、遺構番号等すべての調査に関する事項も同様である。

以下、検出遺構等の説明を行う。

1. 第25区の調査(第85図、図版52・53)

第25区の現況は、これまでの調査区とは異なり既に造成工事が行われていたことから現代の水田耕作土(第1層)の上部に造成土(約1.2m)が堆積している状況であった。調査区壁面で確認した現代の水田耕作面の標高は11.30~11.40mである。遺構面は第6a層上面及び第6a層下面の2面として確認したもので、その標高は第1遺構面(第6a層上面)が東端部で10.40m、西端部で10.20mとなり東から西に向かって下降する傾斜をもつ。また第2遺構面(第6b層上面)も東端部で10.20m、西端





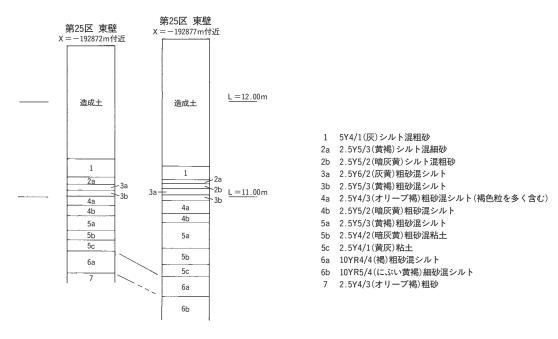
第85図 第25区遺構平面図

部で10.00mとなり、第1遺構面と同様の傾斜をもつ。

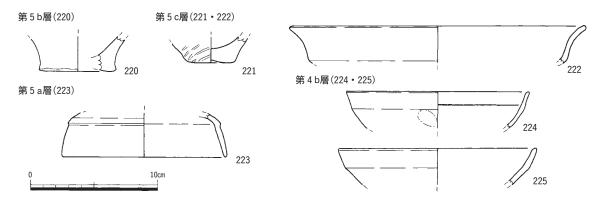
当調査区の土層堆積は、造成土の下に現代の水田耕土(第1層)があり、その下部に第5区周辺と同様である薄く2単位に細分できる第2・3層が堆積し、第4a層上面までほぼ水平堆積を示す。第4a層以下になると第4層が2単位に、第5層が3単位に分けられ、西に向かって厚みを増していく状況である。同様にサブトレンチ等で確認した第6a層以下の堆積についても、下降する傾斜を示し、少なくともこの微地形の形成は弥生時代以前に遡るものと考えられる。また第4区で確認していた第7層は、本調査区東端部の第6a層下面において部分的に確認した。

遺物包含層から出土した遺物(第87図)には、第5c層から出土した弥生土器高杯の口縁部(222)や土師器甕底部(221)、第5b層から出土した弥生土器壺底部(220)、第5a層から出土した須恵器杯蓋(223)、第4b層から出土した土師器椀(224·225)などがある。なかでも弥生土器高杯(222)は、弥生時代後期前半頃のもので、これまで本遺跡ではこの時期の遺構が確認されていない時期の遺物として注目できる。

遺構は、第6a層上面である第1遺構面では、溝1条(SD-63)、土坑2基(SK-87・88)を検出した。これらの遺構覆土内には土師器細片が含まれているのみで具体的な時期は不明である。また第



第86図 第25区土層柱状模式図



第87図 遺物実測図30

6 b層上面である第 2 遺構面は、第 1 遺構面の調査後に設定して掘削したサブトレンチ内で確認した遺構の部分を拡張して調査を行ったもので、弥生時代の範疇と考えられる溝及び溝状遺構 3 条 (SD-64~66)を検出した。この遺構面は、近接する第11次調査第 5 区ではサブトレンチの調査において遺構を検出していなかったものである。しかし、南側25 mの地点で行った第 9 次確認調査第 4 区では第 6 b層上面をベースとする遺構を検出していた。

以下、主要な遺構を説明する。

〔SD-63〕(第88図、図版54)

SD-63は調査区南壁面下において検出した $N-32^\circ$ -Wの方向性で直線的にのびる溝である。この溝は幅1.5m以上、深さ40cm程度であり、底面の比高差からその流路方向は南東から北西であるものとみられる。遺構覆土は4単位に分けられ、最上層である第1層のみが外側に広がる状況であり、全体的にオリーブ褐色系の色調で粘土質土である。溝の時期については、土師器の細片が6点出土したのみで詳細は不明である。またこの溝の延長部である第5区南端部には類似する溝(SD-6)があり、おそらく2条の溝は同一のものと考えられる。

〔SK-87〕(第88図、図版54)

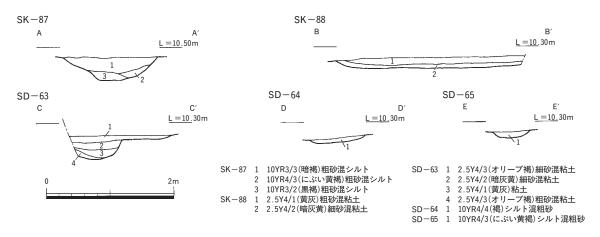
SK-87は調査区の北東部で検出した不定形の土坑である。この土坑は長辺2.2m、短辺1.7mで深さは35cmである。覆土は3単位に分けられ、全体的に暗褐色系の粗砂混シルトである。遺構内部からは土師器高杯の脚部などが出土していることから奈良時代頃の遺構と考えられる。

〔SK-88〕 (第88図、図版54)

SK-88は調査区の南西部で検出した方形の土坑である。この土坑は長辺2.9m以上、短辺2.2mで深さは15cm程度である。覆土は上下2単位に分けられ、全体的に灰色系の色調でともに粘土質である。遺構内部からは土師器の細片が少量出土したものの、遺構時期を限定できる遺物は出土していない。

[SD-64~66] (第85⋅88図、図版54)

SD-64は南北方向に軸をとる溝状遺構である。この溝状遺構は、幅80cm、深さ10cm程度で、覆土は褐色系のシルト混粗砂層の単一層である。またその東側で検出した溝2条($SD-65\cdot66$)も同じ方向性をもつもので、覆土もSD-64と類似する。これらの遺構の時期は、SD-66から弥生土器の細片が出土したのみであるものの、層位的にみて弥生時代中期以前の遺構と考えられる。



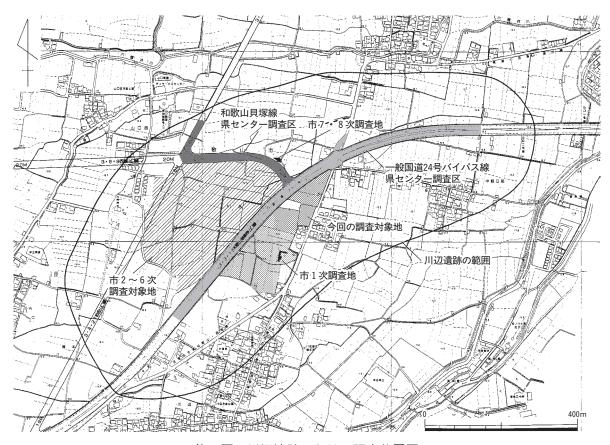
第88図 SK-87・88及びSD-63~65土層断面図

第5章 まとめ

第1節 川辺遺跡内における時期別遺構分布について

川辺遺跡は東西約1km、南北約650mの広大な範囲をもち、縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡として知られている。当遺跡の調査は県センターが行った遺跡範囲のほぼ中央部を東西に貫く形で計画された一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査(調査面積30,641㎡)に始まり、同じく県センターが行ったこの国道に取り付く形で計画された平成9・12・13年度の県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査(調査面積約7,400㎡)がある。また、平成13年度には市事業団が遺跡の実態解明を目的とした発掘調査(市第1次調査、調査面積192㎡)を実施している。その後、平成18年に一般国道24号バイパス西側に大規模開発が計画され、事前の確認調査(市第2・3次調査)を行い、この成果をもとに平成18・19年度に本発掘調査(市第4~6次調査、調査面積約2,250㎡)を当公社が行った。さらに、平成19年度には県道和歌山貝塚線の北側隣接地においてガス整圧器設置に伴う事前の調査(市第7・8次調査、調査面積約140㎡)を当公社が行った(第89図)。これらの調査成果から川辺遺跡は大規模な複合遺跡と位置づけられ、縄文時代後期以降の様々な集落の様相があり、遺跡範囲の中でも時期別の遺構分布がかなり明確となりつつある。

川辺遺跡内における遺構分布に関しては、県センターが行った県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良工事に伴う発掘調査の報告書(2005年)に平成13年度段階の遺構分布が示されている。その後、大規模開発が進み市公社における事前の発掘調査成果の蓄積から県センター報告書をベースとし、加筆修正した遺構分布を川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書(2008年)に示している。今



第89図 川辺遺跡における調査位置図

回の調査は、遺跡中央部一般国道24号バイパス東側に計画された開発計画範囲約20,000㎡を対象としたもので、この対象地における遺跡の状況が少なからず明らかとなったものといえる。このことから、川辺遺跡における古環境の状況と遺構分布について上記の報告書に加筆修正してまとめとしたい。

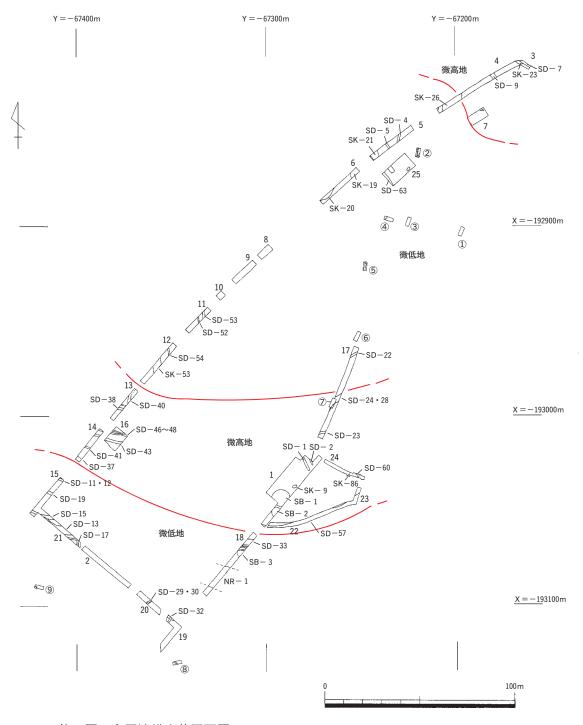
1. 本調査範囲における遺構分布

今回の調査は、開発計画対象地の周囲における擁壁工事路線区や浄化槽設置に伴う調査区、防火水槽設置に伴う調査区など本発掘調査区が25区画に分かれており遺構全体の様相は不明確なものが多い。しかし、対象地全体の様相については古環境の微地形を含め遺構分布を明らかにしたものといえる。この内容を確認調査区(市第9次調査)を含め南北方向に2分割して説明する(第90図)。なお、古環境の微地形については、古墳時代以降を中心とする遺構面(第6a層上面)を対象とし、調査成果からみてこのベース層の成立が弥生時代後期頃と判断でき、その形成過程である縄文時代の様相とは異なるものである。

まず対象地北部の様相は、本調査区では第 $3\sim10\cdot25$ 区、確認調査区では第 $1\sim5$ 区が該当する。この北部における微地形は、第 4 区南半部で第 5 層の明確な落ち込みを検出し、その以南における第 $5\cdot6\cdot25$ 区に向かって急激に下降し、第 6 a層上面が第 8 区周辺で最も低くなる状況を確認した。また第 4 区の東側に位置する第 7 区では比較的安定したベース面を検出し、微高地部の範囲に含まれるものと判断できる。この微高地部の形成は、和泉山脈の南麓雄ノ山峠の谷筋から広がる扇状地形の末端部が第 $4\cdot7$ 区にまで至っており、この扇状地の形成による微高地部と考えられ、第 90 図に示した微地形の変換ラインが推定できる。この北部における時期判定が可能な遺構は、微高地部にあたる第 3 区で検出した古墳時代前期の溝(SD-7)や土坑(SK-23)があり、北側に展開する古墳時代前期集落の南限を示す遺構群と考えられる。また微低地部にあたる第 $4\sim6\cdot25$ 区で検出した溝(SD-63)や大規模土坑(SK $-19\sim21\cdot26$)などは時期的にみて奈良時代頃と判断でき、溝は微低地部に掘削された水路と考えられる。

次に対象地南部の様相は、本調査区では第1・2・ $11\sim24$ 区、確認調査区では第6~9区が該当する。この南部における微地形は、第1区の調査成果からみて紀ノ川の沖積作用によって形成された第6層の堆積時期が縄文時代後期以降であることが判明し、その沖積作用によって形成された微高地の範囲が東部では第17区南半部を境として第1・ $22\sim24$ 区の範囲に展開し、西部では第1 $3\cdot14\cdot16$ 区の範囲におさまることを確認した。このことから、微高地部の範囲は、東西方向の帯状にのびるいわゆる自然堤防状になるものとみられ、その推定ラインを第90図に示した。この南部における遺構は、最も時期の遡るものとして弥生時代中期の遺構群を東部の第1・ $17\cdot18\cdot24$ 区の範囲において検出した。このことは、微高地の成立が比較的早く進んだ地点と考えられ、その時期が弥生時代中期前葉に位置づけられる。遺構は、中期前葉に比定できる溝状遺構 3条(SD-1・2・23)、土坑 2 基(SK-9・286)、中期中葉から後葉にかけての竪穴住居 23 棟(SB-1~23) の他、中期の範疇におさまるとみられる溝状遺構 24 条(SD-260) がある。SD-27 に 28 は 類似することから方形周溝墓と考えられ、屈折する溝状遺構であるSD-28 に 性が高い。またSK-9も土坑墓とみられることから中期前葉段階では墓域であったものと考えられ

る。その後、中期中葉以降には竪穴住居が検出されることからみて生活域の範囲と移行していったものとみられる。次に盛期がみられる時期としては、飛鳥時代から奈良時代にかけてである。微高地南端部の境界部に掘削された溝(SD-37・57)や南側の微低地部に掘削された溝群(SD-13・15・33など)は比較的多くの遺物を含む飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構である。また西部の微高地部である第14・16区にかけて検出した溝やピット群も同時期と考えられることから、この微高地部には掘立柱建物で構成される居住域が展開していたものと考えられる。また掘立柱建物を構成するとみられるピット群を最南端である第19・20区において多数検出している。このピット群の時期は不明瞭であるものの、上位堆積層などから中世段階の遺物が比較的多く出土していることから第20



第90図 主要遺構全体平面図(数字番号は調査地区番号を、○囲み数字は確認調査地区番号を示す。)

区以南には鎌倉時代を中心とする居住域の展開が考えられる。

以上のように、今回の対象地内において扇状地末端部における北側微高地と沖積作用によって形成された東西方向にのびる自然堤防状の南側微高地があり、その間にはラグーン状の微低地が形成されていることがわかる。この自然地形を利用して弥生時代から奈良時代にかけて微高地部を中心として居住域が展開しているものとみられる。そして、数多く検出した溝群は北側微低地部では南北方向に掘削されているものが多く、微高地から微低地への排水目的の水路と考えられる。また南側微低地部では微高地の方向性に平行する東西方向に掘削されているものが大半で、耕作等の用水路に使用されていたものと考えられよう。

2. 本遺跡内における微地形と時期別遺構分布

今回の調査対象地における遺構の様相は先述の通りである。最後に、既往の調査成果に本調査成果を付け加え、比較的明確となってきた弥生時代後期以降の微地形変換推定ラインを新たに追加して遺跡全体の時期別様相についてまとめとしたい。

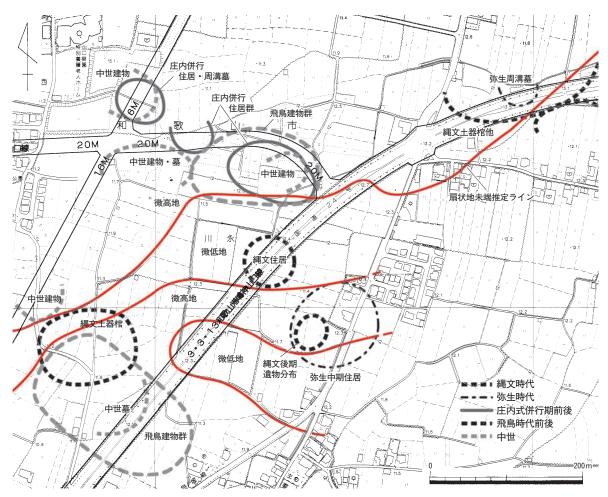
今回の調査において確認できた微地形の変換ラインと県センターバイパス調査区並びに市第2~6次調査区から得られた成果を基に弥生時代後期以降の微高地と微低地の範囲を第91図示した。この状況からみて、扇状地末端部に形成されたラグーン状の微低地は東西方向に向け帯状に展開するものと考えられる。また沖積作用によって形成された微高地は弥生時代後期頃に成立するものとみられ、なかでも早い段階で微高地が進み安定した地点と考えられる本調査第1区周辺部では弥生時代中期前葉段階で集落形成が行われたものと考えられる。

次に、検出した遺構及び出土した遺物分布をもとに集落分布を推定する。沖積作用における微高 地形成段階の縄文時代では、晩期段階の集落単位を遺跡東部・中央部・西部の3地点で確認してい た。また今回の第1区周辺部においては後期段階の遺物分布が確認されていた。今回比較的広範囲 に調査を行った第1区では、明確な遺構は確認できなかったものの、後期段階の土器・石器がまと まって出土し、新たに縄文時代後期の遺物分布範囲を推定することができた。

弥生時代では中期段階の竪穴住居や方形周溝墓などが本調査第1区周辺部である中央部とバイパス調査区である東部にかけて部分的に確認されていた。今回の調査では遺跡中央部において新たに中期前葉段階の方形周溝墓と考えられる溝状遺構などを検出し、集落の形成時期が遡ることを確認した。また、当初推定していた範囲が北東部に広がることも推定でき、微高地がさらに東部に延長すれば集落域の拡大も充分に想定できる。

古墳時代初頭から前期段階の竪穴住居などを含む遺構分布は、遺跡北部の扇状地上の微高地部に限られ、第3区で検出した溝や土坑はこの南限を示す遺構として位置づけられる。しかし、第17区で検出した再掘削を伴う大溝(SD-24・28)は、この時期の遺物を含むものであり、この時期のものとすれば南側微高地部にも集落が展開する可能性が考えられる。

次に、飛鳥時代を中心とし、その前後の時代を含めた時期では、「川辺屯倉」との関係を考えなければならないところである。遺跡中央部の扇状地上では総柱の建物群が検出されていて、ひとつの 集落単位が確認されている。また遺跡南西部の微高地上においても多数の総柱掘立柱建物などが確認されている。今回の調査で確認された同時期の遺構群は遺跡南西部の集落域に近接していること



第91図 川辺遺跡における時期別遺構分布図

から関連性のある遺構群と捉えられる。このことは、遺跡内の微高地を中心とした集落形成が行われ、双方とも屯倉に繋がる遺構群とも考えられよう。

最後に、鎌倉時代を中心とした中世段階の様相は、遺跡北部の扇状地上や南部の微高地部に形成されている。今回の調査では対象地全体的に遺物分布が認められたものの、集中して遺構が確認された地点は対象地南部に限られる。このことから、中世集落のひとつの集落単位が対象地南部に分布するものと考えられる。

以上のように、今回推定した微高地と微低地の範囲において、微高地部には居住域を示す建物群が検出され、また微低地部には生産域を示す水路群が検出されている。このことは、古環境に適応した遺構分布の特徴と位置づけられ、今後の調査における重要な成果であったものといえる。また、本対象地南東部において検出した弥生時代中期段階の集落が自然堤防状にのびる微高地上に広がる可能性が高く、これまで調査例のない南東部に新たな集落の展開が想定されよう。

【参考文献】

- 『川辺遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター 1995年
- 「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成13年度-』和歌山市教育委員会 2003年
- 「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報8 -平成12年度(2000年度)・13年度(2001年度)-』 和歌山市教育委員会・財団法人文化体育振興事業団 2004年
- 『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書 県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査-』 財団法人和歌山県文化財センター 2005年
- 「川辺遺跡第2・3次確認調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成18年度-』和歌山市教育委員会 2003年
- 『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』財団法人和歌山市都市整備公社 2008年
- 『歴史の道調査報告書(II) -南海道・大和街道他-』和歌山県教育委員会 1980年

出土遺物観察表

凡例

- 1 遺物番号は、遺物実測図番号を示す
- 2 計測値欄の()は復元径・残存高・残存重量を示す
- 3 残存率1/10未満は「小片」、1/20以下は「細片」とそれぞれ表記した
- 4 観察表の作成にあたっては、主に以下の参考文献を参照した
- 5 縄文土器及び古代の土器に関しては、以下の参考文献の分類に基づいた型式を本文に記した
 - ・縄文土器 千葉豊編 2010 『西日本の縄文土器 後期』 真陽社
 - ・ 弥生土器
 - 寺沢薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年 -近畿編 I -』 木耳社
 - ・古墳時代の土器 財団法人大阪府文化財センター 2003 『古墳出現期の土師器と実年代』 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
 - ・古代の土器 古代の土器研究会編 1992~1994 『都城の土器集成』 I ~III 真陽社
 - ・中世の土器 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
 - ・江戸時代の陶磁器 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会

目 次

| 表 1 | (土器類・丸)73 |
|-----|------------|
| 表 2 | (土製品)79 |
| 表 3 | (石器・石製品)79 |
| 表 4 | (自然遺物)79 |

表 | 出土遺物観察表(|)

| 遺物 番号 | 挿図 番号 | 出土地区・ 遺構・層位 | 器 種 | 計測化 | 値(cm) | 形態の特徴 | | 祭衣(I) | 胎土・焼成 | 色 調 | 残存率 | 備 | 考 |
|----------|---------------|---------------------|-------------------|----------------|----------------------------|---|------------------|---------------------------|------------------------------------|-------------------------------------|---------------------|-----------------|---|
| 1 | 第9図 図版55上 | 第1区 SD-1 第2層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (2.9) | 口縁部外面に貼付突帯を廻らし刻み目を施している。 | 口緑 | ヨコナデ | 胎土: やや粗 結晶片岩・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 暗褐色 外: 乳褐色 | 口縁細片 | | |
| 2 | 第9図 図版55上 | 第1区 SD-1 第1層 | 弥生土器 広口壺 | 口径器高 | (18.6) (7.8) | 口縁部は外反して立ち上がり、やや上下 に肥厚させて仕上げている。全体的に摩 滅が著しい。 | 口緑 | ヨコナデ? | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:軟 | 内: 乳褐~ 淡灰褐色 外: 乳褐色 | 口線 1/6 | | |
| 3 | 第9図 図版55下 | 第1区 SD-1 第3層 | 弥生土器 広口壺 | 口径器高 | (22.0) (16.3) | 口縁部は肥厚する。 頸部外面に 5条のク は直線文を廻らす。 内外面とも剝離気 味。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土: やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成: やや軟 | 内: 赤褐色 外: 淡赤褐色 | 口線 1/2 | | |
| 4 | 第9図 図版55上 | 第1区 SD-1 第2層 | 弥生土器 広口壺 | 口径器高 | (26.4) (4.1) | 比較的器壁が薄い個体。口縁部下外面に クシ描直線文が僅かに観察できる。剝離 が著しい。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:軟 | 内: 黒褐~ 淡褐色 外: 淡褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 5 | 第9図 図版55下 | 第1区 SD-1 第3層 | 弥生土器 壺 | 体径 底径 器高 | (42.4) (10.4) (45.8) | 体部中位に最大径をもつ。肩部に多条の クシ描直線文と波状文によって加飾す る。体部外面に黒色の黒斑がみられる。 内面の剝離が著しい。 | 体部内 体部外 底部 | ナデ ヘラミガキ・ナデ ナデ | 胎土:密 石英・白色粒 焼成:良好 | 内: 赤褐色 外: 赤褐~ 黄褐色 | 体部上位 残存 底部1/2 | | |
| 6 | 第10図 図版55上 | 第1区 SD-1 第1層 | 弥生土器 甕 | 口径器高 | (14.8) (5.7) | 口縁部は外反しながらシャープに立ち上 がる。全体的に剝離が著しい。 | 口縁 | 不明 | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:軟 | 内: 淡褐色 外: 淡赤褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 7 | 第10図 図版55上 | 第1区 SD-1 第1層 | 弥生土器 甕 | 口径 器高 | | 口縁部は大きく外反しながらのび、端部 にいたりやや肥厚する。 | 口縁 体部内 体部外 | ヨコナデ ナデ ? ケズリ ? | 胎土: やや粗 結晶片岩・ 石英 焼成: 軟 | 内: 淡褐~ 淡灰褐色 外: 淡褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 8 | 第10図 図版55上 | 第1区 SD-1 第2層 | 弥生土器 甕 | 口径 器高 | (21.3) (4.5) | 口縁端部は大きく外側に屈曲する。体部 は比較的外側に張り出す。内面の剝離が 目立つ。 | 口緑 | ヨコナデ・ナデ | 胎土:粗 結晶片岩・石英 焼成:やや軟 | 内外:淡赤褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 9 | 第10図 図版55上 | 第1区 SD-1 第1層 | 弥生土器 甕 底部 | 底径 器高 | 6.4 (4.4) | 底部はやや上げ底状。 | 底部 | ヨコナデ・ナデ | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内: 黒褐色 外: 淡褐~ 淡赤褐色 外底:淡灰褐色 | 底部のみ 残存 | | |
| 12 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-2 第1層 | 弥生土器 直口壺 | 口径 器高 | (12.8) (8.3) | 口縁部外面上部から3条のクシ描直線文 が観察できるものの、外面の剝離が目立 つ。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:やや粗 結晶片岩・ 石英 焼成:やや軟 | 内外:赤褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 13 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-2 第2層 | 弥生土器 壺 | 器高 | (7.8) | 体部外面にクシ描直線文とクシ描波状文 によって加飾する。胎土は紀伊型甕に酷 似。 | 体部内 体部外 | ナデ | 胎土:やや粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:淡褐色 | 体部小片 | | |
| 14 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-2 第2層 | 弥生土器 甕 | 口径器高 | (23.8) (4.2) | 口縁部は大きく屈折し、外上方にのびる。 遠賀川系の器形か。 | 口緑 体部内 体部外 | ヨコナデ ナデ ヘラケズリ? | 胎土:やや粗 結晶片岩・ 石英 焼成:やや軟 | 内: 暗褐~ 褐色 外: 褐色 | 口線 1/8 | | |
| 15 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-2 第2層 | 弥生土器 甕 | 口径器高 | | 口縁部は大きく外反し、端部は上下に肥 厚する。 | 口緑 | ヨコナデ | 胎土:やや粗 結晶片岩・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 褐色 外: 暗褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 16 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-2 第2層 | 弥生土器 甕 底部 | 底径 器高 | 6.8 (6.5) | 底部は上げ底状。 | 体部内 体部外 底部 | ナデ ヘラケズリ後ナデ ヨコナデ・ナデ | 焼成:やや軟 | 内: 淡褐色 外: 淡赤褐色 | 底部のみ 残存 | | |
| 20 | 第12図 図版56下 | 第1区 SK-9 第2層 | 弥生土器 広口壺 | 口径器高 | | 口縁部は大きく外反し、端部は下方に肥 厚する。 | 口縁 | ヨコナデ・ナデ | 胎土:やや粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:淡褐色 | 口緑 1/2 | | |
| 21 | 第12図 図版56下 | 第1区 SK-9 第1層 | 弥生土器 壺 底部 | 底径 器高 | (9.7) | 底部は肉厚で緩やかに立ち上がる。内面 の剝離が著しい。 | 体部内 体部外 底部 | ナデ | 胎土:粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内: 淡灰褐色 外: 淡褐色 | 底部のみ 残存 | | |
| 23 | 第14図 図版56下 | 第1区 SB-2 P-31 | 弥生土器 甕 | 口径器高 | (18.0) (7.2) | 球形の体部からのびる口縁部は大きく屈 折し、外側にのびる。端部はやや上方に 肥厚する。全体的に摩滅気味。 | | ヨコナデ ナデ ナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内: 暗赤褐色 外: 淡赤褐~ 暗褐色 | 口縁 1/4 | | |
| 24 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 口径器高 | (27.0) (5.4) | 口縁部外面に8の字状の突起を貼付け、 そこから貼付突帯を廻らして刻み目を施 している。またその下部には1条の沈線 が廻る。全体的に剝離気味。 | | ナデ? 不明 | 胎土:やや粗 雲母・石英 焼成:軟 | 内外:褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 25 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (2.4) | 口縁部外面に8の字状の突起を貼付け、 そこから貼付突帯を廻らして刻み目を施 している。 | 口緑内口緑外 | ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:やや粗 雲母 焼成:軟 | 内: 淡褐色 外: 暗褐色 | 口緑細片 | | |
| 26 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (4.5) | 口縁部には大きく肥厚する突起が付く。 また口縁部外面に8の字状の突起を貼付 け、そこから貼付突帯を廻らして刻み目 を施している。口縁部内面は沈線によっ て加飾されている。 | 口緑内口緑外 | 不明 ヨコナデ | 胎土:やや粗 雲母・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外:褐色 | 口縁小片 | | |
| 27 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (6.0) | 口縁部外面に1条の貼付突帯が廻る。またその下部に2条の沈線を描き、沈線間にLRの縄文を施している。 | | ナデ? | 胎土: やや粗 雲母・ 石英・赤色軟質粒 焼成: 軟 | 内外:褐色 | 口縁小片 | | |
| 28 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (5.7) | 体部に 2 条の沈線を描き、沈線間に L R の縄文を施している。やや摩滅気味。 | | ナデ 縄文・ナデ | 胎土: やや粗 雲母 焼成: やや軟 | 内: 褐色 外: 暗褐色 | 体部 小片 | | |
| 29 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (9.9) | 口縁部外面に1条の貼付突帯を廻らし、 刻み目を施している。その下部は多条の 沈線によって加飾し、沈線間に縄文が施 されている。 | | ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ナデ | 胎土:粗 石英 焼成:やや軟 | 内外:褐~ 暗褐色 | 口縁小片 | No.30と同 個体か? | |
| 30 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (6.1) | 体部外面に多条の沈線を描き、沈線間に 縄文が施されている。 | 口緑内口緑外 | ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ナデ | 胎土:粗 石英 焼成:やや軟 | 内外:褐~ 暗褐色 | 体部 小片 | No.29と同 個体か? | |
| 31 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (1.6) | 口縁部を肥厚させて外面にLRの縄文を 施している。 | 口緑内口緑外 | 縄文・ヨコナデ ヨコナデ | 胎土: やや粗 雲母・石英 焼成:良好 | 内外:暗赤褐色 | 口緑細片 | | |
| 32 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (8.5) | 頸部外面に沈線を施し、沈線間にLRの 縄文を施している。内面の摩滅が著しい。 | 口縁 | ナデ | 胎士:粗 石英 焼成:軟 | 内: 暗褐色 外: 淡褐~ 暗褐色 | 口緑小片 | | |
| 33 | 第17図 図版57上 | 第1区 第6層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (2.5) | 頸部外面に沈線による文様を施してい る。 | 体部内 体部外 | 不明不明 | 胎土:粗 雲母・石英 焼成:軟 | 内: 褐色 外: 淡灰褐色 | 体部細片 | | |
| 34 | 第17図 図版57下 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (8.6) | 体部上位にLRの縄文を施している。 | 体部内 体部外 | ナデ 縄文・ナデ | 胎士: やや粗 石英 焼成:良好 | 内: 黒褐色 外: 赤褐色 | 体部 小片 | | |
| 35 | 第17図 図版57下 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (6.7) | 外面にLRの縄文を施している。 | 体部内 体部外 | ヨコナデ 縄文 | 胎土: やや粗 石英 焼成:良好 | 内: 暗褐色 外: 暗褐~ 黒褐色 | 体部 小片 | | |
| 36 | 第17図 図版57下 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (6.6) | 外面にLRの縄文を施している。 | 体部外 | | 胎土: やや粗 雲母・ 石英・赤色軟質粒 焼成: やや軟 | 内: 淡褐色 外: 暗褐色 | 体部 小片 | | |
| 37 | 第17図 図版57下 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 鉢 | 口径器高 | (18.8) (3.7) | 頸部に沈線による文様を施している。 | 口縁 体部内 体部外 | ョコナデ ? 不明 不明 | 胎土:密 雲母・ 赤色軟質粒 焼成:軟 | 内: 淡褐色 外: 淡褐~ 黒褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 38 | 第17図 図版57下 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 口径器高 | (18.8) (3.7) | やや肥厚して大きく外反する口縁端部に は丁寧なヘラミガキが施されている。 | 口縁 | ヘラミガキ・ ヨコナデ | 胎土:やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 暗赤褐色 外: 暗褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 39 | 第17図 図版57下 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 突起部 | 器高 | (2.2) | 深鉢の突起部外面に沈線による渦巻き状 の文様が施されている。全体的に摩滅気 味。 | 口縁 | ナデ | 胎土:粗 石英 焼成:軟 | 内: 淡褐色 外: 赤褐色 | 突起部の み残存 | | |

表 | 出土遺物観察表(2)

| | | | | | | | . コタノ 単ル: | | | | | | | |
|----------|---------------|-------------------------|-------------------|---------------|-----------------------|--|--------------------------|-------------------------------------|----------------------------------|------|--------------------------|-------------|----------------------------|------|
| 遺物 番号 | 挿図 番号 | 出土位置 | 器種 | 法 | 量(cm) | 形態の特徴 | | 技法の特徴 | 胎土・焼成 | Œ | 色 調 | 残存率 | 備 | 考 |
| 40 | 第17図 図版57下 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (7.3) | 残存部内外面とも無文のものである。胎 土に多量の角閃石が含まれている。 | 口縁 | 不明 | 胎土:粗 黒色粒・白色粒 焼成:軟 | 内外: | 褐色 | 口縁小片 | | |
| 41 | 第17図 図版57下 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (4.1) | 残存部内外面とも無文のものである。口 緑端部は外側にやや肥厚する。 | 口緑内口緑外 | ヨコナデ 不明 | 胎土:粗 石英 焼成:軟 | 内:外: | 褐色 暗褐色 | 口縁小片 | | |
| 42 | 第17図 図版58上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (5.2) | 残存部内外面とも無文のものである。全 体的に摩滅気味。 | 口緑内口緑外 | ナデ ナデ? | 胎土:粗 雲母 焼成:軟 | 内:外: | 黒褐色 褐~ 暗褐色 | 口縁小片 | | |
| 43 | 第17図 図版58上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器鉢 | 器高 | (7.3) | 口縁部外面にヘラミガキに先行する条痕 が観察できる。 | 口緑内 口緑外 体部内 体部外 | ナデ 条痕後ヘラミガキ ナデ 条痕後ナデ | 胎土:やや粗 雲母・ 石英・長石 焼成:良好 | 内外: | 暗赤褐色 | 口縁小片 | | |
| 44 | 第17図 図版58上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 浅鉢 | 体部往 器高 | ₹ (31.2) (5.7) | 肩部に 1 条の沈線が廻る。全体的に剝離 気味。 | 体部内体部外 | 不明 ナデ? | 胎土:やや粗 石英 焼成:やや軟 | 内: | 暗褐~ 赤褐色 淡褐~ 暗褐色 | 体部 1/8 | | |
| 45 | 第17図 図版58上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 深鉢 底部 | 底径器高 | (9.8) (6.7) | 底部からの立ち上がりは直立気味。全体 的に摩滅が著しい。 | 体部内 体部外 | ナデ? 不明 | 胎土: やや粗 雲母・ 石英・赤色軟質粒 焼成: 軟 | 内: | 褐色 赤褐色 | 底部 1/4 | | |
| 46 | 第17図 図版58上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 浅鉢 底部 | 底径 器高 | 5.7 (2.3) | 外底面に「二」の字の圧痕が観察できる。 外底面の約2/3に黒褐色の黒斑がある。 | 底部内 底部外 | ナデ | 胎土: やや粗 雲母・ 赤色軟質粒 焼成: やや軟 | 内: | 淡褐色 褐色 | 底部のみ 残存 | | |
| 47 | 第17図 図版58上 | 第1区 第6b層 | 縄文土器 浅鉢 底部 | 底径 器高 | 7.2 (1.7) | やや上げ底状。全体的に摩滅気味。 | 底部内 底部外 | ナデ 指頭圧痕 | 胎土: やや粗 雲母・ 石英・赤色軟質粒 焼成: 軟 | 内: | 淡褐~ 暗褐色 淡褐色 | 底部のみ 残存 | | |
| 55 | 第22図 図版59上 | 第3区 第4層 | 土師器 高杯 脚部 | 器高 | (3.3) | 脚柱部は短く大きく屈折して端部にのび る。杯部との接合面に花びら状の刻み目 が施されている。 | 脚内 脚外 | ナデ ヘラミガキ・ ヨコナデ | 胎土:密 焼成:良好 | 内外: | 淡赤褐色 | 脚部 1/3 | | |
| 56 | 第22図 図版59上 | 第4区 第3a層 | 備前焼 擂鉢 底部 | 器高 | (4.5) | 内面のクシ目は1cmあたり3条程度。 | 体部内 体部外 底部外 | ヨコナデ ヨコナデ 未調整 | 胎土:やや粗 石英 焼成:良好 | | 暗褐色 暗赤褐色 | 底部 細片 | | |
| 59 | 第25図 図版59上 | 第3区 SD-7 第1層 | 土師器変 | 口径器高 | (15.2) (4.7) | 口縁端部を内側に肥厚させて丸く収めて いる。全体的に摩滅が著しい。 | 口緑体部 | 不明不明 | 胎土:やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外: | 明褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 60 | 第25図 図版59上 | 第 3 区 SD- 7 第 3 層 | 土師器 有孔鉢 | 底径 器高 | | 外面上位は摩滅が著しい。底部中央に穿 たれた孔径は、1.6cmである。 | | ナデ タタキ ナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外: | 明褐色 | 底部 1/2 | | |
| 61 | 第25図 図版59上 | 第3区 SD-7 第3層 | 土師器 甕? | 底径 器高 | (3.4) (7.3) | 外底面は平底状で中央部に凹みがある。 | 体部内 体部外 底部内 底部外 | ナデ? タタキ後ナデ クモの巣状ハケ目 ナデ? | | 内外: | 乳褐色 | 体部下半 1/2 | | |
| 62 | 第25図 図版59下 | 第 3 区 SD- 3 第 2 層 | 土師器皿 | 口径器高 | (8.4) 1.4 | 内面にタール状の付着物がある。灯明皿 として使用か? | 口縁 体部内 底部外 | ナデ・指頭圧痕 | 胎土: やや粗 結晶片岩・ 石英 焼成: 良好 | 内:外: | 暗褐色 暗褐~ 褐色 | 1/2 | | |
| 63 | 第25図 図版59下 | 第 3 区 SD- 3 第 1 層 | 瓦質土器 擂鉢 | 器高 | (5.2) | 内面にクシ目がわずかに観察できる。全 体的に摩滅気味。 | 口緑内口緑外 体部内体部外 | ョコナデ ョコナデ・ ヘラケズリ 不明 ナデ? | 胎土:密 石英・白色粒 焼成:やや軟 | | 乳褐色 灰褐色 | 口緑小片 | | |
| 64 | 第29図 図版59下 | 第 5 区 SK-21 第 1 層 | 須恵器 甕 | 口径器高 | (10.4) (5.2) | 口緑端部を上下に肥厚させて丸く収めている。 | 口縁 体部内 体部外 | ョコナデ 当て具痕 タタキ後ナデ | 胎土:密 白色粒 焼成:良好 | 内外: | 灰色 | 口縁 1/3 | 同一個作 片が第 から出: いる。 | 5 c層 |
| 65 | 第29図 図版59下 | 第5区 第5b層 | 須恵器 杯身 | 口径器高 | (10.3) (1.7) | 口縁部は内傾気味に短くのびる。 | 口緑体部 | ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:密 白色粒 焼成:良好 | 内外: | 淡灰色 | 口縁 1/6 | | |
| 66 | 第29図 図版59下 | 第5区 層位不明 | 瀬戸 灰釉皿 | 口径器高 | (11.4) (2.2) | 残存部全面に粗い貫入が入る。 | 口緑 | ヨコナデ | 胎土:密 焼成:良好 | 内外: | 淡緑灰色 | 口縁 1/8 | | |
| 67 | 第29図 図版59下 | 第6区 第5c層 | 須恵器 杯身 | 口径器高 | (13.4) (1.9) | 口縁部は内傾気味に短くのびる。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:やや軟 | 内外: | 暗灰色 | 口縁 1/4 | | |
| 68 | 第29図 図版60上 | 第6区 第5c層 | 土師器皿 | 口径器高 | (10.0) 1.9 | 全体的に肉厚な器形。 | 口緑 体部内 底部外 | ヨコナデ ナデ ナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内:外: | 暗赤褐色 褐色 | 口縁 1/3 | | |
| 69 | 第29図 図版60上 | 第6区 第4層 | 瓦器 | 底径 器高 | | 貼付による高台は逆台形状。内底面には 格子状の暗文が施されている。 | | ナデ?後暗文 指頭圧痕 ヨコナデ | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 内外: | 黒灰色 | 底部 1/6 | | |
| 70 | 第29図 図版59下 | 第6区 第3層 | 東播系 須恵器 こね鉢 | 器高 | (2.5) | 口縁端部を上下に肥厚させて丸く収めて いる。外端面に自然釉が付着している。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 長石 焼成:良好 | 内外: | 淡灰色 | 口縁細片 | | |
| 71 | 第31図 図版60上 | 第7区 層位不明 | 弥生土器 壺 底部 | 口径器高 | 7.3 (2.2) | やや上げ底状。 | 体部内 体部外 底部外 | 不明 ナデ | 胎土:粗 結晶片岩・石英 焼成:やや軟 | 内:外: | | 底部のみ 残存 | | |
| 72 | 第37図 図版60上 | 第9区 第4c層 | 瓦器 椀 | 底径器高 | | 貼付による高台は逆三角形状。内底面の 剝離が著しく暗文は不明。 | 底部外 | ナデ・指頭圧痕 ヨコナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:軟 | 内:外: | 乳褐色 灰褐色 | 底部 1/4 | | |
| 73 | 第37図 図版60上 | 第11区 第5a層 | 須恵器 杯身 | 底径 器高 | (9.9) (1.9) | 貼付による高台は外側に踏んばる形状。 | 体部内 体部外 底部外 | ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 内外: | 淡灰色 | 底部 1/3 | | |
| 74 | 第40図 図版60上 | 第12区 SK-53 | 土師器 広口壺 | 口径器高 | | 大きく垂下させた口縁部外端面には4条の擬凹線が廻る。摩滅気味。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外: | 淡赤褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 75 | 第40図 図版60上 | 第12区 第5b層 | 土師器 広口壺 | 口径器高 | (12.0) (2.7) | 口縁部は大きくラッパ状に開く。 | 口緑 | ヨコナデ? | 胎土:密 石英・ 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | | 赤褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 76 | 第40図 図版60上 | 第12区 第 5 b層 | 土師器 壺 底部 | 底径 器高 | (4.6) (2.4) | 平底。全体的に摩滅気味。 | 体部内 体部外 底部外 | 不明 不明 不明 | 胎土: やや粗 長石・ 赤色軟質粒 焼成: 軟 | | 暗褐色 暗褐~ 暗赤褐色 | 底部 1/4 | | |
| 77 | 第40図 図版60上 | 第12区 第5b層 | 土師器 高杯 脚部 | 底径 器高 | | 直径 9 cmの円孔は 2 個一対か ? 個数は不明。剝離気味。 | 脚内 脚外 | ヨコナデ? ヨコナデ? | 胎土:密 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外: | 淡赤褐色 | 脚部下半 1/4 | | |
| 78 | 第40図 図版60下 | 第13区 第5a層 | 瓦器 椀 | 口径器高 | (14.4) (2.5) | 比較的器壁が厚い個体。 | 口緑 体部内 体部外 | ヨコナデ? 不明 ナデ? | 胎土:密 石英 焼成:やや軟 | 内外: | 黒灰色 | 口縁 1/8 | | |
| 79 | 第40図 図版60下 | 第13区 第5a層 | 丸瓦 | 長さ 幅 厚さ | (6.7) (8.0) 2.0 | 須恵質に近い焼成である。 | 四面凸面 | 布目 縄タタキ後ナデ | 胎土:やや粗 石英・ 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | | 暗灰色 灰褐色 | 小片 | | |
| 80 | 第46図 図版60下 | 第14区 第6a層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (4.5) | 口縁部外面に貼付突帯を廻らし、上部に 刻み目を施している。全体的に摩滅気味。 | 口緑内口緑外 | ヨコナデ ヨコナデ・ ヘラケズリ | 胎土:密 石英・雲母 焼成:軟 | 内:外: | 暗褐色 黒褐色 | 口緑小片 | | |
| 81 | 第46図 図版60下 | 第14区 第 6 a層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (3.9) | 頸部に貼付突帯を廻らし、上部に刻み目 を施している。全体的に摩滅気味。 | 体部内 体部外 | ナデ ヨコナデ | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英 焼成:やや軟 | | 暗褐色 淡赤褐色 | 頸部 小片 | | _ |
| | | | | | | | | | | | | | | |

表 | 出土遺物観察表(3)

| nde str | 46.00 | | | | | 八 日上 恩 | 173 1-30 | 元 | | | | | |
|----------|---------------|-------------------------|------------------|----------------|-------------------|--|--------------------------------|---|------------------------------------|---------------------------|--------------|------------|---|
| 遺物 番号 | 挿図 番号 | 出土位置 | 器種 | 法 | 量(cm) | 形態の特徴 | | 技法の特徴 | 胎土・焼成 | 色 調 | 残存率 | 備 | 考 |
| 82 | 第46図 図版60下 | 第14区 第 4 層 | 須恵器壺 | 口径器高 | (11.2) (4.5) | 口縁部は直立気味に短く立ち上がり、端部を丸く仕上げている。 | 口緑 体部内 体部外 | ョコナデ ナデ ナデ 不明 | 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 内外:暗灰色 | 口縁 1/6 | | |
| 83 | 第46図 図版60下 | 第14区 第 4 層 | 土師器皿 | 器高 | (2.4) | 口緑端部を外側に屈曲させて丸く仕上げ ている。全体的に剝離が著しい。 | 口緑 体部内 体部外 | 不明 不明 不明 | 胎土:密 焼成:軟 | 内外:淡赤褐色 | 口縁 小片 | | |
| 85 | 第46図 図版60下 | 第16区 第 5 b層 | 土師器 甕 | 口径器高 | (26.2) 18.6 | 図示はできていないものの体部外面中位 に黒褐色の黒斑がある。 | 口縁内 口縁外 体部内 体部外 底部 | ヨコハケ・ヨコナデ ヨコナデ 指頭圧痕・ナデ タテハケ 指頭圧痕・ハケ | 胎土:やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 赤褐色 外: 赤褐~ 暗褐色 | 1/2 | | |
| 86 | 第48図 図版61上 | 第14区 SD-37 第 2 層 | 須恵器 杯蓋 | 口径 器高 | $(14.2) \\ (1.0)$ | 極めて扁平な器形で、口縁端部は大きく 下方に屈折して接地する。 | 口緑 | ヨコナデ | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 内外:淡灰色 | 口縁 1/8 | | |
| 87 | 第48図 図版61上 | 第14区 SD-37 第 1 層 | 須恵器 杯身 | 底径 器高 | (10.8) (2.0) | 高台は貼付はやや外側に踏んばる形状で 水平に接地する。 | 体部内 体部外 底部 | ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ・ナデ | 胎土:密 石英・白色粒 焼成:良好 | 内: 淡灰色 外: 灰~ 淡灰色 | 底部 1/4 | | |
| 88 | 第48図 図版61上 | 第14区 SD-37 第 1 層 | 須恵器 杯身 | 底径 器高 | (12.0) (2.8) | 高台内部底面に板状の圧痕が残る。高台 は貼付による。 | 体部内 体部外 底部 | ヨコナデ・ナデ ヨコナデ ヨコナデ・ナデ | 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 内外:淡灰色 | 底部 1/2 | | |
| 89 | 第48図 図版61上 | 第14区 SD-37 第 2 層 | 土師器 杯 | 口径 器高 底径 | 4.0 | 口縁部は強いヨコナデによって稜をな す。貼付による高台は外側に踏んばる形 状。 | 口縁 底部内 底部外 | ヨコナデ ナデ ヨコナデ・ナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 淡赤褐色 外: 淡褐~ 淡赤褐色 | 1/4 | | |
| 90 | 第48図 図版61上 | 第14区 SD-37 第 2 層 | 土師器 杯 | 器高 | (3.0) | 貼付による高台は、逆三角形状で比較的 低い。 | 体部内 体部外 | ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:淡赤褐色 | 体部下半 小片 | | |
| 91 | 第48図 図版61上 | 第14区 SD-37 第 2 層 | 土師器皿 | 口径器高 | (12.2) (2.9) | 全体的に摩滅が著しい。 | 口縁 | ヨコナデ? | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:軟 | 内: 淡黄褐色 外: 淡赤褐色 | | | |
| 92 | 第48図 図版61上 | 第14区 SD-37 第 2 層 | 土師器皿 | 口径器高 | (13.0) (3.1) | 口縁部はやや強いヨコナデによって稜を なす。 | 口緑 | ヨコナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 乳褐~ 淡赤褐色 外: 淡赤褐色 | 口縁 1/4 | | |
| 93 | 第48図 図版61上 | 第14区 SD-37 第 2 層 | 土師器皿 | 口径器高 | (15.5) 2.3 | 口縁部は大きく外反し短く仕上げてい る。 | 口緑底部外 | ヨコナデ ナデ | 胎土:密 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 淡赤褐色 外: 淡赤褐~ 黄褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 94 | 第48図 図版61下 | 第14区 SD-37 第 1 b層 | 土師器 甕 | 口径器高 | (22.0) (4.5) | 大きく屈折してのびる口縁部は端部を上 方に肥厚させている。内面の摩滅が著し い。 | 口緑内口緑外体部外体部外 | ョコハケ ? ョコナデ 不明 タテハケ | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外:明褐色 | 口縁 1/2 | | |
| 95 | 第48図 図版61下 | 第14区 SD-37 第 1 層 | 土師器 | 器高 | (3.5) | 大きく屈折してのびる口縁部は端部を上 方に肥厚させている。 | 口緑内口緑外体部内体部外 | 不明 ョコナデ 不明 タテハケ ? | 胎土:密 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外:淡褐色 | 口縁小片 | | |
| 96 | 第48図 図版61下 | 第14区 SD-37 第 2 層 | 土師器 鉢 | 口径器高 | (24.0) (5.7) | 口縁部は内側に屈曲させてシャープに仕 上げている。外面体部下半はヘラケズリ とみられる。 | 口緑内口緑外体部内体部外 | ヨコナデ ヘラミガキ ヘラミガキ ヨコナデ・ ヘラケズリ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 黒褐色 外: 黒褐~ 淡褐色 | 口級 1/4 | | |
| 97 | 第48図 図版61下 | 第14区 SD-37 第1b層 | 土師器 製塩土器 | 口径器高 | (8.5) (3.2) | 全体的に摩滅が著しい。 | 口緑体部 | 不明不明 | 胎土:密 焼成:軟 | 内外:淡黄褐~ 淡赤褐色 | 口縁 1/4 | | |
| 98 | 第48図 図版62上 | 第16区 SD-43 第 1 層 | 土師器変 | 口径器高 | (16.0) (2.6) | 外反してのびる口縁外端面には刻み目が 施されている。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土: やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成: やや軟 | 内: 淡褐色 外: 褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 99 | 第48図 図版62上 | 第16区 P-167 | 土師器 甕 底部 | 底径 器高 | (3.8) (2.5) | 底面は平底状。内底面にはクモの巣状ハ ケ目が観察できる。 | 体部内 体部外 底部内 底部外 | ナデ タタキ クモの巣状ハケ目 ナデ? | 胎土:やや粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内: 褐色 外: 赤褐色 | 底部 1/4 | | |
| 100 | 第51図 図版62上 | 第15区 第 5 b層 | 須恵器 杯蓋 | 口径器高 | 11.1 3.5 | 天井部のヘラケズリは1/2程度であり、ヘ ラケズリの後ナデ調整が行われている。 | 口縁 体部内 体部外 | ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎土:密 石英・長石・ 黒色粒 焼成:良好 | 内: 淡灰色 外: 淡灰~ 灰色 | 完形 | | |
| 101 | 第51図 図版62上 | 第15区 第 4 a層 | 土師器皿 | 口径器高 | (9.4) (1.5) | 比較的器壁が厚い個体。 | 口緑体部外 | ヨコナデ 指頭圧痕 | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外:淡黄褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 102 | 第51図 図版62上 | 第15区 第 1 層 | 中国製 青磁 碗 | 口径器高 | (17.0) (4.8) | 内面にヘラ描とクシ描による文様を施し ている。釉薬は比較的薄い。 | 口緑 | 施釉 | 胎土:緻密 焼成:良好 | 内外:淡緑灰色 | 口縁 1/8 | | |
| 103 | 第51図 図版62上 | 第21区 第 5 b層 | 須恵器 杯蓋 つまみ | つまれ器高 | み径 1.4 (1.8) | つまみは宝珠状。 | 体部内 体部外 | ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:密 焼成:良好 | 内: 淡灰色 外: 灰色 | つまみ部 のみ残存 | | |
| 104 | 第51図 図版62上 | 第21区 第 5 c層 | 土師器 高杯 脚部 | 器高 | (5.7) | 脚部外面にはヘラ切りによる面取が行われている。この横断面は10角形に復元できる。 | | ヨコナデ・ナデ ヘラ切り | 胎土:密 焼成:良好 | 内外:赤褐色 | 脚部 1/2 | | |
| 105 | 第51図 図版62上 | 第21区 第 5 層 | 土師器 | 口径器高 | (28.6) (4.1) | 大きく屈折してのびる口縁部は肉厚である。 | 口緑内口緑外 | 不明 ヨコナデ | 胎士:粗 結晶片岩・石英 焼成:やや軟 | 内: 淡褐色 外: 淡褐~ 褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 106 | 第53図 図版62下 | 第15区 SD-15 第 3 層 | 須恵器 杯蓋 | 口径器高 | (12.6) (2.8) | 口緑部から天井部にかけて丸みをもつ個 体。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 内外:淡灰色 | 口縁 1/8 | | |
| 107 | 第53図 図版62下 | 第21区 SD-15 第 1 層 | 須恵器 杯身 | 口径器高 | 13.6 3.5 | 口縁部の歪みが著しい。外底面のヘラケ ズリは1/3程度で一部ナデ消している。 | 口縁 体部内 体部外 底部 | ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎土:密 白色粒 焼成:良好 | 内: 淡灰色 外: 淡灰~ 淡灰褐色 | 3/4 | | |
| 108 | 第53図 図版62下 | 第15区 SD-15 第 1 層 | 須恵器 杯身 | 口径器高 | (9.9) (2.2) | 内傾してのびる口縁部は短く仕上げてい る。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 白色粒 焼成:良好 | 内外:淡灰色 | 口線 1/8 | | |
| 109 | 第53図 図版62下 | 第21区 SD-13 第1・2層 | 須恵器 杯蓋 | 口径器高 | 10.6 3.5 | 天井部のヘラケズリは1/2程度であり、ヘ ラケズリの後ナデ調整が行われている。 | 口緑 体部内 体部外 | ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎士:密 石英 焼成:良好 | 内外:灰色 | 1/2 | 第1· 接合資 | |
| 110 | 第53図 図版63上 | 第21区 SD-13 第 1 層 | 須恵器 杯蓋 | 口径器高 | (11.6) (2.9) | 口縁部は外側に屈曲しながら開く。天井 部はヘラケズリ後ナデ調整が行われてい る。内面に自然釉が付着。 | | ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎士:密 白色粒・褐色粒 焼成:良好 | 内: 白濁色 外: 暗灰~ 灰色 | 口緑 1/4 | | |
| 111 | 第53図 図版62下 | 第21区 SD-13 第 1 層 | 須恵器 杯蓋 | 口径器高 | (12.0) 3.2 | 天井部はほぼ水平でヘラケズリ後ナデ調 整が行われている。 | 口緑 体部内 体部外 | ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎土:密 黒色粒 焼成:軟 | 内: 淡黄灰色 外: 淡灰~ 灰白色 | 2/3 | | |
| 112 | 第53図 図版63上 | 第21区 SD-13 第 3 層 | 須恵器 杯蓋 | 口径器高 | (13.7) (1.8) | 口縁部内側のかえり部は端部より内側に 収まる。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎士:密 白色粒 焼成:良好 | 内: 暗灰色 外: 灰色 | 口縁 1/8 | | |
| 113 | 第53図 図版63上 | 第21区 SD-13 第 2 層 | 須恵器 杯身 | 口径器高 | (12.9) (3.9) | 極めて軟質焼成である。内面は土師質に 近く、外面は瓦質に近い。 | 口縁 底部外 | ヨコナデ 不明 | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:軟 | 内: 明褐色 外: 淡灰~ 暗灰色 | 体部 1/6 | | |
| 114 | 第53図 図版63上 | 第21区 SD-13 第 2 層 | 須恵器 杯身 | 口径器高 | (11.4) (3.4) | 口縁部はやや屈曲しながら外側に開く。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 黒色粒 焼成:良好 | 内: 淡灰色 外: 灰色 | 口縁 1/8 | | |
| 115 | 第53図 図版63上 | 第21区 SD-13 第 2 層 | 須恵器 杯身 | 口径器高 | 11.6 3.2 | 底部はヘラケズリ後比較的丁寧なナデ調整が行われている。 | 口縁 体部内 底部 | ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎土:密 結晶片岩・ 石英・白色粒 焼成:良好 | 内外:灰色 | 完形 | | |
| | | | | | | | | | | _ | | | |

表 | 出土遺物観察表(4)

| 遺物 番号 | 挿図 番号 | 出土地区・ 遺構・層位 | 器 種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | | 技法 | 胎土・焼成 | 色 調 | 残存率 | 備考 |
|----------|------------------------|-------------------------------|---------------------|----------------------------------|---|-------------------------|--|----------------------------------|----------------------------------|------------------|----------------|
| 116 | 第53図 | 第21区 SD-13 | 須恵器 | 底径 (10. |) 高台は体部との境目付近に貼付されてい | 体部内体部外 | ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:密 白色粒 | 内外:灰色 | 底部 | |
| 117 | 図版63上 第53図 図版63上 | 第 1 層 第21区 SD-13 | 杯身 須恵器 杯身 | 器高 (2. 底径 (13. 器高 (2. |) 高台は体部との境目付近に貼付されてい | 底部 体部内 体部外 | ヘラケズリ後ナデ ヨコナデ ヨコナデ | 焼成:良好 胎土:密 石英・長石・ 黒色粒 | 内外:淡灰色 | 1/3 底部 1/2 | 第1・2層の 接合資料 |
| 118 | 第53図 図版63下 | 第1·2層 第21区 SD-13 第1層 | 須恵器高杯 | 底径 8.5 器高 (6.5 | 脚端部は大きくラッパ状に開き接地す | 底部 杯部内 杯部外 脚部外 | ヘラケズリ後ナデ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ | 焼成:やや軟 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 杯内:暗灰色 脚内:淡灰~ 灰色 外: 淡灰~ | 脚部 3/4 | 按百具杆 |
| 119 | 第53図 図版63下 | 第21区 SD-13 第 1 層 | 須恵器 高杯 | 底径 (9.5 器高 (7.5 | | 杯部内 杯部外 脚部内 | ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 暗灰色 杯内:灰色 脚内:淡灰色 外:淡灰色 | 脚部はほぼ残存 | |
| 120 | 第53図 図版63下 | 第21区 SD-13 第 3 層 | 須恵器 | 口径 (15.: 器高 (6.: | | 脚部外 口縁 | ヨコナデ | 胎土:やや粗 石英・ 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 内: 黄灰色 外: 淡灰色 | 口縁 1/4 | |
| 121 | 第53図 図版63下 | 第21区 SD-13 第2·3層 | 須恵器 甕 | 口径 (17.4 器高 (3.5 | | 口緑 | ヨコナデ | 胎土:密 白色粒 焼成:軟 | 内: 灰白色 外: 灰褐色 | 口縁 1/4 | 第2・3層の 接合資料 |
| 122 | 第53図 図版63下 | 第21区 SD-13 第 1 · 3 層 | 須恵器 | 口径 (19. 器高 (3. | | 口緑 | ヨコナデ | 胎土:密 焼成:軟 | 内外: 灰白色 | 口縁 1/4 | 第1・3層の 接合資料 |
| 123 | 第53図 図版64上 | 第21区 SD-13 第 1 層 | 須恵器鉢 | 口径 (20. 器高 (13. | | 体部内 体部外 底部 | ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎土:密 石英・白色粒 焼成:良好 | 内: 灰色 外: 淡灰~ 灰色 | 1/3 | |
| 124 | 第53図 図版64上 | 第21区 SD-13 第 3 層 | 須恵器 平瓶 | 肩径 (24. 器高 (4.: | | 体部内 体部外 | ヨコナデ タタキ後ナデ | 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 内: 淡灰色 外: 灰色 | 肩部 1/2 | |
| 125 | 第53図 図版64上 | 第21区 SD-13 第 3 層 | 須恵器 平瓶 | 肩径 (26.3 底径 (19.3 器高 (10.3 |) れている。肩部から上位の外面に緑灰色 | | ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ ナデ | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 内外:淡灰色 | 1/2 | |
| 126 | 第53図 図版64上 | 第21区 SD-13 第 3 層 | 須恵器 平瓶 把手 | 長さ (13.5 幅 2.5 厚さ 1.5 | 向西に拍頭圧扱が残る。上部に稼然巴の 白鉄釉が付着 ている | 把手 | 指頭圧痕 | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 淡灰色 | 把手部の み残存 | |
| 127 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 1 · 2 層 | 須恵器 甕 | 口径 23.5 器高 (23.5 | 口縁部は直立気味に立ち上がり、端部が やや内側に屈曲する。把手部は手づくね 成形。 | 口緑 体部内 体部外 | ヨコナデ あて具痕 タタキ後ナデ | 胎土:密 黒色粒・白色粒 焼成:良好 | 内: 灰白色 外: 明灰~ 灰白色 | 体部上位 1/2 | 第1・2層の 接合資料 |
| 128 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 3 層 | 土師器 甕 | 口径 (25. 器高 (4. | | 口緑体部内 | ヨコナデ ヨコハケ | 胎土:密 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:淡褐色 | 口縁 1/8 | |
| 129 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 2 層 | 土師器 甕 | 口径 (23. 器高 (4. | | 口緑 体部内 体部外 | ヨコナデ 不明 タテハケ | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内: 褐色 外: 褐~ 暗褐色 | 口縁 1/8 | |
| 136 | 第56図 図版65上 | 第17区 第5a層 | 土師器 椀 | 底径 (6. 器高 (1. | | 体部内 底部 | 不明 ヨコナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:軟 | 内外:淡赤褐色 | 底部 1/4 | |
| 137 | 第56図 図版65上 | 第17区 第5a層 | 瓦器 椀 | 底径 (6. 器高 (1. | 全体的に剝離が著しい。 | 体部内 底部 | 暗文? ヨコナデ・ナデ | 胎土:密 白色粒 焼成:やや軟 | 内: 黒褐~ 淡褐色 外: 淡褐色 | 底部 1/2 | |
| 138 | 第56図 図版65上 | 第17区 第 2 層 | 土師器皿 | 口径 (6. 底径 (5. 器高 1. |) 全体的に肉厚な器形。 | 口縁底部 | ヨコナデ 指頭圧痕・ナデ | 胎土:密 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:淡赤褐色 | 口縁 1/4 | |
| 139 | 第56図 図版65上 | 第17区 第 4 a層 | 瀬戸 灰釉皿 | 底径 (6. 器高 (1. |) 釉部には細かい貫入が入る。 | 底部 | 施釉 施釉 | 胎土:密 焼成:良好 | 内外:淡緑灰色 | 底部 1/4 | |
| 140 | 第56図 図版65上 | 第17区 第5a層 | 平瓦 | 長さ (4.1 幅 (7.1 厚さ 1.1 | 残存部分では端部が取も厚く、ヘフ切り | 凹面 凸面 底部 | 布目 縄タタキ | 胎土:やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外:淡赤褐色 | 小片 | |
| 142 | 第59図 図版65下 | 第17区 SD-23 | 弥生土器 広口壺 | 口径 (14.5 器高 (5.5 | | 口称 | 不明 | 胎土:粗 結晶片岩・石英 焼成:やや軟 | 内外:赤褐色 | 口縁 1/6 | |
| 143 | 第59図 図版65下 | 第17区 SD-23 | 弥生土器 甕 | 口径 (19. 器高 (6. | | 口緑内口緑外体部外 | 不明 ヨコナデ ヘラケズリ | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内: 乳褐色 外: 淡褐色 | 口縁 1/6 | |
| 144 | 第59図 図版65下 | 第17区 SD-23 | 弥生土器 甕 | 口径 (18. 器高 (4. | | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 褐色 外: 黒褐~ 暗褐色 | 口縁 1/6 | |
| 145 | 第59図 図版65下 | 第17区 SD-23 | 弥生土器 甕 底部 | 底径 7. 器高 (4. | | 底部 | ナデナデ | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内: 暗褐色 外: 褐色 | 底部のみ 残存 | |
| 146 | 第59図 図版65下 | 第17区 SD-24 第 4 層 | 弥生土器 壺 底部 | 底径 (4.2 器高 (2.2 |) 底面はほぼ平底。外面に黒褐色の黒斑が ある。 | 体部外底部 | 不明 不明 | 胎土:粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:軟 | 内外:淡赤褐色 | 底部 1/4 | |
| 147 | 第59図 図版65下 | 第17区 SD-24 第 4 層 | 弥生土器 鉢 底部 | 底径 (8. 器高 (3. | | 体部内 体部外 底部 | タタキ ヨコナデ・ナデ | 胎土:やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 暗灰褐色 外: 淡褐色 | 底部 1/4 | |
| 148 | 第59図 図版65下 | 第17区 SD-28 第 1 層 | 土師器 小型壺 | 口径 (12.1 器高 (8.1 | | 口緑 体部内 体部外 | ナデ | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 内: 黒褐色 外: 淡褐色 | 1/3 | |
| 149 | 第59図 図版65下 | 第17区 SD-28 第 1 層 | 土師器脚部 | 底径 8.2 器高 (5.2 |) 直径1.1cmの円扎を穿っている。 | 杯部内 脚部内 脚部外 | 不明 不明 | 胎土:密 石英・ 赤色軟質粒 焼成:軟 | 内外:暗灰褐色 | 脚部のみ 残存 | |
| 150 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 第 2 層 | 中国製 青磁 碗 | 底径 (6. 器高 (3. | | | 施釉 施釉 施釉・一部露胎 | 胎土:緻密 焼成:良好 | 内外:淡緑色 露胎部:淡褐色 | 底部のみ 残存 | |
| 151 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 第 2 層 | 中世須恵器 東播系 こね鉢 | 器高 (3.3 | 73.7、7時間に自然権が刊着している。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 石英・白色粒 焼成:良好 | 内: 灰色 外: 淡灰色 | 口縁 小片 | |
| 152 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 | 土師器皿 | 口径 (8.2 器高 1.0 | | 底部 | ヨコナデ ヨコナデ 指頭圧痕 | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:淡赤褐色 | 1/2 | |
| 153 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 第 2 層 | 土師器皿 | 口径 (8.3 器高 1.3 | | 口縁 体部内 底部 | ヨコナデ ナデ ナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:乳褐色 | 1/2 | |
| 154 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 第 2 層 | 備前焼 擂鉢 | 器高 (3. |) 内面のクシ目は1 cmあたり5条程度。外端面に自然釉が付着。 | 口緑 | ヨコナデ | 胎土: やや粗 焼成:良好 | 内外:暗灰褐色 | 口縁小片 | |
| 155 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 第 2 層 | 備前焼 徳利 | 口径 (4. 器高 (4. | | 口縁 | ヨコナデ | 胎土: やや粗 長石 焼成:良好 | 内外:暗赤褐色 | 口縁 1/2 | |

表 | 出土遺物観察表(5)

| 345.664 | 446 858 | the Labora | | | | | .700 ±JU: | | | | | | | |
|----------|---------------|------------------------|---------------------|----------------|-----------------------|--|------------------------|-------------------------------|---------------------------------|----------------------|---------------------------|--------------|------------------------|-----|
| 遺物 番号 | 挿図 番号 | 出土地区・ 遺構・層位 | 器種 | 計測値 | (cm) | 形態の特徴 | | 技 法 | 胎土・焼成 | 色 | 調 | 残存率 | 備 | 考 |
| 156 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 | 肥前系磁器 染付 碗 | 底径 器高 | (4.0) (2.8) | 体部下半に3条の圏線文が廻り、高台内部に「大明年製」?の染付が描かれている。高台畳付部の釉薬は削り取られている。 | 体部内 体部外 底部 | | 胎土:緻密 焼成:良好 | | 一灰色 | 底部 1/4 | | |
| 157 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 | 肥前系 陶器 鉢 | 底径 器高 | (9.4) (3.3) | 内面は白化粧土をハケ塗り、外面は白化 粧土をハケ塗りした後、鉄釉の泥奬を塗 り釉垂れを起こしている。また2次焼成 を受けているとみられる。 | 体部内 体部外 底部 | 施釉 施釉 露胎・ヘラケズリ | 胎土: やや粗 長石・ 赤色粒 焼成:良好 | 外: 8 | 炎灰褐色 炎灰褐~ 昌色 淡褐色 | 底部 1/4 | | |
| 158 | 第61図 図版66上 | 第17区 SD-10 第 2 層 | 瀬戸 陶器 碗 | 底径 器高 | $(4.2) \\ (2.6)$ | 高台畳付部の釉薬は削り取られて、一部 に砂が付着している。内外面に細かな貫 入が入る。 | | 施釉 施釉 施釉 | 胎土: 緻密 焼成:良好 | 内外:沒 | 炎黄褐色 | 底部のみ 残存 | | |
| 161 | 第64図 図版67上 | 第18区 第5a層 | 土師器 Ⅲ | 口径 器高 | (7.2) 1.3 | 比較的浅い器形。底部は丸く仕上げている。全体的に摩滅気味。 | 口縁 体部内 底部 | ヨコナデ ヨコナデ ナデ? | 胎土:密 長石 焼成:やや軟 | 内外:沒 | 炎黄褐色 | 1/4 | | |
| 162 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 4 c層 | 土師器 Ⅲ | 口径 器高 | (10.0) (2.2) | 口縁部は強いヨコナデによってシャープ に仕上げている。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:爭 | 人褐色 | 口緑 1/6 | | |
| 163 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 4 c層 | 土師器 Ⅲ | 口径 器高 | (11.4) (2.6) | 口縁部と体部の境目は強いヨコナデに よって稜が付く。 | 口縁 体部内 底部 | ヨコナデ ヨコナデ 指頭圧痕・ナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | | 炎黄褐色 l褐色 | 1/4 | | |
| 164 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 4 c層 | 土師器 Ⅲ | 口径 器高 | (11.8) (2.8) | 口縁部と体部の境目は強いヨコナデに よって稜が付く。 | 口縁 体部内 底部 | ヨコナデ ヨコナデ 指頭圧痕・ナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外:神 | | 口緑 1/8 | | |
| 165 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 5 b層 | 土師器 Ⅲ | 口径 器高 | (11.8) (2.7) | 口縁部を肥厚させて丸く仕上げている。 やや剝離気味。 | 口緑 | ヨコナデ? | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外:沒 | 炎赤褐色 | 口緑 1/4 | | |
| 166 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 5 b層 | 土師器 | 口径器高 | (6.4) (1.7) | 足高の高台は貼付による。全体的に摩滅 気味。 | 体部内 底部 | ナデ? ヨコナデ? | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外:郛 | 1褐色 | 底部 1/4 | | |
| 167 | 第64図 図版67上 | 第18区 第5a層 | 瓦器 椀 | 口径 器高 | (4.9) (1.7) | 貼付による高台は低い。全体的に摩滅気 味。 | 体部内 底部 | 不明 ヨコナデ ? | 胎土:密 焼成:やや軟 | | 音灰褐色 音灰色 | 底部 1/4 | | |
| 168 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 3 層 | 中世須恵器 東播系 こね鉢 | 器高 | (4.2) | 口縁部は上下に肥厚させ、丸く仕上げて いる。 | 口緑 | ヨコナデ | 胎土:やや粗 黒色粒・ 白色粒 焼成:良好 | | 明灰色 | 口緑小片 | | |
| 169 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 5 b層 | 平瓦 | 長さ 幅 厚さ | (6.5) (6.5) 2.6 | 須恵質に焼き締まっている。 | 凹面 凸面 | 布目 格子目タタキ | 胎土:密 白色粒 焼成:良好 | 四面: 海 凸面: 海 | | 小片 | | |
| 172 | 第66図 図版67下 | 第18区 SB-3 P-143 | 弥生土器 無頸壺 | 口径 器高 | (11.0) (5.1) | 口縁部下に直径 8 mmの円孔が 2 ヶ所外面 から穿たれている。外面の剝離が著しい。 | 口縁 体部内 体部外 | 不明 ナデ 不明 | 胎土:やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:軟 | 内外:海 | 英褐色 | 口緑 1/4 | | |
| 173 | 第66図 図版67下 | 第18区 SB-3 P-143 | 弥生土器 壺 底部 | 底径 器高 | | 外面に黒褐色の黒斑がある。全体的に剝 離気味。 | 体部内 体部外 底部 | ナデ ヘラミガキ ? ナデ ? | 胎土: やや粗 石英 焼成: やや軟 | 外:沒 | 炎褐色 炎褐~ 1.褐色 | 底部 1/2 | | |
| 174 | 第66図 図版67下 | 第18区 SB-3 P-143 | 弥生土器 壺 底部 | 底径 器高 | (8.8) (4.3) | 残存部分外面の大半が黒斑とみられる。 | 体部内 体部外 底部 | ナデ ナデ ナデ | 胎土:やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 外: 8 | 炎褐色 炎褐〜 黒褐色 | 底部 1/4 | | |
| 175 | 第66図 図版67下 | 第18区 SB-3 第 1 層 | 弥生土器 甕 | 口径 底径 器高 | 12.9 (5.0) 20.5 | 口縁部は大きく屈折した後、端部を上方 に突出させている。また、体部外面の下 半部に紀伊型の特徴であるヘラケズリが 施されている。 | 口縁 体部内 体部外 底部 | ヨコナデ ナデ ハケ・ヘラケズリ ナデ | 胎土:やや粗 結晶片岩・ 石英 焼成:やや軟 | 外: 日 | 音褐色 音褐~ 炎褐色 | 完形 | | |
| 176 | 第66図 図版67下 | 第18区 SB-3 P-143 | 弥生土器 鉢 | 口径 器高 | (23.4) (8.2) | 口縁部は内側に肥厚させている。また外面には4条の凹線文が廻る。全体的に摩滅気味。 | 口緑 体部内 体部外 | ヨコナデ ナデ ヨコナデ ? | 胎土: やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成: やや軟 | | 炎灰褐色 l褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 177 | 第66図 図版67下 | 第18区 SB-3 第 1 層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (5.4) | 頸部に貼付突帯を廻らし、刻み目を施している。全体的に摩滅気味。 | 体部内 体部外 | ナデ? ナデ? | 胎土:粗 石英・雲母 焼成:やや軟 | 外: 四 | 号色 音褐~ 号色 | 体部 小片 | | |
| 178 | 第66図 図版67下 | 第18区 SB-3 炉 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (4.0) | 口縁部外面に貼付突帯を廻らしている。 全体的に摩滅気味。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土: やや粗 石英 焼成: 軟 | | 音褐色 炎褐色 | 口緑小片 | | |
| 179 | 第68図 図版68上 | 第18区 SD-33 第 3 層 | 土師器 杯 | 口径 器高 | (11.0) (2.4) | 口縁端部をやや外側に折り曲げて丸く仕 上げている。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 焼成:良好 | 内外: | 炎赤褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 180 | 第68図 図版68上 | 第18区 SD-33 第 2 層 | 土師器Ⅲ | 口径 器高 | (14.0) 3.0 | 口縁部から体部にかけては強いヨコナデ によって稜をなす。 | 口緑底部 | ヨコナデ 指頭圧痕 | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 外: 学 | 炎赤褐色 1褐~ 炎褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 181 | 第68図 図版68上 | 第18区 SD-33 第 3 層 | 土師器 杯 | 口径 器高 | (17.2) (4.8) | 口縁部内面に 1 条の沈線が廻る。体部内面にはヘラミガキが施されていた可能性が高い。 | | | 胎土:密 焼成:良好 | 外: 8 | 炎赤褐色 炎赤褐~ 黄褐色 | 口線 1/6 | | |
| 182 | 第68図 図版68上 | 第18区 SD-33 第 3 層 | 須恵器 壺 | 口径 器高 | (16.6) (3.6) | 口緑端部をやや肥厚させ丸く仕上げてい る。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土: やや粗 石英 焼成:良好 | | 炎灰色 炎灰褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 183 | 第68図 図版68上 | 第18区 SD-33 第 1 層 | 縄文土器 深鉢 | 器高 | (2.3) | 頸部に貼付突帯を廻らし、刻み目を施している。全体的に摩滅が著しい。 | 体部内 体部外 | | 胎土:粗 石英 焼成:軟 | 内外: # | 具褐色 | 体部の細 片が2点 | 第 5 b li 出土し との接 | たもの |
| 185 | 第69図 図版68上 | 第18区 NR-1 | 弥生土器 直口壺 | 口径 器高 | (21.6) (3.5) | ロ緑端部は内外に肥厚する。口縁部外面 に多条の凹線文が廻る。内面が摩滅気味。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土: やや粗 結晶片岩・ 石英 焼成: やや軟 | 内: 湯外: 湯 | | 口縁 1/8 | | |
| 186 | 第69図 図版68上 | 第18区 NR-1 | 土師器 甕 | 器高 | (3.7) | 外反気味にのびる口縁部はやや肉厚。 | | ヨコハケ ヨコハケ・タテハケ | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 内外:郛 | 褐色 | 口縁細片 | | |
| 187 | 第69図 図版68上 | 第18区 NR-1 | 須恵器 杯身 | 口径器高 | (13.2) (3.6) | 全体的に器壁が薄い。外底面のヘラケズ リは1/2程度。 | | ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ | 胎土:密 石英・黒色粒 焼成:良好 | 内: 万外: 沒 | で色 炎灰色 | 1/6 | | |
| 188 | 第72図 図版68下 | 第19区 第5a層 | 須恵器 杯蓋 | つまみ谷 器高 | | 天井部に擬宝珠状のつまみが貼付られて いる。 | 体部内 | ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎土:密 黒色粒 焼成:良好 | 内外: | 炎灰色 | 天井部の み残存 | | |
| 189 | 第72図 図版68下 | 第19区 第 5 a層 | 須恵器 壺 底部 | 底径 器高 | (9.8) (3.6) | 貼付による高台は外側に踏ん張る形状 で、内端部で接地する。 | | ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 内: 沒 外: 沒 高台内: | 炎灰色 炎灰褐色 淡灰色 | 底部 1/4 | | |
| 190 | 第72図 図版68下 | 第19区 第5a層 | 須恵器 壺 底部 | 底径 器高 | (12.1) (5.8) | 貼付による高台は比較的低く、底面に繊維状の圧痕が残る。内外面とも淡緑色の自然釉が付着。 | | ヨコナデ ヘラケズリ ナデ | 胎土:密 焼成:良好 | 内外: 原 | | 底部 1/8 | | |
| 191 | 第72図 図版68下 | 第19区 層位不明 | 土師器 | 口径 器高 | (6.8) 1.3 | 器高が低く、肉厚な器形。 | 口縁底部 | ヨコナデ 指頭圧痕 | 胎土:密 焼成:良好 | 外: 8 | 炎黄褐色 炎褐~ 炎黄褐色 | 1/4 | | |
| 192 | 第72図 図版68下 | 第19区 第4a層 | 土師器皿 | 口径器高 | (10.8) 2.1 | 全体的に肉厚な器形。 | 口縁底部 | ヨコナデ ナデ | 胎士:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内: 浮 | 礼褐色 炎赤褐色 | 1/8 | | |

表 | 出土遺物観察表(6)

| | | | | | | . 197 E76 | | | | | | | |
|----------|---------------|----------------------------|---------------------|---------------------------------|--|------------------|----------------------------------|--|-----------|-----------------------|------------|------------|---|
| 遺物 番号 | 挿図 番号 | 出土地区・ 遺構・層位 | 器種 | 計測値(cm) | 形態の特徴 | | 技 法 | 胎土・焼成 | ť | 色調 | 残存率 | 備 | 考 |
| 193 | 第77図 図版69上 | 第22区 SD-57 第 2 層 | 須恵器 杯蓋 | 口径 (18.2) つまみ径 2.6 器高 2.0 | 全体的に扁平な器形。天井部に擬宝珠状 のつまみが貼付られている。 | | ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ | 胎土:密 長石・黒色粒 焼成:良好 | 内外 | 淡灰色 | 1/2 | | |
| 194 | 第77図 図版69上 | 第22区 SD-57 第 1 層 | 須恵器 壺 | 体部径 (18.4) 器高 (14.9) | 体部上位に最大径をもつ。 | 体部内 体部外 | タタキ後ナデ あて具痕 | 胎土:密 白色粒・黒色粒 焼成:良好 | 内外 | 灰色 | 1/3 | | |
| 195 | 第77図 図版69上 | 第22区 SD-57 第 3 層 | 土師器 杯 | 口径 (12.7) 器高 (3.8) | 比較的肉厚な器形で、口縁端部をシャー プに仕上げている。 | 口緑 体部内 体部外 | ヨコナデ ヨコナデ ナデ | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外 | 乳褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 196 | 第77図 図版69上 | 第22区 SD-57 第 4 層 | 土師器皿 | 口径 (14.4) 器高 (3.0) | 口縁部内面に沈線状の段をもたせている。 | 口縁 体部内 体部外 | ヨコナデ ナデ ナデ | 胎土:密 長石・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外 | 淡赤褐色 | 体部 1/4 | | |
| 197 | 第77図 図版69上 | 第22区 SD-57 第 4 · 5 層 | 土師器 鉢 | 底径 (9.4) 器高 (5.3) | 片方の破片高台上部には黒褐色の黒斑が ある。高台は貼付による。 | 体部内 体部外 底部 | ナデ ヘラケズリ ヨコナデ | 胎土:密 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外 | 淡赤褐色 | 1/2 | 第4· 接合資 | |
| 198 | 第77図 図版69上 | 第22区 SD-57 第2a層 | 黒色土器 B類椀 | 口径 (12.8) 器高 (2.7) | | 口緑 体部内 体部外 | ヘラミガキ? ヘラミガキ? ヨコナデ | 胎土:密 結晶片岩? 焼成:良好 | 内:外: | 黒褐色 黒褐~ 淡褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 199 | 第77図 図版69上 | 第22区 SD-57 第 2 層 | 土師器皿 | 口径 (11.0) 器高 (2.6) | 体部には強いヨコナデによって明瞭な段 をなす。全体的に剝離気味。 | 口縁 体部内 体部外 | ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:やや粗 石英・結晶片岩・ 長石・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外 | 明褐色 | 口縁 1/6 | | |
| 200 | 第77図 図版69上 | 第22区 SD-57 第 3 層 | 土師器 | 口径 10.3 器高 1.7 | 口緑部外面に黒褐色のススが付着している。灯明皿として使用したものとみられる。 | 口縁 体部 底部 | ヨコナデ ヨコナデ 指頭圧痕 | 胎土:密 石英· 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内:外: | 淡黄褐色 淡褐~ 暗褐色 | 完形 | | |
| 201 | 第77図 図版69下 | 第22区 SD-57 第 1 層 | 土師器皿 | 口径 (13.9) 器高 3.1 | 口縁部は外反気味にのび、シャープに仕 上げている。底面はやや上げ底状となる。 | 口縁 体部内 底部 | ヨコナデ ナデ ナデ | 胎土:密 焼成:良好 | 内: | 乳褐色 明褐色 | 1/2 | | |
| 202 | 第77図 図版69下 | 第22区 SD-57 第 2 b層 | 丸瓦 | 長さ (10.5) 幅 (15.8) 厚さ 2.1 | 比較的軟質焼成で、全体的に摩滅気味。 | 四面凸面 | 布目・吊り紐痕 タタキ? | 胎土: やや粗 結晶片岩・ 石英 焼成: 軟 | | 淡褐色 淡灰褐色 | 下端部のみ残存 | | |
| 204 | 第77図 図版69下 | 第23区 SD-61 第 4 層 | 須恵器 杯身 | 口径 (11.6) 器高 (3.1) | 極めて軟質な個体で全体的に摩滅気味。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 黒色粒 焼成:軟 | 内外 | 乳褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 205 | 第77図 図版69下 | 第23区 SD-61 第 3 層 | 土師器 足釜 脚部 | 器高 (7.7) | 外面部分にヘラ切りによる面取りが行われている。 | 脚部 | ナデ | 胎土:密 石英 焼成:良好 | 内外 | 赤褐色 | 脚部 小片 | | |
| 206 | 第78図 図版70上 | 第22区 SD-62 第1層 | 土師器Ⅲ | 口径 (8.8) 器高 (2.0) | 口緑部は外反しながらのび、端部を肥厚 させている。外底面には指頭圧痕が顕著 に残る。 | | ヨコナデ 指頭圧痕 指頭圧痕 | 胎土:密 結晶片岩· 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外 | 淡赤褐色 | 口縁 1/4 | | |
| 207 | 第78図 図版70上 | 第22区 SD-62 第 2 層 | 中世須恵器 東播系 こね鉢 | 口径 (24.4) 器高 (4.6) | 口緑部は上下に肥厚させて丸く仕上げて いる。口緑部外面のみ暗灰色に発色して いる。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:やや粗 石英 焼成:良好 | 内外 | 灰色 | 口縁 1/8 | | |
| 208 | 第78図 図版70上 | 第22区 SK-81 | 土師器杯 | 口径 (6.9) 器高 (2.0) | 貼付による高台はやや外側に踏んばる形 状で内端部が接地する。 | 体部内 体部外 底部 | 不明 ヨコナデ ヨコナデ | 胎土:密 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:やや軟 | 内外 高台P | : 淡赤褐色 内: 淡灰褐 色 | 底部 1/4 | | |
| 209 | 第78図 図版70上 | 第22区 SK-76 | 肥前系 陶器 甕 | 口径 (16.8) 器高 (6.3) | 口縁部は大きく外側に屈折させて仕上げ ている。外面肩部に1条の沈線が廻る。 | 口縁 体部内 体部外 | ヨコナデ あて具痕 ヨコナデ | 胎土:密 焼成:良好 | 内: | 暗赤褐色 暗褐色 | 口縁 1/4 | | |
| 210 | 第79図 図版70上 | 第22区 SD-56 第 3 層 | 肥前系 陶器 碗 | 口径 (10.4) 器高 (4.4) | | 口緑 体部内 体部外 | 施釉 施釉 施釉 | 胎土:密 焼成:良好 | 内: | 褐色 白濁色 | 口縁 1/4 | | |
| 211 | 第79図 図版70上 | 第23区 SD-56 第1・2層 | 肥前系磁器 染付 碗 | 口径 (5.0) 器高 (2.7) | | 口縁 体部内 体部外 | 施釉 施釉 施釉 | 胎土:緻密 焼成:良好 | 内外 | 白~ 白灰色 | 底部 1/3 | | |
| 212 | 第79図 図版70上 | 第23区 SD-56 第 1 · 2 層 | 備前焼壺 | 底径 (8.4) 器高 (3.8) | 体部内面には強いヨコナデによる稜が明 瞭に残る。 | 体部内 体部外 底部 | ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ ヘラケズリ | 胎土: やや粗 石英 焼成: 良好 | 内: | | 底部 1/4 | | |
| 213 | 第79図 図版70上 | 第23区 SD-56 第 3 層 | 土師器 炮烙 | 口径 (26.0) 器高 (4.0) | 口縁部内面に1条の沈線が廻る。 | 口緑 | ヨコナデ | 胎土:密 石英・長石・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外 | 淡赤褐色 | 口縁 1/8 | | |
| 214 | 第79図 図版70上 | 第23区 SD-56 第 4 層 | 弥生土器 壺 | 器高 (4.8) | 外面に多条の凹線文が廻る。 | 体部内 体部外 | 絞り目 ヨコナデ? | 胎土: やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成:良好 | 内外 | 淡褐色 | 頸部 1/3 | | |
| 215 | 第84図 図版70下 | 第24区 SK-86 | 弥生土器 甕 | 口径 (24.6) 器高 (8.1) | 外面の剝離が著しい。 | 口縁 体部内 体部外 | | 胎土:密 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成:軟 | 内: | 乳褐色 淡黄褐色 | 口縁 1/4 | | |
| 216 | 第84図 図版70下 | 第24区 SK-56 下層 | 弥生土器 脚部 | | 脚端部は上下に肥厚させ仕上げている。 外面が摩滅気味。 | 脚部内 脚部外 底部 | ヘラケズリ ナデ? ヨコナデ | 胎土: やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成: やや軟 | | 褐色 淡褐色 | 脚部 1/4 | | |
| 217 | 第84図 図版70下 | 第24区 SK-56 下層 | 瓦器 椀 | 口径 (12.4) 器高 (3.0) | 全体的に摩滅が著しい。 | 口緑 体部内 体部外 | ョコナデ 不明 不明 | 胎土:密 焼成:やや軟 | 内外 | 淡灰色 | 口縁 1/6 | | |
| 218 | 第84図 図版70下 | 第24区 SK-56 下層 | 瓦器 | 底径 (4.0) 器高 (1.3) | 高台は貼付による。全体的に摩滅が著し い。 | 体部内底部 | 不明 ヨコナデ | 胎土:密 焼成:良好 | | 暗灰色 淡灰色 | 底部 1/3 | | |
| 219 | 第84図 図版70下 | 第24区 SK-56 下層 | 土師器 | | 口縁部全体を大きく肥厚させ、端部を内側に屈折させて丸く仕上げている。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 結晶片岩・石英 焼成:良好 | 内:外: | | 口縁 1/6 | | |
| 220 | 第87図 図版70下 | 第25区 第5b層 | 弥生土器 壺 底部 | 底径 (6.0) 器高 (2.8) | 内面の摩滅が著しい。 | 体部内底部 | ナデ? ナデ | 胎土: やや粗 石英・ 赤色軟質粒 焼成: やや軟 | 内:外: | 黒褐色 淡黄褐~ 淡赤褐色 | 底部 1/4 | | |
| 221 | 第87図 図版70下 | 第25区 第 5 c層 | 土師器 甕 底部 | 底径 3.6 器高 2.0 | 外面の摩滅が著しい。 | 体部内 体部外 底部 | ナデ タタキ ナデ? | 胎土: やや粗 結晶片岩・ 石英・赤色軟質粒 焼成: やや軟 | 内:外: | 乳褐色 黒褐~ 淡褐色 | 底部のみ 残存 | | |
| 222 | 第87図 図版70下 | 第25区 第 5 c層 | 弥生土器 高杯 | 口径 (22.8) 器高 (2.9) | 内面の剝離が著しい。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 白色粒 焼成:軟 | 内: | | 口縁 1/8 | | |
| 223 | 第87図 図版70下 | 第25区 第 5 a層 | 須恵器 杯蓋 | | やや内傾する器形で、肩部に明瞭な稜線が1条廻る。 | 口縁 | ヨコナデ | 胎土:密 白色粒・黒色粒 焼成:良好 | | 淡灰色 | 口縁小片 | | |
| 224 | 第87図 図版70下 | 第25区 第 4 b層 | 土師器 | | 口縁部下内面に 1 条の沈線が廻る。外面 が剝離気味。 | | ヨコナデ ヨコナデ 指頭圧痕 | 胎土:密 赤色軟質粒 焼成:良好 | | 乳褐色 乳白色 | 口縁 1/8 | | |
| 225 | 第87図 図版70下 | 第25区 第 4 b層 | 土師器 椀 | 口径 (15.4) 器高 (2.9) | 全体的に摩滅気味。 | 口緑 体部内 | ヨコナデ? ヨコナデ? 指頭圧痕? | 胎土:密 焼成:やや軟 | 内外 | 暗褐色 | 口縁 1/8 | | |
| | | | | | L | THE P | 1 of CON-10 (AS) 1 | | | | 1 | | |

表 2 出土遺物観察表

| 遺物番号 | 挿図番号 | 出土地区· | 種 類 | | 計畫 | 則 値 | | Works on 64 AW. | 胎土・焼成 | 色調 | ER who who | 備 | de |
|------|---------------|------------------------|----------|--------|-------|--------|--------|--|-----------------|---------|------------|-----|----|
| 番号 | 押凶番写 | 遺構・層位 | 悝 知 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 形態の特徴 | 后工・ | 色調 | 残存率 | 1/H | 考 |
| 130 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 2 層 | 土錘 管状 | (4.1) | 0.7 | 0.7 | (2.1) | ほぼ円筒状。比較的小さい。 | 胎土:密 焼成:良好 | 淡褐色 | 両端部のみ欠失 | | |
| 131 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 2 層 | 土錘 管状 | 6.9 | 1.2 | 1.2 | 8.4 | 中位がやや肉厚になる形状。 胎土に砂粒が目立つ。 | 胎土:やや粗 焼成:良好 | 淡褐色 | 完存 | | |
| 132 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 1 層 | 土錘 管状 | (6.6) | 1.2 | 1.0 | (6.4) | やや歪みのある形状。 | 胎土:密 焼成:良好 | 灰白色 | ほぼ完存 | | |
| 133 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 1 層 | 土錘 管状 | 7.0 | 1.3 | 1.2 | 10.5 | 中位がやや肉厚になり、やや 歪みのある形状。穿孔も内部 でやや屈曲している。 | 胎土:密 焼成:良好 | 淡褐色 | 完存 | | |
| 134 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 1 層 | 土錘 管状 | (6.4) | 1.2 | 1.2 | (8.4) | 中位がやや肉厚になる形状。 | 胎土:密 焼成:良好 | 淡赤褐~淡褐色 | 端部の一部のみ欠失 | | |
| 135 | 第54図 図版64下 | 第21区 SD-13 第 1 層 | 土錘 管状 | 8.4 | 1.1 | 1.1 | (10.9) | | 胎土:密 焼成:良好 | 淡赤褐~黄褐色 | 端部の一部のみ欠失 | | |

表 3 出土遺物観察表

| | | | | | | | 15 3 | | 退彻既示公 | | | | | |
|----------|---------------|------------------------|-------------------|-------|--------|--------|---------------|---------|--|--------|------------------------|---|---|--|
| 遺物 番号 | 挿図番号 | 出土地区・ 遺構・層位 | 種 類 | 石 材 | 長さ(cm) | 計 iff | 削 値 厚さ(cm) | 重量(g) | 形態の特徴 | 色 調 | 残存率 | 備 | 考 | |
| 10 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-1 第1層 | 石鏃? 打製石器 | チャート | (1.8) | (1.4) | (0.6) | (1.2) | 先端部が破損か。 | 黄緑~暗緑色 | 1/2程度 | | | |
| 11 | 第10図 図版55下 | 第1区 SD-1 第2層 | 砥石 | 砂岩 | (7.3) | (14.1) | 4.7 | (530.2) | 研磨面は使用によりやや凹んで いる。台石の可能性もあり。 | 淡灰褐色 | 大半が破損 | | | |
| 17 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-2 第1層 | 石鏃 平基式 打製石器 | サヌカイト | 3.5 | 2.0 | 0.5 | (4.2) | 表裏面とも大刹離面を残す。細 部調整の方向性は一定でない。 | 暗灰色 | 基部の一部のみ破損 | | | |
| 18 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-2 第2層 | 石鏃 尖基式 打製石器 | サヌカイト | (2.7) | 1.4 | 0.3 | (1.0) | 表裏面とも大刹離面を残す。細 部調整の方向性は不明瞭。 | 黒灰色 | 先端及び基部の一部 が破損 | | | |
| 19 | 第10図 図版56上 | 第1区 SD-2 第2層 | 石鏃 打製石器 | サヌカイト | (2.1) | (1.2) | (0.5) | (1.2) | 表裏面とも大剁離面を残す。 | 暗灰色 | 先端部のみ残存 | | | |
| 22 | 第14図 図版56下 | 第1区 SB-1 P-21 | 叩石 礫石器 | 砂岩 | 12.5 | 10.0 | 3.2 | 617.5 | 上面及び一方の側縁部に敲打痕 を残す。 | 灰褐色 | 完存 | | | |
| 48 | 第18図 図版58下 | 第1区 第6b層 | スクレイバー 打製石器 | サヌカイト | 6.8 | 4.2 | 0.8 | 25.9 | 上端部に自然面を残し、表裏面 に大剝離面を残す。 | 黒灰色 | 完存 | | | |
| 49 | 第18図 図版58下 | 第1区 第6b層 | 石鍬 打製石器 | 結晶片岩 | (14.2) | (8.6) | 0.9 | (147.1) | 表裏面とも大剁離面を残す。 | 淡灰色 | 1/2程度 | | | |
| 50 | 第18図 図版58下 | 第1区 第6b層 | 叩石 礫石器 | 砂岩 | 9.4 | (8.3) | (3.2) | (359.2) | 主に上下端部に敲打痕を残す。 | 淡灰褐色 | 一部が破損 | | | |
| 51 | 第18図 図版58下 | 第1区 第6b層 | 叩石 礫石器 | 砂岩 | (6.1) | (7.3) | 3.6 | (232.3) | 下端部に敲打痕を残す。 | 淡褐色 | 1/2程度 | | | |
| 52 | 第18図 図版58下 | 第1区 第6b層 | 切目石錘 | 砂岩 | 6.0 | 3.8 | 1.5 | 44.3 | 両端部の切り込みは比較的丁寧 に仕上げている。 | 淡灰褐色 | 完存 | | | |
| 53 | 第18図 図版58下 | 第1区 第6b層 | 切目石錘 | 砂岩 | 5.3 | (1.8) | (1.2) | (15.4) | 両端部の切り込みは比較的丁寧 に仕上げている。 | 暗灰色 | 2/3程度 | | | |
| 54 | 第18図 図版58下 | 第1区 第6b層 | 切目石錘 | 砂岩 | 8.4 | 2.4 | 1.3 | 42.5 | 両端部の切り込みは打ち欠きに よって行われている。 | 暗灰~淡灰色 | 完存 | | | |
| 57 | 第22図 図版59上 | 第4区 第6c層 | 石鏃 平基式 打製石器 | サヌカイト | 2.4 | (1.8) | 0.4 | (1.0) | 裏面に大剝離面を残す。細部調整は主として先端から基部に向 かって行われている。 | 暗灰色 | ほぼ完存 | | | |
| 58 | 第22図 図版59上 | 第 4 区 第 6 b層 | 石鏃 凹基式 打製石器 | サヌカイト | (2.1) | (1.3) | 0.4 | (0.9) | 表面の細部調整は基部から先端 に向け行われ、裏面は不明瞭。 | 淡灰色 | 主に先端部が破損 | | | |
| 84 | 第46図 図版60下 | 第14区 第 5 b層 | 叩石 礫石器 | 砂岩 | 11.4 | 5.5 | 5.2 | 536.3 | 上下端部にのみ敲打痕を残す。 | 淡灰褐色 | ほぼ完存 | | | |
| 141 | 第56図 図版65上 | 第17区 第 3 層 | 石鏃 平基式 打製石器 | サヌカイト | (2.6) | 1.6 | 0.4 | (1.1) | 表裏面とも細部調整は、基部から先端部に向かって行われている。 | 暗灰色 | ほぼ完存 | | | |
| 159 | 第61図 図版66下 | 第17区 SD-10 第 2 層 | 石斧 磨製石器 | 砂岩 | 12.8 | 5.3 | 3.5 | 410.7 | ほぼ全面に丁寧な研磨痕が確認 できる。一部に粗加工時の敲打 痕を残す。 | 暗緑色 | 完存 | | | |
| 160 | 第61図 図版66下 | 第17区 SD-10 第 2 層 | 一石五輪塔 | 砂岩 | (28.0) | 12.3 | 11.9 | (7980) | 全体的に摩滅気味。 | 淡青灰色 | 空・風輪が欠失。火・ 地輪の一部が欠損 | | | |
| 170 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 5 b層 | 石鏃 凹基式 打製石器 | サヌカイト | 1.3 | 1.5 | 0.3 | 0.6 | 表裏面とも細部調整は、基部から先端部に向かって行われている。 | 暗灰色 | 完存 | | | |
| 171 | 第64図 図版67上 | 第18区 第 5 b層 | 石鏃 平基式 打製石器 | サヌカイト | (1.8) | 1.6 | 0.4 | (0.8) | 裏面に大刹離面を残す。細部調 整は不明瞭。 | 暗灰色 | 先端部のみ欠失 | | | |
| 184 | 第68図 図版68上 | 第18区 SD-33 第 3 層 | 石鏃 凹基式 打製石器 | サヌカイト | (1.6) | 1.8 | 0.3 | (1.0) | 表裏面とも大刹離面を残す。細 部調整は、主に基部から先端部 に向かって行われている。 | 暗灰色 | 先端部のみ欠失 | | | |
| 203 | 第77図 図版69下 | 第22区 SD-57 第 2 層 | 石錐 打製石器 | サヌカイト | (2.6) | 1.0 | 0.5 | (1.0) | 細部調整は、主に先端部から基 部に向かって行われている。 | 灰色 | 1/2程度 | | | |

表 4 出土遺物観察表

| 遺物 | 挿図番号 | 出土地区· | 種 類 | | 計進 | 11 値 | | 形態の特徴 | 色 調 | 残存率 | 備考 |
|-----|-------|------------------------|-----|--------|-------|--------|--------|--------|-----|--------|----------|
| 番号 | 押凶缶ち | 遺構・層位 | 性规 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | ルル思り付取 | 巴嗣 | 75、行 平 | 7/8 - 75 |
| 226 | 図版61下 | 第14区 SD-37 第 2 層 | 馬歯 | (7.6) | 2.2 | 2.5 | (24.1) | 白歯の一部。 | 淡褐色 | 小片 | 写真のみ掲載 |

報告書抄録

| ふりがな | かわなべいせ | きだい10・11・ | ・12・13じはっ | くつちょ | うさほう | こくしょ | | | | | | | |
|------------------------|--|--|---------------|-------------------|---|-----------------------------|---------|-------------------------------|---|--|--|--|--|
| 書名 | 川辺遺跡第 | 第10・11・12 | 2・13次発掘 | 調査報 | 告書 | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | | | | | | |
| 卷 次 | | | | | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 和歌山市者 | 邓市整備公社 | 上発掘調査報 | 告書 | | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第3集 | | | | | | | | | | | | |
| 編著者名 | 井馬好英 | 前田敬彦 | 彦(和歌山市 | 教育委 | 員会) | | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人和 | 口歌山市都市 | 万整備公社 | | | | | | | | | | |
| 所 在 地 | ₹640-814 | 6 和歌山県 | 和歌山市一名 | 番丁3 | TEL | 073-435-11 | 29 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西曆 2010 | 年 3 月31日 | | | | | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所 在 地 | カー 市町村 | 遺跡番号 | - 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面(m²) | | 調査原因 | | | | |
| | | 20080825 20081104 24° 125° 20081028 | | | | | | | | | | | |
| mb &x い tel 川 辺 遺 跡 | かかきまけん和歌山県 | かゃまけん 歌山県 34° 135° 20081028 20090204 1187.1 大規模開発に伴う | | | | | | | | | | | |
| | かわなべ・さと川辺・里 | 3020130 | 140 | 34" | 10" | 20090209 20090227 | 166 | .0 | 発掘調査 | | | | |
| | | | | | | 20090520 20090616 | 139 | .3 | | | | | |
| 所収遺跡名 | 種別主 | 定な時代 | 主な遺構 | = | E な | 遺物 | | 特 | 記事項 | | | | |
| 川辺遺跡 | 集落跡 計 | 店生時代 古墳時代 養鳥時代 養息時代 | | 土師器 黒色土 中世土 | ・須恵郡・器・郷田の一番のの一番の一番の一番の一番の一番の一番の一番の一番の一番の一番の一番の一番 | 器・ 中世須恵器 国産陶磁器 石器・ | 調物穴鳥器 | 潜。 の群や に住居 は時代 が溝 | 跡中央部における 縄文時代後期の遺 弥生時代中期の竪 を検出し、また飛 から奈良時代の土 からまとまって出 。旧座標。 | | | | |
| 要約 | 形周溝墓の 伊第III〜I 代中期中野また竪穴位 群や供伴っこの他、対 れる飛鳥町山県文化駅 | 調査対象地南東部において弥生時代中期前葉の紀伊第II様式に比定できる土坑墓及び方形周溝墓の可能性が高い溝状遺構を確認するとともに、弥生時代中期中葉から後葉の紀伊第III~IV様式の竪穴住居を検出し、弥生時代中期集落の一端を明らかにした。弥生時代中期中葉の竪穴住居は、松菊里式の特徴である炉の両端にピットをもつものである。また竪穴住居などを検出したベース層内部からは縄文時代後期の堀之内II式を含む土器群や供伴する石器が一定量出土し、川辺遺跡内では最も古い時期の遺物分布を確認した。この他、対象地南半部を中心として日本書記に記された「河辺屯倉」に関連するとみられる飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物が溝内部から集中して出土し、財団法人和歌山県文化財センターの調査において確認されていた南西部の掘立柱建物群に関わりのある遺物群として注目できる。 | | | | | | | | | | | |

図 版



調査地遠景(北から)



調査地近景空撮(西から) 第6次調査時撮影



対象地北部調査前の状況(北東から)



対象地南部調査前の状況(北から)



第1区 第1遺構面全景(北東から)



第1区 第1遺構面全景(南西から)



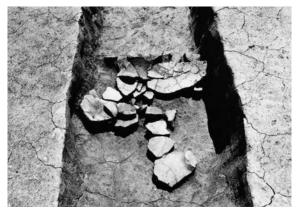
第1区 SD-1・2(南から)



第1区 SD-1土層堆積状況(南から)



第1区 SD-2土層堆積状況(南から)



第1区 SD-1遺物出土状況(北から)



第1区 SD-1遺物出土状況(東から)



第1区 SB-1・2(北から)



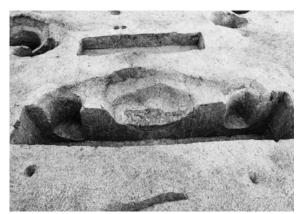
第1区 SB-1(南東から)



第1区 SB-2(北西から)



第1区 SB-1炉(北東から)



第1区 SB-1炉断割状況(南西から)



第1区 SK-9(北東から)



第1区 SK-9土層堆積状況(南西から)



第1区 第2遺構面全景(北東から)



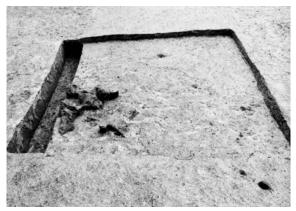
第1区 第2遺構面全景(南西から)



第1区 焼土2・3検出状況(北東から)



第1区 焼土1検出状況(南西から)



第1区 中央サブトレンチ(北西から)



第1区 中央セクションベルト土層堆積状況(北東から)



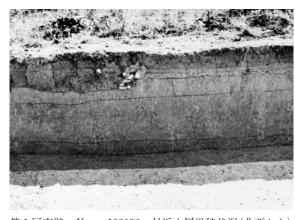
第2区 全景(北西から)



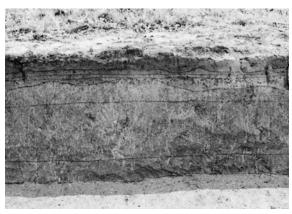
第2区 全景(南東から)



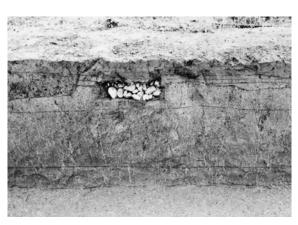
第1区東壁 $X = -193024 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北西から)



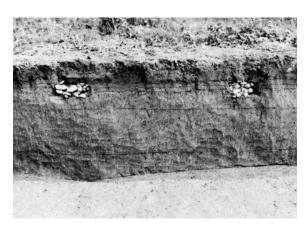
第 1 区東壁 $X = -193032 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北西から)



第1区東壁 X=-193041m付近土層堆積状況(北西から)



第1区東壁 X=-193048m付近土層堆積状況(北西から)



第1区東壁 X=-193056m付近土層堆積状況(北西から)



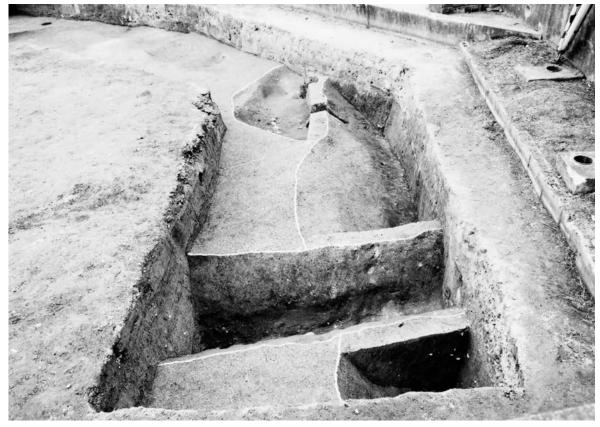
第1区サブトレンチ1北壁 Y=-67279m付近土層堆積状況(南西から)



第1区サブトレンチ2南壁 Y=-67297m付近土層堆積状況(北東から)



第 2 区南壁 $Y = -67396 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北から)



第3区 全景(東から)



第3区 SK-23(南から)



第3区 SD-7土層堆積状況(東から)



第3区 SD-3(北から)



第3区 SD-3土層堆積状況(北から)



第4区 全景(北東から)



第4区 全景(南西から)



第5区 全景(北東から)



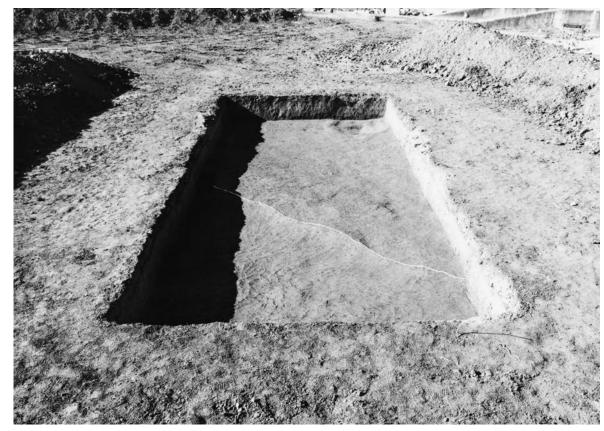
第5区 全景(南西から)



第6区 全景(北東から)



第6区 全景(南西から)



第7区 第1遺構面全景(北東から)



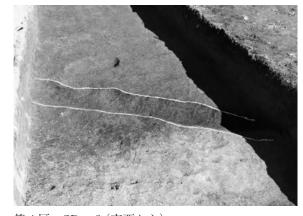
第7区 第1遺構面全景(南西から)



第7区 第2遺構面全景(北東から)



第7区 第2遺構面全景(南西から)



第4区 SD-8(南西から)



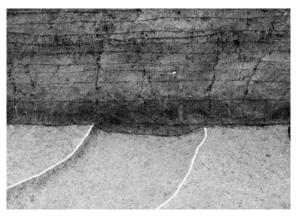
第4区 SK-25土層堆積状況(北東から)



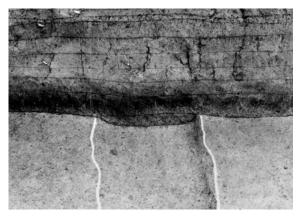
第5区 SK-18(西から)



第5区 SK-21(北東から)



第5区 SD-4土層堆積状況(北西から)



第5区 SD-5土層堆積状況(北西から)



第6区 SK-19(北東から)



第7区 SK-24土層堆積状況(西から)



第8区 全景(北東から)



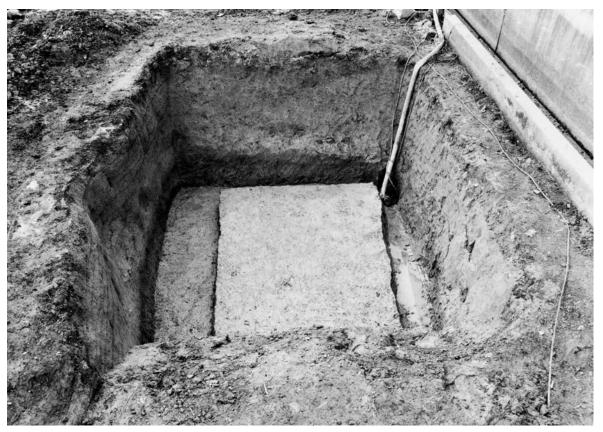
第8区 全景(南西から)



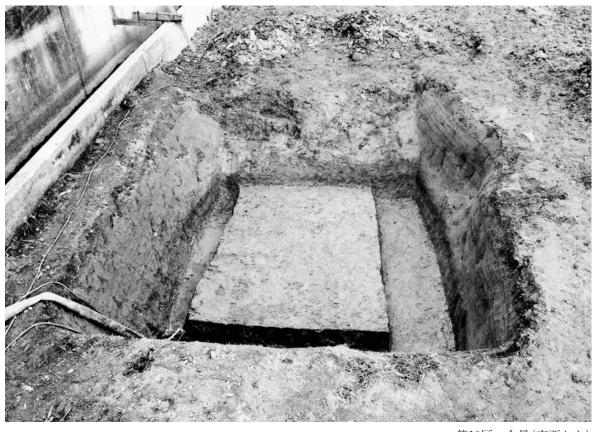
第9区 全景(北東から)



第9区 全景(南西から)



第10区 全景(北東から)



第10区 全景(南西から)



第11区 第1遺構面全景(北東から)



第11区 第1遺構面全景(南西から)



第11区 第2遺構面全景(北東から)



第11区 第2遺構面全景(南西から)



第12区 第1遺構面全景(北東から)



第12区 第1遺構面全景(南西から)



第12区 第2遺構面全景(北東から)



第12区 第2遺構面全景(南西から)



第13区 全景(北東から)



第13区 全景(南西から)



第14区 第1遺構面全景(北東から)



第14区 第1遺構面全景(南西から)



第14区 第2遺構面全景(北東から)



第14区 第2遺構面全景(南西から)



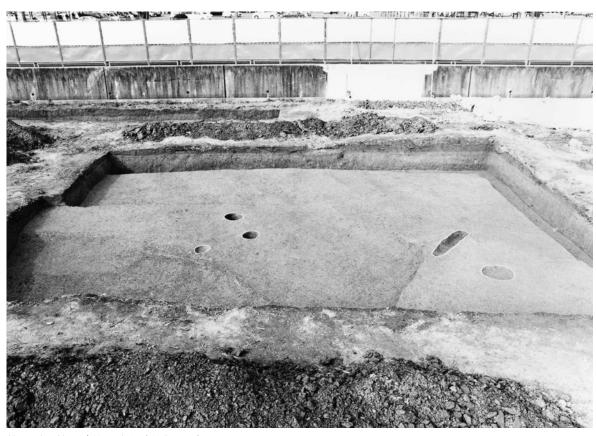
第15区 全景(北東から)



第15区 全景(南西から)



第16区 第1遺構面全景(北東から)



第16区 第1遺構面全景(南東から)



第16区 第2遺構面全景(北東から)



第16区 第2遺構面全景(南東から)



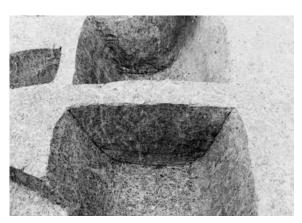
第11区 SD-53(南から)



第11区 SD-53土層堆積状況(南から)



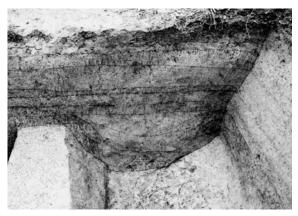
第13区 SD-40土層堆積状況(北から)



第14区 SD-41土層堆積状況(東から)



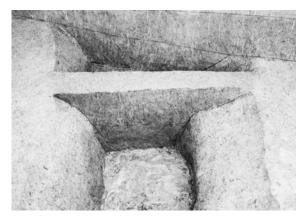
第14区 SD-43土層堆積状況(東から)



第14区 SD-37土層堆積状況(北西から)



第14区 SK-51(南東から)



第15区 SD-19土層堆積状況(北西から)



第15区 SD-11・12土層堆積状況(西から)



第16区 SA-1(南東から)



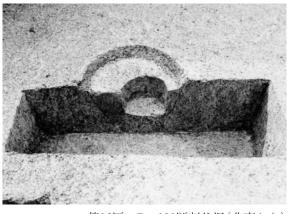
第16区 SD-46~48(東から)



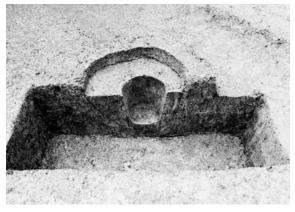
第16区 SD-46~48土層堆積状況(東から)



第16区 SD-43土層堆積状況(西から)



第16区 P-180断割状況(北東から)



第16区 P-179断割状況(北東から)



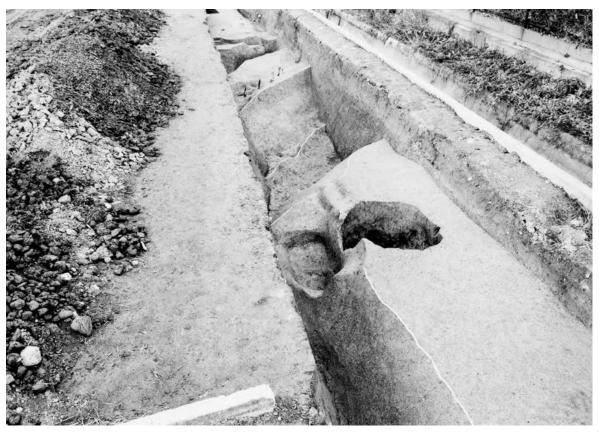
第16区 P-169断割状況(北東から)



第17区 全景(北から)



第17区 全景(南から)



第17区 SD-24・28(南西から)



第17区 SD-24土層堆積状況(南西から)



第17区 SD-28土層堆積状況(南西から)



第17区 $SD-26 \cdot SK-42$ (東から)



第17区 SD-23(西から)



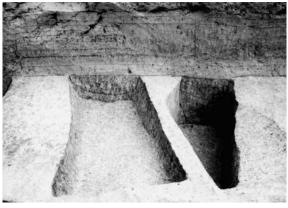
第17区 SD-23土層堆積状況(西から)



第17区 SD-22(北東から)



第17区 SD-22土層堆積状況(南西から)



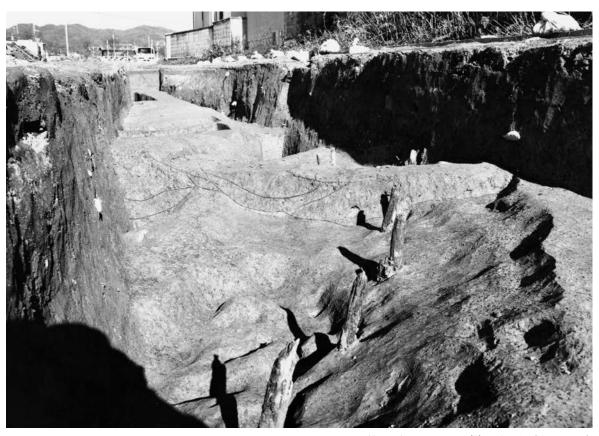
第17区 SD-25・27(南東から)



第17区 SD-27土層堆積状況(南東から)



第17区 SD-10(南西から)



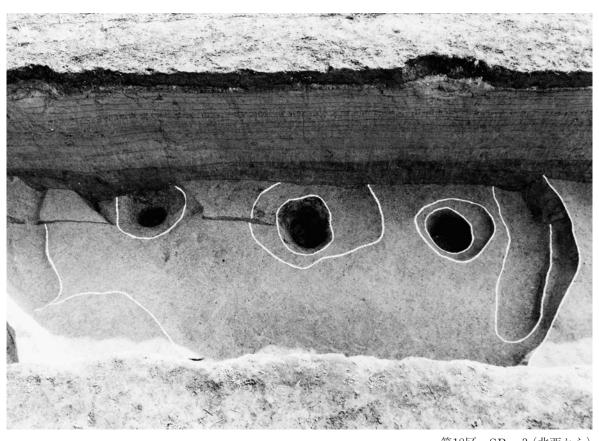
第17区 SD-10土層堆積状況(南西から)



第18区 全景(北東から)



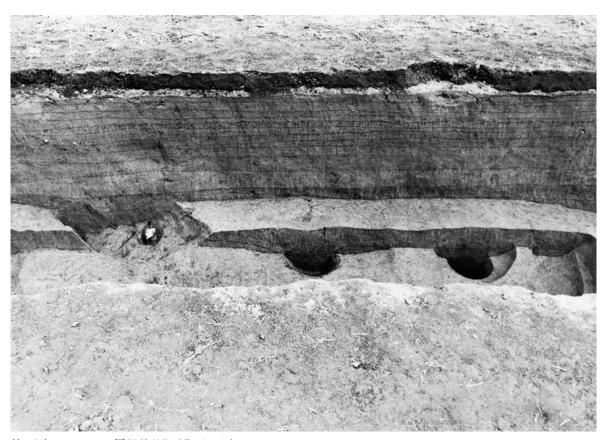
第18区 全景(南西から)



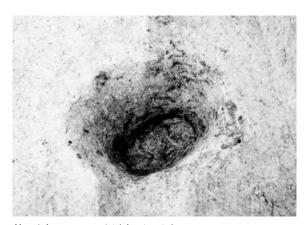
第18区 SB-3(北西から)



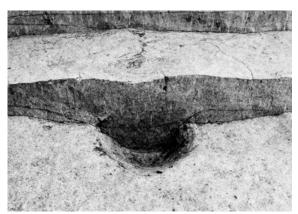
第18区 SB-3(南西から)



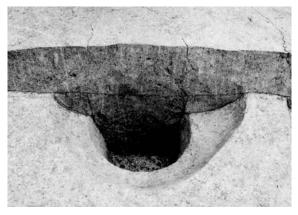
第18区 SB-3土層堆積状況(北西から)



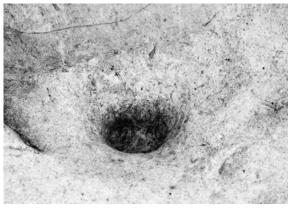
第18区 SB-3炉(南西から)



第18区 SB-3 炉土層堆積状況(北西から)



第18区 P-142土層堆積状況(北西から)



第18区 P-143(北西から)

第18区 SD-33周辺(西から)



第18区 SD-33土層堆積状況(西から)



第18区 SD-35土層堆積状況(西から)



第18区 SD-36土層堆積状況(東から)



第18区 NR-1北肩部土層堆積状況(北西から)



第19区 全景(南西から)



第19区 全景(北西から)



第20区 全景(南東から)



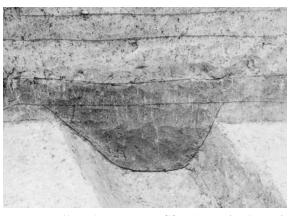
第20区 全景(北西から)



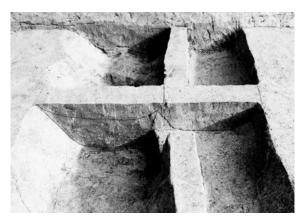
第21区 全景(南東から)



第21区 全景(北西から)



第19区 SD-32土層堆積状況(北東から)



第20区 SD-29・30土層堆積状況(南西から)



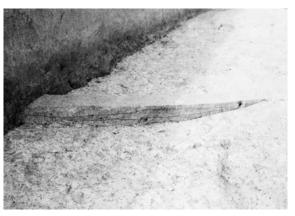
第15・21区 SD-15(西から)



第21区 SD-15土層堆積状況(西から)



第21区 SD-13東セクションベルト土層堆積状況(西から)



第21区 SD-13西セクションベルト土層堆積状況(東から)



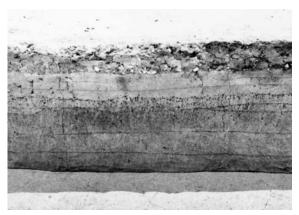
第21区 SD-17周辺(南東から)



第21区 SD-17土層堆積状況(東から)



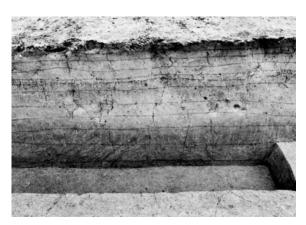
第 4 区東壁 $X = -192816 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北西から)



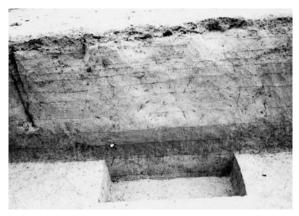
第4区東壁 X=-192827m付近土層堆積状況(北西から)



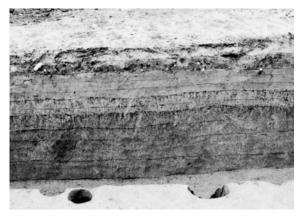
第 4 区東壁 $X = -192837 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北西から)



第5区東壁 X=-192852m付近土層堆積状況(北西から)



第6区東壁 X=-192879m付近土層堆積状況(北西から)



第7区東壁 $X = -192845 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北西から)

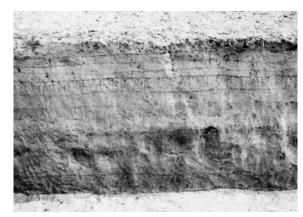


第8区東壁 X=-192914m付近土層堆積状況(北西から)

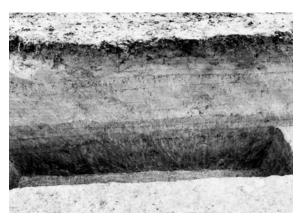


第9区東壁 X = -192926m付近土層堆積状況(北西から)

第10区東壁 $X = -192938 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北西から)



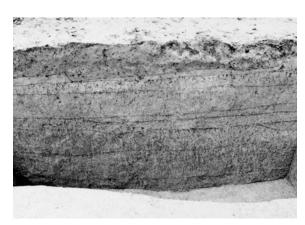
第11区東壁 X=-192952m付近土層堆積状況(北西から)



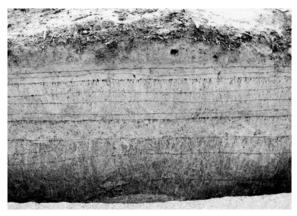
第12区東壁 X=-192970m付近土層堆積状況(北西から)



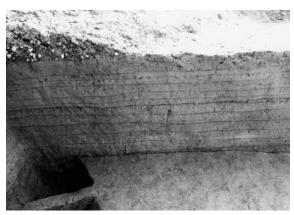
第13区東壁 X=-192999m付近土層堆積状況(北西から)



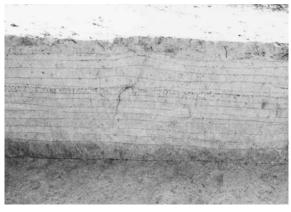
第14区東壁 X=-193021m付近土層堆積状況(北西から)



第16区東壁 X=-193016m付近土層堆積状況(北西から)



第15区東壁 X=-193035m付近土層堆積状況(北西から)



第15区東壁 X = -193044 m付近土層堆積状況(北西から)



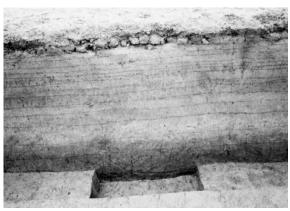
第17区西壁 $X = -192980 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(南東から)



第17区西壁 $X = -193007 \, m$ 付近土層堆積状況(南東から)



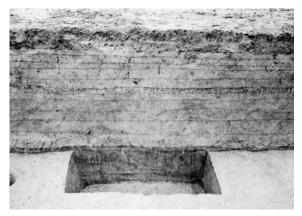
第18区東壁 X=-193064m付近土層堆積状況(北西から)



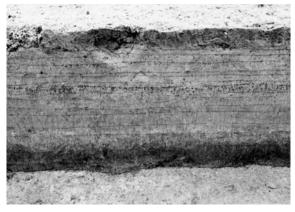
第18区東壁 X=-193084m付近土層堆積状況(北西から)



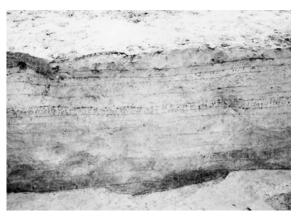
第19区東壁 X=-193122m付近土層堆積状況(北西から)



第20区南壁 Y=-67366m付近土層堆積状況(北東から)



第21区南壁 Y=-67410m付近土層堆積状況(北東から)



第21区南壁 $Y = -67401 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北東から)



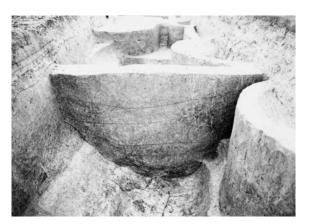
第22区 全景(北東から)



第22区 全景(南西から)



第22区 SD-57(北東から)



第22区 SD-57東セクションベルト土層堆積状況(南西から)



第22区 SD-57中央セクションベルト土層堆積状況(北東から)



第22区 SD-57西セクションベルト土層堆積状況(東から)



第22区 SD-62土層堆積状況(南西から)

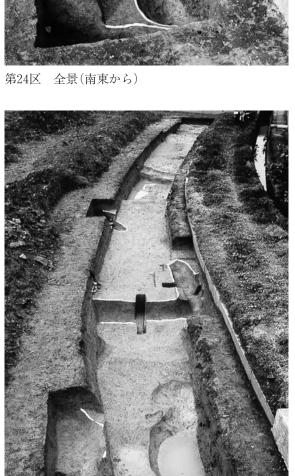


第23区 全景(北東から)



第23区 全景(南西から)





第24区 SD-60周辺弥生時代遺構(東から)



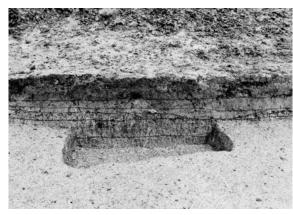
第24区 全景(北西から)



第24区 SK-86周辺弥生時代遺構(西から)



第22区西壁 X=-193058m付近土層堆積状況(南東から)



第22区北壁 Y = -67294m付近土層堆積状況(南から)



第22区北壁 Y=-67278m付近土層堆積状況(南東から)



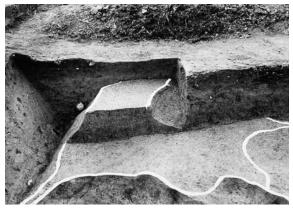
第23区 SD-56土層堆積状況(南西から)



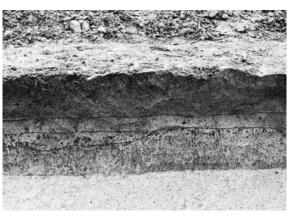
第23区東壁 土層堆積状況(南西から)



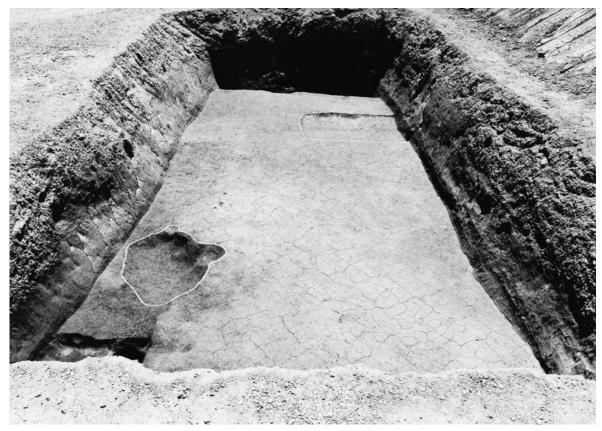
第23区西壁 $X = -193042 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(東から)



第24区南壁 $Y = -67250 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北から)



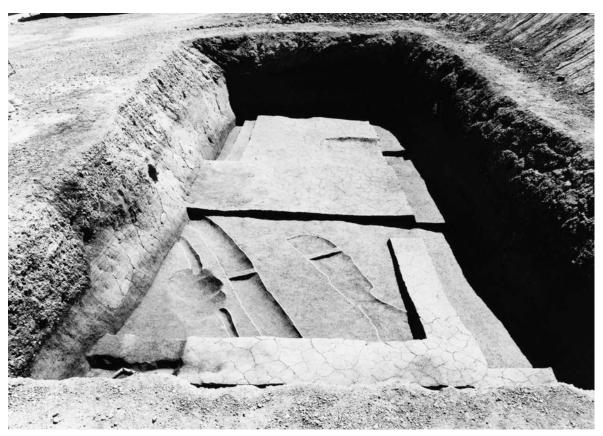
第24区南壁 Y = -67254m付近土層堆積状況(北から)



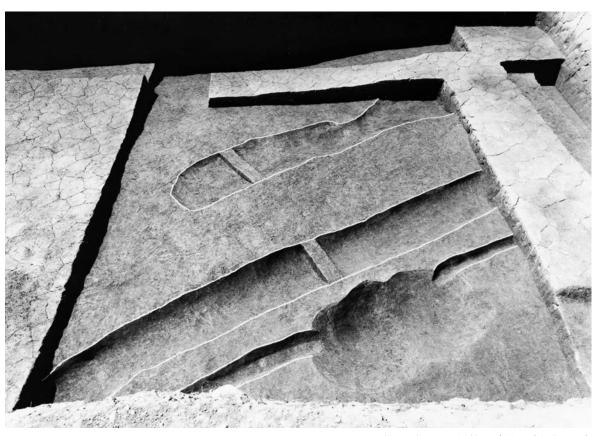
第25区 第1遺構面全景(北東から)



第25区 第1遺構面全景(南西から)



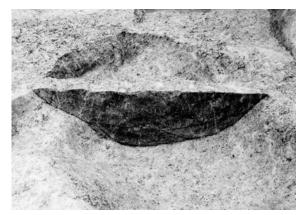
第25区 第2遺構面全景(北東から)



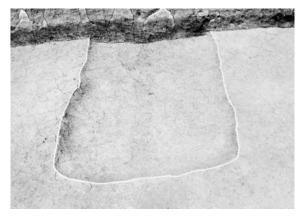
第25区 北半部第2遺構面(南東から)



第25区 SK-87(南西から)



第25区 SK-87土層堆積状況(南西から)



第25区 SK-88(南東から)



第25区 SK-88土層堆積状況(北東から)



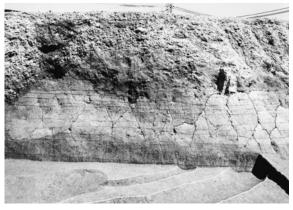
第25区 SD-63(南東から)



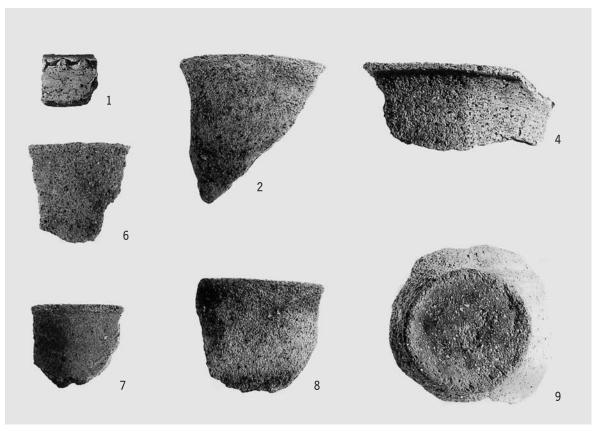
第25区 SD-63土層堆積状況(南東から)



第25区 SD-64土層堆積状況(南から)



第25区東壁 $X = -192872 \,\mathrm{m}$ 付近土層堆積状況(北西から)



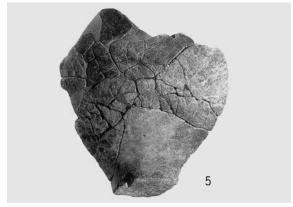
SD-1出土遺物 縄文土器(1深鉢)、弥生土器 $(2\cdot 4壺、6\sim 9甕)$



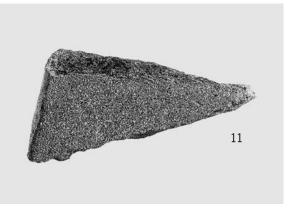
SD-1出土遺物 弥生土器(5壺)



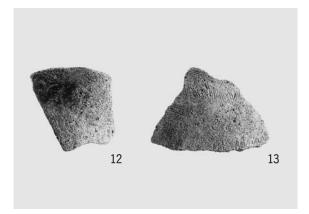
SD-1出土遺物 弥生土器(3壺)



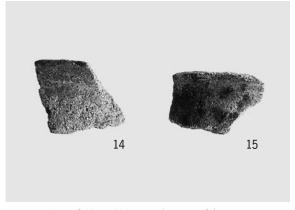
SD-1出土遺物 弥生土器(5壺)



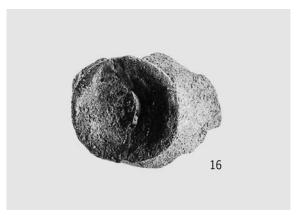
SD-1出土遺物 石器(11砥石)



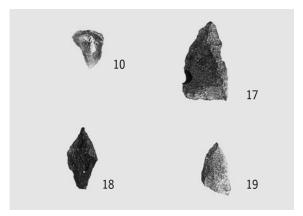
SD-2出土遺物 弥生土器(12·13壺)



SD-2出土遺物 弥生土器(14・15甕)



SD-2出土遺物 弥生土器(16甕底部)



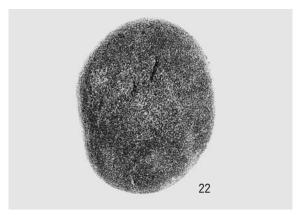
SD-1出土遺物 石器(10石鏃?)、 SD-2出土遺物 石器(17~19石鏃)



SK-9出土遺物 弥生土器(20壺)



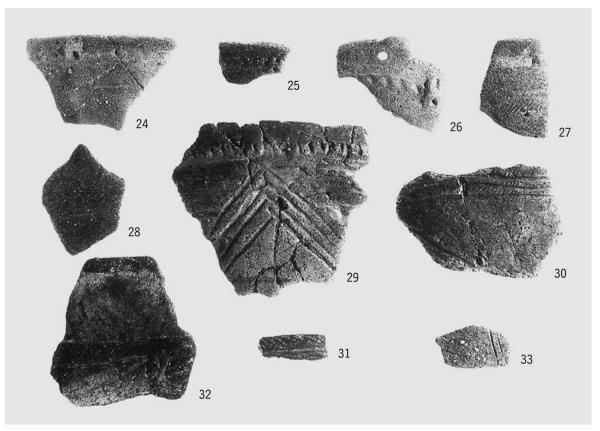
SK-9出土遺物 弥生土器(21壺底部)



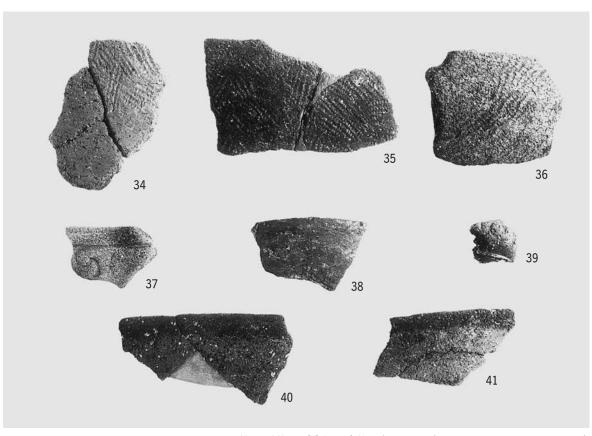
SB-1 P-21出土遺物 石器(22叩石)



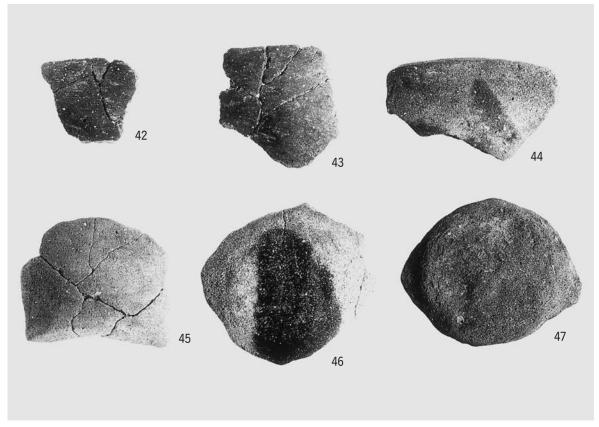
SB-2 P-31出土遺物 弥生土器(23甕)



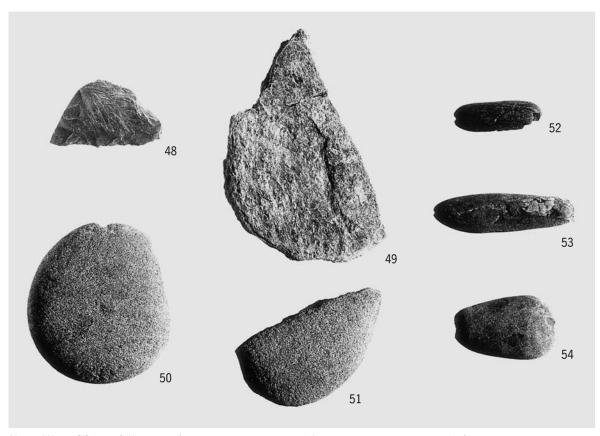
第1区第6·6b層出土遺物 縄文土器(24~33深鉢)



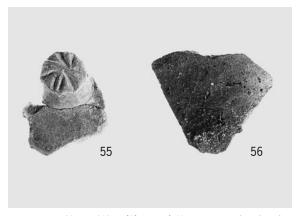
第1区第6b層出土遺物 縄文土器(34~36·38~41深鉢、37鉢)



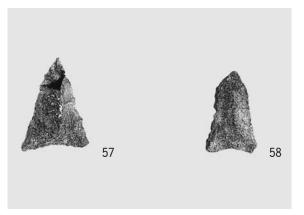
第1区第6b層出土遺物 縄文土器(42深鉢、43鉢、44浅鉢、45~47底部)



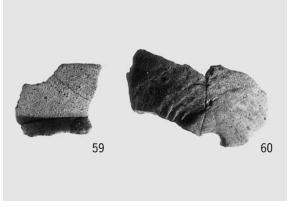
第1区第6b層出土遺物 石器(48スクレイパー、49石鍬、50・51叩石、52~54石錘)



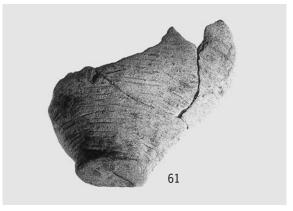
第3区第4層出土遺物 土師器(55高杯)、 第4区第3a層出土遺物 備前焼(56擂鉢)



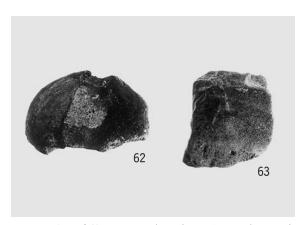
第4区第6層出土遺物 石器(57・58石鏃)



SD-7出土遺物 土師器(59甕、60有孔鉢)



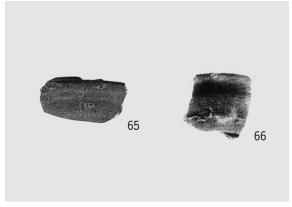
SD-7出土遺物 土師器(61底部)



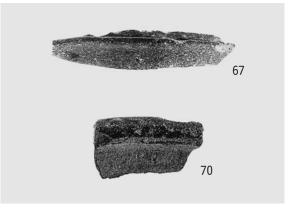
SD-3出土遺物 土師器(62皿)、瓦質土器(63擂鉢)



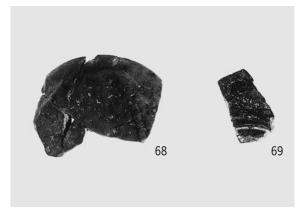
SK-21出土遺物 須恵器(64甕)



第5区第5b層他出土遺物 須恵器(65杯身)、瀬戸(66灰釉皿)



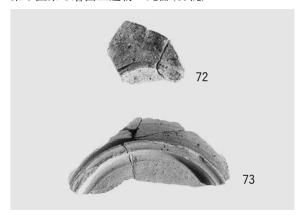
第6区第5c層出土遺物 須恵器(67杯身)、 第6区第3層出土遺物 東播系須恵器(70こね鉢)



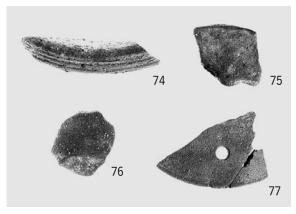
第6区第5c層出土遺物 土師器(68皿)、 第6区第4層出土遺物 瓦器(69椀)



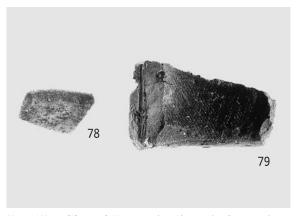
第7区層位不明遺物 弥生土器(71壺底部)



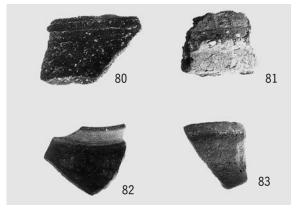
第9区第4c層出土遺物 瓦器(72椀)、 第11区第5a層出土遺物 須恵器(73杯身)



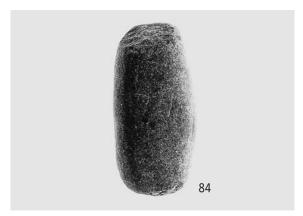
SK-53出土遺物 土師器(74壺)、 第12区第 5 b層出土遺物 土師器(75·76壺、77高杯)



第13区第5a層出土遺物 瓦器(78椀)、瓦(79丸瓦凹面)



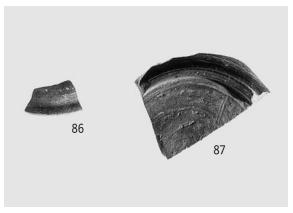
第14区第6a層出土遺物 縄文土器(80·81深鉢)、 第14区第4層出土遺物 須恵器(82壺)、土師器(83皿)



第14区第5b層出土遺物 石器(84叩石)



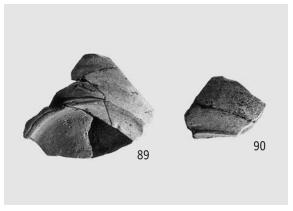
第16区第5b層出土遺物 土師器(85甕)



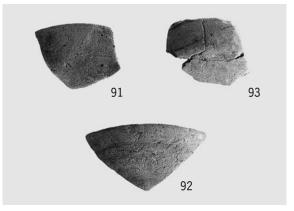
SD-37出土遺物 須恵器(86杯蓋、87杯身)



SD-37出土遺物 須恵器(88杯身)



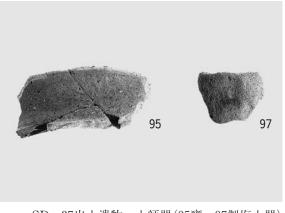
SD-37出土遺物 土師器(89·90杯)



SD-37出土遺物 土師器(91~93皿)



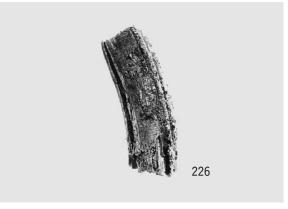
SD-37出土遺物 土師器(94甕)



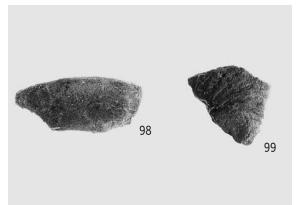
SD-37出土遺物 土師器(95甕、97製塩土器)



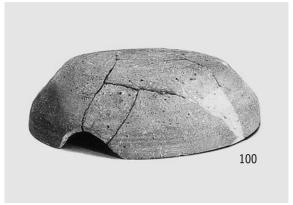
SD-37出土遺物 土師器(96鉢)



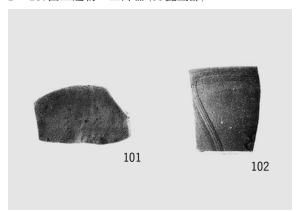
SD-37出土遺物 226馬歯



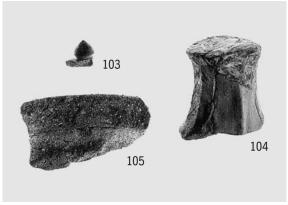
SD-43出土遺物 土師器(98甕)、 P-167出土遺物 土師器(99甕底部)



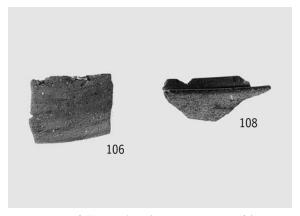
第15区第5b層出土遺物 須恵器(100杯蓋)



第15区第 4 a層出土遺物 土師器(101皿)、 第15区第 1 層出土遺物 中国製青磁(102碗内面)



第21区第 5 層出土遺物 須恵器(103杯蓋)、 土師器(104高杯、105甕)



SD-15出土遺物 須恵器(106杯蓋、108杯身)



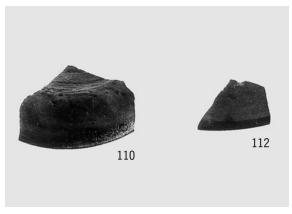
SD-15出土遺物 須恵器(107杯身)



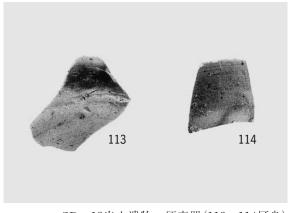
SD-13出土遺物 須恵器(109杯蓋)



SD-13出土遺物 須恵器(111杯蓋)



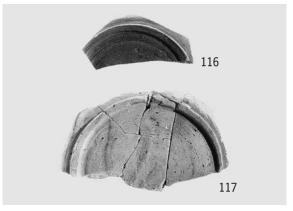
SD-13出土遺物 須恵器(110·112杯蓋)



SD-13出土遺物 須恵器(113·114杯身)



SD-13出土遺物 須恵器(115杯身)



SD-13出土遺物 須恵器(116·117杯身)



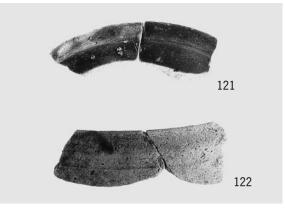
SD-13出土遺物 須恵器(118高杯)



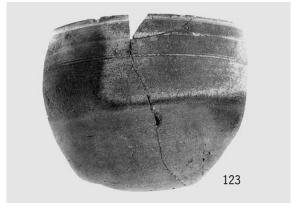
SD-13出土遺物 須恵器(119高杯)



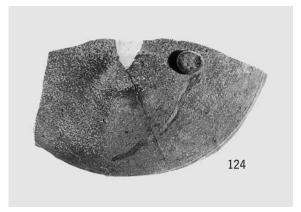
SD-13出土遺物 須恵器(120壺)



SD-13出土遺物 須恵器(121甕、122鉢)



SD-13出土遺物 須恵器(123鉢)



SD-13出土遺物 須恵器(124平瓶)



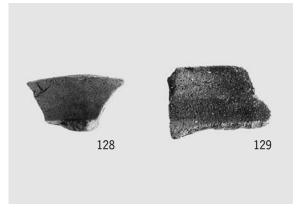
SD-13出土遺物 須恵器(125平瓶)



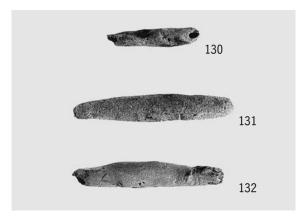
SD-13出土遺物 須恵器(126把手)



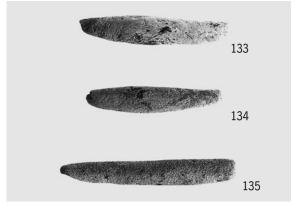
SD-13出土遺物 須恵器(127甕)



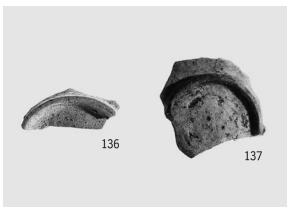
SD-13出土遺物 土師器(128·129甕)



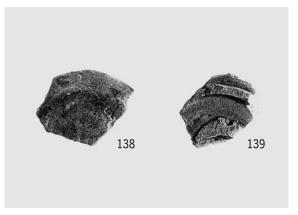
SD-13出土遺物 土製品(130~132土錘)



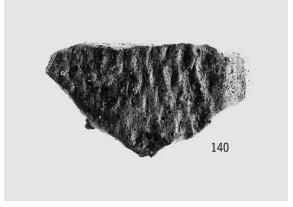
SD-13出土遺物 土製品(133~135土錘)



第17区第5a層出土遺物 土師器(136椀)、瓦器(137椀)



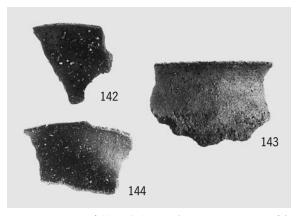
第17区第2層出土遺物 土師器(138皿)、 第17区第4a層出土遺物 瀬戸(139灰釉皿)



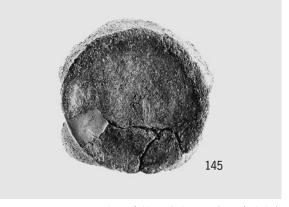
第17区第5層出土遺物 瓦(140平瓦凸面)



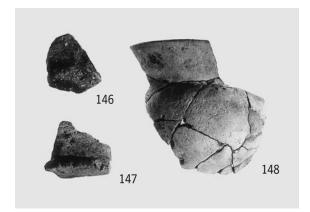
第17区第3層出土遺物 石器(141石鏃)



SD-23出土遺物 弥生土器(142壺、143·144甕)



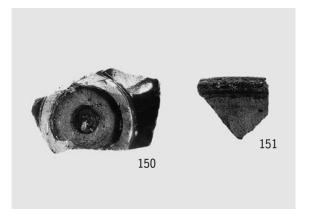
SD-23出土遺物 弥生土器(145甕底部)



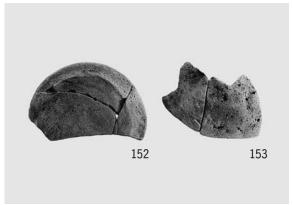
SD-24出土遺物 弥生土器(146壺底部、147鉢底部)、 SD-28出土遺物 土師器(148壺)



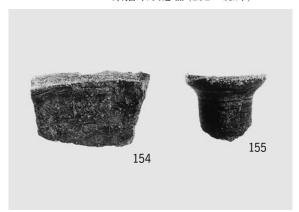
SD-28出土遺物 土師器(149脚部)



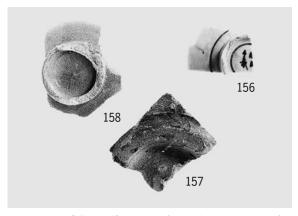
SD-10出土遺物 中国製青磁(150碗)、 東播系須恵器(151こね鉢)



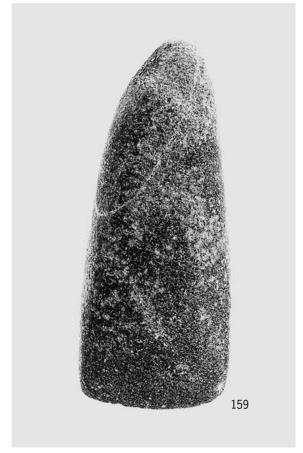
SD-10出土遺物 土師器(152·153皿)



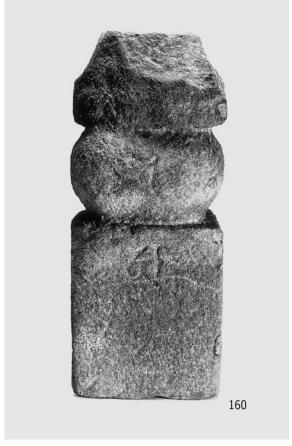
SD-10出土遺物 備前焼 (154擂鉢、155徳利)



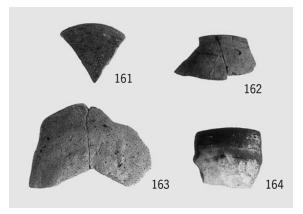
SD-10出土遺物 肥前系陶磁器 (156染付碗、157陶器鉢) 瀬戸 (158陶器碗)



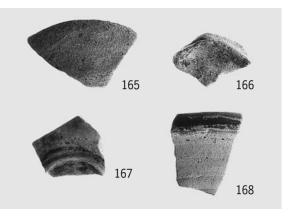
SD-10出土遺物 石器(159石斧)



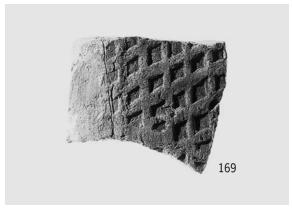
SD-10出土遺物 石造物(160-石五輪塔)



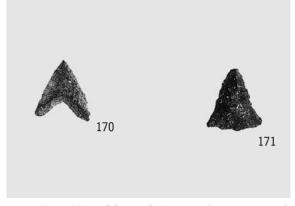
第18区第 5 a層出土遺物 土師器(161皿)、 第18区第 4 c層出土遺物 土師器(162~164皿)



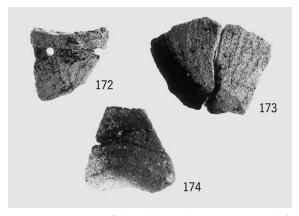
第18区第3・5層出土遺物 土師器(165皿、166椀)、 瓦器(167椀)、東播系須恵器(168こね鉢)



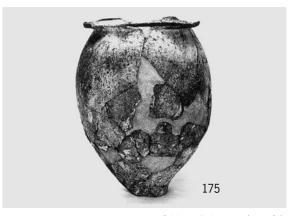
第18区第5b層出土遺物 瓦(169平瓦凸面)



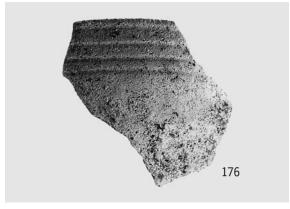
第18区第5b層出土遺物 石器(170·171石鏃)



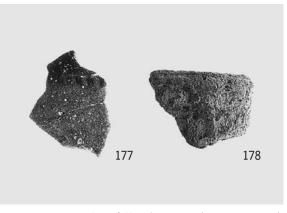
SB-3 P-143出土遺物 弥生土器(172壺、173·174底部)



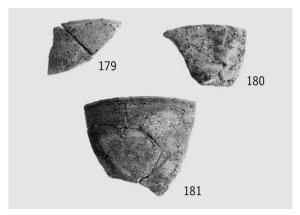
SB-3出土遺物 弥生土器(175甕)



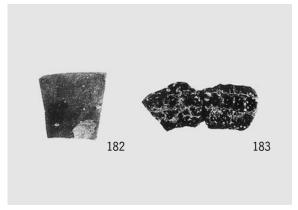
SB-3 P-143出土遺物 弥生土器(176鉢)



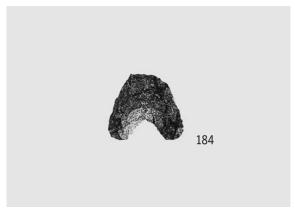
SB-3出土遺物 縄文土器(177·178深鉢)



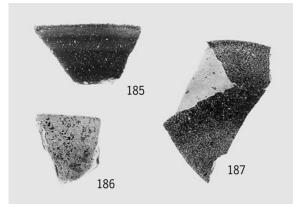
SD-33出土遺物 土師器(179・181杯、180皿)

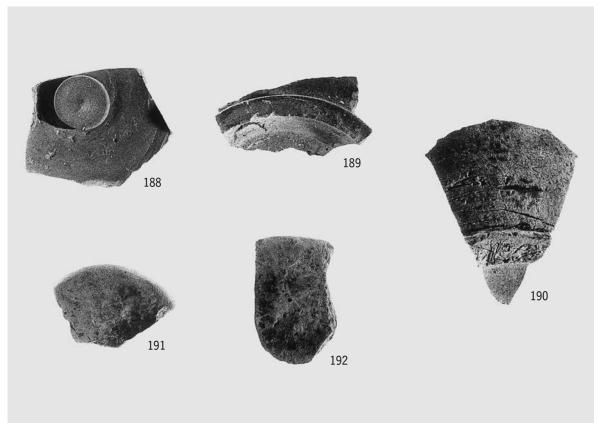


SD-33出土遺物 須恵器(182壺)、 縄文土器(183深鉢)



SD-33出土遺物 石器(184石鏃)

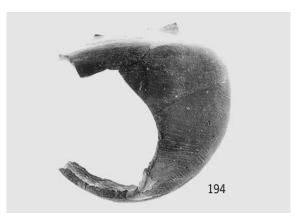




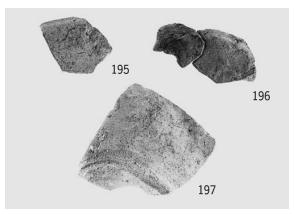
第19区第5層他出土遺物 須恵器(188杯蓋、189・190壺底部)、土師器(191・192皿)



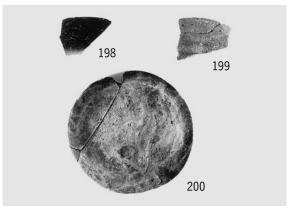
SD-57出土遺物 須恵器(193杯蓋)



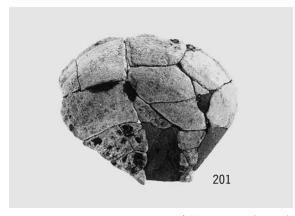
SD-57出土遺物 須恵器(194壺)



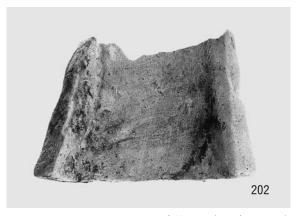
SD-57出土遺物 土師器(195杯、196皿、197鉢)



SD-57出土遺物 黒色土器(198椀)、 土師器(199・200皿)



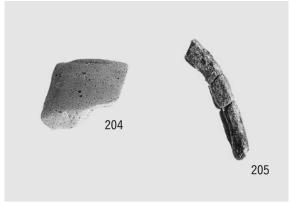
SD-57出土遺物 土師器(201皿)



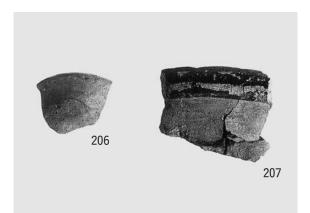
SD-57出土遺物 瓦(202丸瓦凹面)



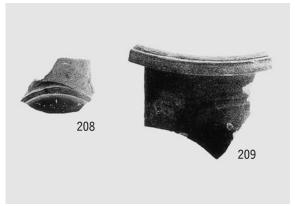
SD-57出土遺物 石器(203石錐)



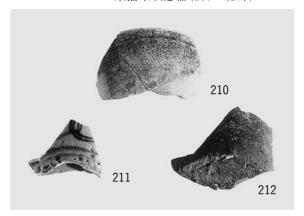
SD-61出土遺物 須恵器(204杯身)、 土師器(205脚部)



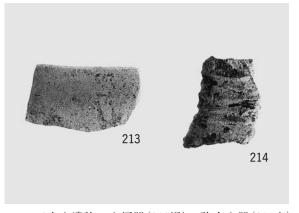
SD-62出土遺物 土師器(206皿)、 東播系須恵器(207こね鉢)



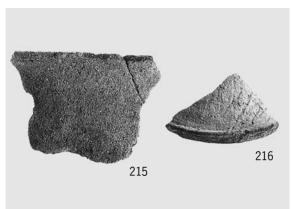
SK-81出土遺物 土師器(208杯)、 SK-76出土遺物 肥前系陶器(209甕)



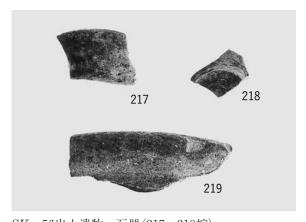
SD-56出土遺物 肥前系陶磁器 (210陶器碗、211染付碗)、 備前焼 (212壺)



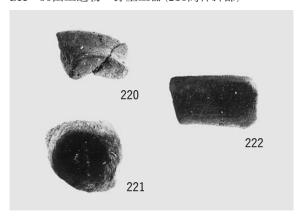
SD-56出土遺物 土師器(213堝)、弥生土器(214壺)

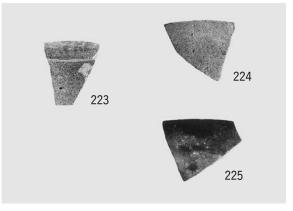


SK-86出土遺物 弥生土器 (215甕)、 SK-56出土遺物 弥生土器 (216高杯脚部)



SK-56出土遺物 瓦器(217・218椀)、 土師器(219釜)





第25区第 5 a層出土遺物 須恵器(223杯蓋)、 第25区第 4 b層出土遺物 土師器(224・225椀)

平成22年3月31日発行

川辺遺跡 第10・11・12・13次発掘調査報告書

編集·発行 財団法人 和歌山市都市整備公社

印 刷 中和印刷紙器株式会社

©財団法人 和歌山市都市整備公社2010